

東方機械竜 ～孤独な戦士たち～

(自称)ライダーオタク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全てを失い、兵士として戦場を駆け、戦場で散った一人の少年。彼は神の手によつて、新たな世界へと転生させられる。

その世界で彼が掴むのは、希望か、絶望か…

目次

始まり〜Welcome to dream land〜	
プロローグ「夢と終わりと…」	1
Ep. 1「The new beginning」	5
Ep. 2「説明と出会いと初戦闘」パート1	11
Ep. 2「説明と出会いと初戦闘」パート2	16
Ep. 3「尋問？ああ、そういうのいいんで」	23
Ep. 4「宴会」	28
Ep. 5「はじめての弾幕ごっこ」	37
Ep. 6「Weapon rise」	49
Ep. 7「飛蝗の戦士」	63
Ep. 8「ホットでHeatな新兵器」	70
Ep. 9「束の間の休息」	79
Ep. 9「共闘」	85
Ep. 10「電光と斬撃」	90
Ep. 11「危険なH」	99
Ep. 12「黒蝗の逆襲、鉄竜の追走」	108
Ep. 13「駆けるは雷蝗、荒るるは裂牙」	117
Ep. 14「これから」	134

始まり〜Welcome to dream land

プロローグ 「夢と終わりと…」

???
side

俺は今、真っ暗な空間にいる。なにもない、空っぽで真っ暗な空間

…

ふと、闇の奥に光が見えたような気がして、俺は歩き出した。しばらく歩くと、光の中に、3つの人影が見えた。1組の男女と、俺より3〜4歳若い少女。親子だろうか。楽しそうに会話している。なぜか、ひどく懐かしい。

すると、右側から光が。見ると、俺が5人の人と話している。見覚えのある顔ばかりだ。俺の部下で、友達で、大事な仲間達だ。

ノイズが走る。

目の前の景色が変わる。幸せそうな光景から、一変、血塗れの少女を抱き寄せ、静かに涙を流す俺の姿。周りには、少女の親子らしき男女、俺の仲間達、名も知らない敵兵。全員、血を流し、ピクリとも動かない。

「う…あ、あ……」

嫌だ。この先を見たくない。だが、俺の願いとは反対に、映像は進んでいく。今にも死んでしまいそうな少女は、泣いている俺の頬に手を伸ばし、何かを呟く。何と言っているかは聞こえない。俺の涙を拭い、微笑みながら、少女は動かなくなった。

またノイズが走る。

今度は、俺の隣に女性がいる。整えられた長いブロンドの髪の毛、きれいな女性。俺と談笑してる。よく見ると手を繋いでいる。いつか本で見た、『恋人つなぎ』とかいうやつだ。本当に楽しそうに笑っている。

三度、ノイズが走る。

先程楽しそうに俺と話していた女性が、血に塗れて倒れている。そ

の近くには、返り血を浴びて真っ赤になった俺が。その中でも右手は、他よりも濃く赤に染まっていた。

「や、めろ……………」

映像の中の俺は、倒れている女性に近づく。そして、赤く染まった右手で、彼女の心臓を…

「やめろオオオオオオ！」

「ハッ！」

気がつくのと、俺はベッドの上だった。周りに広がるのは、殺風景な自室のみ。

「ハア…ハア…夢、か…」

自分の顔を触ると、目じりあたりが濡れていた。泣いていたのか？

「…………もう、こんな時間か」

すぐに顔を洗い、服を着替える。机の上に置いてある仲間達の遺品を手にとつて、部屋を出る。

(余計な感情は捨てる。ここから先は戦場だ)

ドッグタグをポケットにしまい、整備場へと向かう。

数時間後…

「チッ、もう追いついてきたのか」

荒廃した都市の中を一機の竜を模したロボットが走りぬける。右フオートン・グラディエーター手に諸刃の光剣、左手に片刃の振動剣を携え、肩に連射式光線銃をサイプロ・ブレード装備し、音を置いて駆け抜ける水色のラインの走る銀灰色の兵器。俺の相棒、『マシン・ドラゴン01 Photon』だ。

ただ今、俺は追われている。

先程、同時に出撃した5機のバトルアーマーを全て叩き斬つて、スクラップに変えたせいでこうなったのだが、別に後悔はしていない。そもそもぶっ潰す予定だったし。整備場のオッサンや宇佐美教官など、いい人もたくさんいたけど、ほとんどあまり好感の持てないやつばっかだった。

『レン、何やってんだ☒』

オッサンが通信で話しかけてくる。モニターは切っているから、顔は見えない。

「悪いなオッサン、こんなことしちまって。世話になった」

『レンくん！』

若い女性の声。この声は…

「宇佐美教官…」

『バカなことをしないで！早く投降しなさい！』

いつもは冷静な彼女が、珍しく焦っている。いや、怒っている？

「それは上からの命令ですか？教官」

『いいえ、私の意思よ』

いつもの教官からは想像もできない弱々しい声だった。

『もしこのまま抵抗し続ければ、確実にあなたは反逆者として殺されるわ。これは私のワガママだけれど、あなたには死んで欲しくない、居なくなつて欲しくないの…だからお願い、すぐに投降して…』

「…俺は既に5人殺してる。戻つたところで処刑されるのがオチだ」

『…私になんとかする。最悪、私の首で「ふぎけんな」え…？』

間の抜けた教官の声。俺はモニターを起動する。画面には目に涙をためた教官の顔が。

「アンタさつき、俺に死んで欲しくないって言ったよな？俺だつて同じだ」

だつてアンタは、俺を拾つて、いろんなことを教えてくれた、大切な義姉あねなんだから…

「なあに心配いりません。俺はそー簡単にはくたばりませんよ。…またいつか連絡入れます」

『…3日に1回で許してあげる』

「了解♪…元気だな、教官、いや…蓮音姉さん」

俺は通信を切る。

「さて…始めますか」

俺は振り向き、いつの間にか背後にいた機械の大群に突撃する。

自分で言うのもなんだが、そこから先は戦闘ではなく蹂躪だった。迫ってくる金属の塊を、切り飛ばし、撃ち抜き、殴り砕き、蹴り貫き、壊し、壊し、壊し、壊した。

「これで最後……」

残った一体の頭を潰し、完全に動きを止める。

「あとは…(ビービービー!) 警告…?」

突然の警告。怪訝に思い、辺りを見回す。

それが、間違いだった。

辺りを見回して、何を警告していたのかを理解した。

ミサイル。それも、飛行速度は音速を超える巡航ミサイル。2つ3つではなく、何百台もある。

「うっそだろオイ☒」

慌てて向きを変え、離脱しようとするが、

ガアンツ!

(しまっ…さっきの戦闘でもう限界が…!)

ガレキにつまづき、体勢を崩してしまう。そこを無慈悲に、ミサイルの雨が襲いかかる。

(ごめん、姉さん…約束、守れそうにないや…)

ドガアン!ドゴオン!

爆発に巻き込まれ、機械の鎧が吹き飛ぶ。そんな中で俺が最後に見たのは、フードを被った誰かが爆風に飲まれる光景だった。

「君は、このまま死なせるには惜しい。もう一度、やり直してみないか?」

そんな声が、聞こえた気がした。

Ep. 1 「The new beginning」

「あ……ここは……？」

目が覚めると、俺の目の前には真っ白な空間が広がっていた。どこまでも続いていそうな、広大で真っ白な空間。

「やあ、お目覚めのようだね」

誰かが俺に話しかけてくる。声の主を探すと、俺の後ろに見覚えのあるローブの男の姿があった。

「アンタは……？」

「自己紹介の前に、警戒を解いてくれないかな？ そうも殺気を向けられると、こちらでも緊張してしまうよ」

どうやら、バレていたようだ。出来るだけ気づかれないように殺気を抑えていたのだが。

（殺気はかなり抑えてた。それに気づくということは、少なくともそれほどの実力はあるようだな）

相手の力は未知数。見たところ相手は、貧弱そうに見える細身。しかし、人は見かけによらないとも言うし、あのローブの下に武器を隠している可能性もある。ヘタに逆らえば、こっちが危険に追い込まれかねない。ここは慎重に行くべきか……

「すまない。初対面の人間を相手にすると、警戒してしまう癖があったな……」

「その癖は兵士、いや戦士として持つておくべきだと思うがね。エル・ドライア・デフォキス君」

コイツ、何故俺の名前を…☒

「ああ、勘違いしないでほしい。君の素性を調べたわけじゃない」

「ならば、何故知っている。あれは義姉さんがつけてくれたものだ。義姉さんと俺しか知る人間はいない！」

目の前の男は少し黙り、

「…見てきたからね、君を」

「は……？」

「私の名はクロノス。並行世界とその時間軸を管理する、所謂時空神

という者だ」

俺は最初、男、クロノスの言っていることが理解できなかった。

「は……？神……？何を言ってるんだ？」

「だから言葉通り、私は君達が神と呼ぶ存在、その中でも時間と空間を司る者だ」

だめだ。理解が追いつかない。

「いやいや、いきなり「私は神です」なんて言われて納得できるわけないから」

「フム…なら、証拠を見せよう」

そう言って、男は右手の指を鳴らした。するとさつきまでただ真っ白いだけだった空間が、家具が置かれ、人が充分に生活できる設備の整った部屋へと変わった。

「なんつじやこりやあ……」

「これが私の力。そもそもこの空間自体が私の管理する世界の一つだからね」

ハッハッハ、デタラメすぎんだろ……

「これ見ちまったら信じるなっつーのがもう無理だよ……」

「フフ、信じてもらえて嬉しいよ」

「ハア、で？何の用だ？」

「その前に一つ、君に言っておきたいことがある」

なんだ？まあ、予想はつくが……

「君は、既に死んでいる」

です よ ね

「…あまり驚いていないようだな」

「いや見てたなら分かると思うけど、あんな状況で生き延びられるわけがないでしょ」

長時間の大規模戦闘でボロボロになったバトルアーマーに向かって巡航ミサイル数百発だぜ？逆に生きていられる方がおかしい。人間辞めてるってレベルでおかしい。

「そう…だな、生き延びられるわけ…無いよなあ……」

ああ無理、絶対に無理。アンタならわからんが。

「…そろそろ、本題に戻っていいかな？」

あ、そうだった。

「それで、何の為に俺をここに呼んだんだ？」

クロノスは一拍置いて、

「君に、頼みがある」

そう言った。

「頼み…？」

「…君の世界の日本軍は知っているな？」

あのゲス供か…思い出したくもない。

「…ゲスの話がしたいだけか？」

「いいや。実は、彼らの動きが少々不穏になっているんだ」

不穏…？

「結論から言うと、彼らは並行世界へ移動する技術を完成させ、ある世界へ侵攻しようとしているんだよ」

「ちよつと待て。並行世界へ移動する技術…？そんなもの、俺は知らないぞ」

極秘事項だった…？いやでも、あのザルセキュリティだぞ？プログラミングなんかしたこともない俺でもそのへんのパソコンで突破できちゃったほどのザルだぞ？「極秘情報」とか書かれたファイル根こそぎ持ってたけど、そんなんなかったぞ？

「まあ君が知らないのも無理はない。」

その技術は、君の死後に完成したのだから」

…あーそーゆーことね、完全に理解した。つか、死後？

「なあクロノスさんよお、あの世界、俺が死んでからどれだけ経ってる？」

クロノスは顎に手を当て、考えるような素振りをして、

「うーん、3年くらいかな」

「3年…だいぶ経ってるな」

蓮音姉さん、元気にしてるかな…

「ンツンン、感傷に浸っているとこ悪いが、私の話を聞いてくれないかな？」

あ、そうだった。

「悪い、何の話だったっけ？」

「ハア、ちゃんと聞いてくれ…、君んとこの軍隊さんが並行世界を移動する技術を開発して、別世界に侵攻しようとしているって言う話」

「ああ、はいはい。んで？その別世界ってどこよ？」

「忘れられたモノ達の楽園、幻想郷」

幻想郷…？何処だ一体…？

「知らないようだね。『東方Project』と呼ばれる弾幕シューティングゲーム…って、君のいた場所ではこう言ったものは存在自体がほとんど無くなっているんだったね」

「そーゆーのは別にいいんだよ。…あのガス供は、そこで何をしようとしてる？」

「それはね…」

～時空神説明中～

…ということなんだよ」

話を聞いて、俺の頭の中からあらゆる感情が失踪した。もし鏡で自分の顔を見たら、多分それは能面のようになっているだろうし、目のハイライトは何処かへ消えているだろう。当たり前だ。ある程度予測はしていたが、それ以上のことを聞かされたんだから。

「おーい、エルクーん？顔がなんか怖いぞー。どうしたー？」

「なんでもありませんよクロノスさん。ちよつと思つてたよりもやろうとしてた事がガス過ぎて驚いているだけです」

なるほど、幻想郷は女性人口が比較的多いのはわかったし一部の女性には能力持ちである事も理解した。だが、だからって「ピー」しようつてのはマズイよなあ。社会的にアウトだよなあ。コレハセイサイヲクワエルヒツヨウガアリマスネエ…

「まあまあまあ落ちて着いて！君に頼みたい事って言うのは彼らを倒す事だから！思う存分ブツ潰しちやっついていいから！」

「ワカリマシタア、思う存分ブツ殺シチャイマスヨオ♪」

「落ちて着けエ！」

5分後

「すいません、見苦しいところを見せて」

「うん、ホント次からはやめて。怖いから。怖いから。大事な事だから3回言うぞ、怖いから」

「わ、分かりました…」

クロノスの異様な気迫に、ちよつとビビってしまった。

「んで、なんかまだあんの?」

早くあのゲス供ごころ、潰しに行きたいんだけど。

「…今絶対不穏な事考えたよね。まあそれはいいとして、向こうには能力持ちがいる事は分かってるよね?」

「ああ。あと、妖怪とか言う異形もいる。それが?」

「いやさ、君生身で戦うつもりだったの?死ぬよ?例え改造人間だったとしても死ぬよ?」

「大丈夫だ、問題ない。俺には相棒がいる、アイツを使えば…」

「そのセリフはアウトだバカ、二重の意味で。それに、あんなデカブツホイホイ出せるわけじゃないでしょうが。ただでさえ山中の狭い立地なんだから…、それに、使えるかも分からないほど、ボロボロなんだぞ」

「それで、能力ってか?」

「that's right!もちろん、君の相棒も使えるようになるよ」

そうか。ならば、答えは一つ!

「いいだろう、ただし、こっちの要望にも応えてもらう」

「いいよー」

いや軽いなオイ。

「それで?君の希望は?」

「じゃあまず一つ、相棒の能力を使用できるようにしてくれ。アイツとは、長年の付き合いだからさ。次に、状況に応じて様々な使い方ができる能力。種類は何でもいい。最後に、肉体の再生速度を上げてくれ。襲撃された時に傷のせいで寝込んで出撃できませんでした、なんてのは嫌だからな」

「…それで全部かい?それじゃ、君に与える能力は…」

『機竜を纏う程度の能力』、『水晶を錬成する程度の能力』、あとは非常に高い再生速度、これで十分だね?」

「ああ」

「あと君の相棒だけど、あの大ききじやとても町中を歩かせるなんてのはできないからちよつと小さくするね」

「了解。どんな感じなのかは、向こうで楽しみにしてるよ」

俺は部屋から出ようとする。が、クロノスに呼び止められた。

「もう行くのかい?最後にせめて、向こうで名乗る名前を教えてくださいののだが…」

名前、か。考えてなかったな。うーんどうするか……………。水晶か…、そうだ、これにしよう。

「…錬、輝晶きしやう。錬れん。これが、俺の名だ」

「…そうか。いつてらっしやい、錬。その扉を出れば、すぐに着くよ」
クロノスは少し微笑んで言った。

「ありがとよ。でもお前が言うど気持ち悪いな」

「最後の一言は余計だな」

クロノスの文句をスルーして、俺は扉をくぐった。扉の先には光が広がっている。この先は未知の世界。何が起こるかはわからない。だが、例え何が起こきようと、俺は止まるつもりはない。奴らを殲滅するまでは……

俺は笑みを浮かべる。凶悪で、残忍で、どこか楽しそうに見える笑みを。歯をむき出しにした、獣のような笑みを。

(楽しみに待ってるよゲス供、地獄を見るその時をな……)

そして、俺の意識は光の中へ溶けていった。

What's the next episode…?

Ep. 2 「説明と出会いと初戦闘」パート1

錬side)

「つと、ここは…て、幻想郷に決まってるでしょうが。にしても、きれいな森だなあ」

目を開くと、森が広がっていた。鬱蒼とはいかないが、無数に並んだ木々の間から木洩れ日が差し込んでいる。見ているだけで心が安らぐ、優しい景色。爽やかな森の香りが、俺の心に溜まった毒を浄化していく。このままここに寝っ転んで、ゆっくり昼寝がしたい。ついそう思ってしまう。

ピロリン♪

そこに、今の状況とは不釣り合いな音が、俺のポケットの中から鳴った。

「あ？なんだってんだよ……」

俺のポケットの中から出てきたのは、

「なんで？なんでスマホがあるの？」

スマホでした。買った覚えも、貰った覚えもない。

「なんでこんなもんが…あ、メールきてる」

スマホをいじっていると、メールが来ていることに気がついた。

「差出人は……クロノス」

何故か何も考えずに削除したくなかったが、抑えて内容を見てみると、

『よう錬！このメールが届いたってことは、無事幻想郷に着いたんだな。えらいぞー、今度よしよししてやろう』

(お断りです)

『さて、幻想郷で生き残るために能力を渡したが、そんだけじゃちと足りないと思つてな、色々送つといた。その辺の茂みに落ちてると思うから、探しておくんなまし』

(ウゼエ、削除しようかな)

指が削除ボタンに伸びるが、なんとか抑え込む。ダメだ、もしかしたらこの後にとっても重要なことが書いてあるかもしれない。削除し

たら大変なことになる。とりあえず、続きを読もう。

『もし分かんないところがあつたら、この番号に電話してね♡してくれないと…怒っちゃうぞ…／／／』

(キモッ)

クロノスのメールの書き方に全俺が引いた。え、何？その書き方で俺が萌えるとも思ってたの？馬鹿なの？仮にお前が女性ならまだわからんが、男にこんなメール送られても嬉しくないんだけど…

「ま、まあとりあえずまずは、他に送られたものを探るか」

3分後…

「こんなもんか…」

あれからそこら辺の茂みをガサゴソしまくって見つけたのが、

「まさかのデザートイーグル…あと、バイクのキー？なんでまたこんなもんが？」

分からん…よし、なんか癩だがクロノスに聞こう。俺はスマホの電話アプリからメールにあつた番号にかけた。

『はくいみんなのアイドル、クロちゃんだや「猫なで声出したんじやねーよ気持ち悪い」ご、ごめんなさい…』

「まあオメーのキモい声は実際どうでもいいんだ。…聞きたいことがあるんだよ」

『何々？もしかして、恋のお悩み？「殺すぞ」じ、冗談だつてばく、もお本気にしちゃって。電話から黒いオーラ流れ出しているんですけども。あと君辛辣だね。結構傷ついたよ?』

「ふざけたこと抜かしてないで教えろ(スルー)。なんでバイクのキーがある?あと、なんでデザートイーグル?」

『サラッとスルーしないでくれないかなあ…もおいいやとりあえず

、スマホ、Dフォンに『バイク』ってアプリ入ってない?』

「ちよつと待て…あつた、たしかにバイクってアプリがある」

『じゃそれ起動して?』

アプリを起動すると、画面にデカデカとバイクを模したマークが映り、電話のプッシュボタンのようなボタンに変わった。ただ、発信のボタンにはバイクのマークに、通話終了のボタンには歯車のマークに

変わっていた。

『起動できたら、8・1・9って入力して』

言われた通りに押すと、何もないとどこかにいきなりバイクが出現した。水色のラインが入っている、ドラゴンのような灰色のバイク。

『それは君専用開発した、私の自信作だ。ちなみにもう名前も決まってる』

…なんだろう、すごく嫌な予感がする。

「…ちなみに、名前はなんなんだ？」

『フッフッフ、聞いて驚くなかれ。そう、その名は、龍・星・号「付け直せバカ」なんでや!』

ダメだった。なんだよ龍星号で、もうちつとマシな名前つけろや。

「ダサイ、センスない、ありきたりの三拍子。ホントに真面目に考えた?」

『考えたわア!これでも大真面目に悩みましたけどお☒』

「悩んだ結果コレかよ。…俺がつけた方がマシかもな」

『ホオ〜ウ、ずいぶん自信があるご様子で。じゃあお前がつけてみる!』

さて、どうしたものか…

(バイクだし、マシンドラゴン?いや、これ相棒と被るな。じゃあ、マシンドラゴン?いやいやまんますぎるだろ。…ドラゴンか…、ドラゴン、ドラゴン、ドラグナー!…ドラグナー?これだ!)

「ライドドラグナー、これはどうだ?」

さて、クロノス氏の反応は?

『チツ。んだよ、俺よりいい名前つけやがって…ぐすん』

随分な落ち込みっぷり。つかクロノスさん、一人称変わってますよ。

「まあまあ、元気出せつて『まあいつまでも落ち込んでるつもりもないけどね!』クロノスう…」

ハエーイ、立ち直りマジハエーイ…

『あ、あと銃だけど、デザートイーグルを基にした改造銃だから、いざという時使ってみるよ。』

はいはい、わかりましたよ。拳銃くらいなら、昔から使っているし大丈夫：

ガサガサ：

「ッ☒」

いきなり背後の茂みから音が鳴った。とつさに腰につつたデザートイーグルに手を伸ばした。茂みの中にいるのが何かはわからないが、警戒しないに越したことはない。

(なんであれ、危険なものであれば撃つ！)

銃のグリップを握るのと同時に茂みからそれは飛び出してきた。

「キュウ〜」

それは小さな恐竜のようなものだった。体色は灰色、体には水色のラインが走っている。頭には一対の角、両腕には大きな爪、小さな尻尾はパタパタと揺れている。金属光沢が見られるところから、生物ではなく機械だと予想できる。

(あれ？コイツもしかして…)

俺は目の前のミニ恐竜の正体にちよつと…いや、だいぶ見当があつた。

「もしかして…相棒か？」

そう問うと、

「キューーイー！」

正解と言わんばかりに俺に飛びついてきた。

「うわおつとつと、よーしよしよし！相棒、お前ちっこくなつたなー。可愛らしくなりおつて嫌いじゃないぞー！」

『あら、可愛い子ね。嫌いじゃないわ！えちよ待ってアンタ誰つかないで拳握ってんの、あ、待ってやめてお願いだから(グシャツ、ドゴツ、バキツ、チュドーンツ、ギューーンツ、ピチューーン！)タコスツ！』
なんかクロノスの断末魔の聞こえた気がするが、気のせいだろう。

く〜♪

すると突然、スマホからアラームが鳴り響いた。(イメージは仮面ライダーローグの変身待機音です。by作者)

「なんだ？」

すると、スマホから先ほどフルボッコになクロノスの声が。

『そ、それはエネミーサーチってアプリの警報音だ。近くに奴らが現れたってことを知らせているんだよ…イタタタ、なんなんだよアイツ、殴るだけかと思ったら電鋸だのビームガンだの取り出しやがって、死ぬかと思つたわ…!』

よく死ななかつたな…

「さて、アプリのレーダーによると、ここから南西か…コイツがなかつたらちと手間だったかもな」

俺はバイク、ライドドラグナーに手を添える。森の中をバイクで突っ切るのは無理がありそうだが、どーせ神（笑）が作った物だ。そんな芸当、いともたやすくやってのけるだろう。

『オイコラお前今神（笑）とか思つただろ訂正しやがれ偉大なるクロノス様と「死んでもやだ」ヒドイツ!』

バイクに跨り、キーを指してエンジンをかける。ヘルメットを被り（安全第一）、ハンドルを握る。何故か頭に相棒が抱きついてくるが、そんな気にならない。

「ギューギューー!」

出発進行とでも言いたいのか、楽しげに叫ぶ相棒。…あとで相棒の名前考えよ。

そして俺も、フルフェイスのヘルメットの下で、獰猛な笑みを浮かべる。

「待ってろよゲスども。絶滅タイムの始まりだ!」

What's the next episode…?

Ep. 2 「説明と出会いと初戦闘」パート2

??side)

「全く、誰の作業なのかしら?」

私、八雲 紫は、この幻想郷の最高峰、「妖怪の山」に来ていた。この付近で空間の歪みのようなものが観測されたのだ。それも、人為的に起こされたものが。何故こんなものが突然現れたのかはわからないが、誰かが結界の内側にムリヤリ入ろうとしている、ということはつきりと理解できる。しかも、ここ最近頻繁に起きている。

「ハア、面倒ごことを増やさないと欲しいわね」

本来なら藍が調査に向かうのだが、その藍本人から、

『たまには紫様が仕事してください、というかしろ』

と、死んだ魚のような目と女性らしからぬ低音で言われた。なんか、断つたら殺しに来そうだったから、今日は私が調査することにした。

「ん、そろそろね…」

そうして歩いているうちに目的地付近に着いたので、今いる紫色の空間の出入りロー「スキマ」を開く。そしてスキマから身を乗り出し、外の様子を見る。

「何かしら、あれ…」

そこには、扉の無い門のようなモノとその周りを護るかのように囲う銃を持った機械の人形。そして、門の中にある灰色のカーテンから次々と出てくる、門を警護するソレとよく似た見た目の機械人形。目で見て分かる違いといえば、持っている銃の見た目だろうか。門から出てくる人形が持っている銃は、門の周りにいる人形のそれとは違い、銃身に銃剣が付いている。

「河童の新兵器?にしては操縦者が近くにいないし…自動操縦?でも、その技術の開発に成功していたなら、山の天狗あたりが報道しているはず。外でもあんなの見たことないし…」

ギョロン

唐突に、人形の一体がこつちを向いた。それを皮切りに他の人形達

も視線をこつちに向けてくる。

(見つかったらやめたか…)

私はスキマから出て、人形達の前に姿を見せる。

「あら、こんにちは。無機質な外来人さん。私は八雲 紫。この幻想郷の管理を行っている者ですわ」

自己紹介をするが、返事は来ない。

機械の人形なのだから当たり前だろうが、少しは反応してほしい。

「…認証開始」

一体の人形が何か呟く。返事かと思ったが、違うようだ。

(何かしら…嫌な予感がする)

そしてそれは、的中することになった。

「ソルジャー全機に到達。顔認証の結果、前方の知的生命体、呼称『八雲 紫』が最重要捕獲対象No. 01と99.9%一致」

何か嫌な呼び方をされたが、そんなことはどうでもいい。さつきから嫌な予感が頭の中を離れない。

「ソルジャー全機に到達」

真ん中のリーダーらしき人形が呟き、そして、

「最重要捕獲対象No. 01を発見。これより、制圧作業を開始する」
全ての人形が、私に銃を向けた…

「オオラアッ！」ドガツシヤアアア！

次の瞬間、木々の間からバイクが飛び出し、先頭で銃を向けていた人形…ソルジャーを轢き飛ばした。あまりにも唐突すぎて理解が追いつかない。ようやく口から出た言葉は、

「は？」

あまりにも間抜けなものだった。

鍊side

どうも、この回でやっと登場できました。鍊です。

俺は今、非常に困惑している。なぜなら、

「あの一、なんでこのバイク、メーターに現在時速600kmとか表示

されてんのにスルスル森の中を抜けられてる訳？」

時速600kmとかいうふざけたスピードで森の中を事故もなく走り抜けているのだ。はつきり言っておかしい。メーターの誤表示かとも思ったが、ウチの超高性能なスマホフォンを使って周りの木々撮影して計測したら、ピッタリ時速600kmと出たので実際その速度で走っているのだろう。

「しかも、これでオート運転とか…ぶっ壊れすぎてませんかねえ？」

オート、つまり自動操縦なのだ。実は俺、スマホの中のデータ確認すんの忘れてたから、バイク乗りながら操作してたのよね、法定速度ぶっちぎりで超えてるバイクの上で（これは乗り手が頭おかしいレベルで頑丈だからできる事です。良い子はマネしないでね、絶対マネしないでね、後生だからマネしないでねby作者）。それでも事故らなかつたのコレのおかげなんよスゴクね？

「まあ、んなことは置いて。さっきから警告音がドンドン強くなってんだけど、もしかしてもうすぐ近くにいたりするのかな？」

『いや置いて、ってできることではないと思うよ？自分で作つていうのもアレだけど、時速600kmって競技用のその2倍くらいだからね？』

開発者さんがなんか言ってるけど、普通に秒速1700mとか出る超兵器運転してピンピンしてる身だから、これぐらいなんてことないんだけどね。

『うんもう規格外くんは黙ってよっか。…なんか私が力貸した奴が想像以上のチートボディ過ぎて忘れてたけど、その警告音がしたってことは、もう近くまで来てるってことだね』

「…ちなみに、どれ位？」

『あと、500mくらいかな？』

…さて、ここで問題です。このバイクは時速600kmという速度で走っています。

そして、粉碎目すべきクソ共地まであと500mです。

では、俺はあと何秒で到着するでしょう？

答えは…

(時速600kmは時速600,000m。これを3600秒、つまり1時間で割ると166.66666…、秒速約167mだ。これで500mを割ると2.994…)
つまり…

(あと3秒しかねえじゃねえかアアア!?!?)

森を出るまで、残り3秒。

(えエエエエ、どーするどーするよオオオ!?!?もう残り3秒って時間無すぎんだろがよオ!ヤバイヤバイどうする、つてもう出口が見えてるウウウ!?!?)

森を出るまで、残り2秒。

(なんかうつすら人混みが見えるな…もういい、アレに突っ込もう!)
森を出るまで、残り1秒。

(こうなったら魔法の言葉、『もうどうにでもなくれ☆』)

そして錬は、考えるのをやめた。

森を出るまで、残り0秒。

「オオラアッ!」ドガツシヤアア!

レーシングバイクの倍の速度で森から飛び出したバイクで先頭で銃構えてたロボット撥ね飛ばして、後ろにいた別のロボットを後輪に巻き込んで鉄クズに変えてようやく停止した。

「事故ってまった…ま、いつか。機械だったし」

別によくはないのだが、思考を放棄したままの錬は対して重要だとは思っていないようである。

「さーと、敵さんはと…あん?」

先程までロボットだった鉄クズを踏みつけながらバイクを降り、周りをを見ると、目の前に女性の姿が現れた。

というか、今の今まで気づいてなかったんかいby作者&クロノス(なんだろ…初めて会うはずなのに、何処かで会ったことがあるのかのような気がする…)

「認証開始…完了。前方の知的生命体に該当する情報、データベース上になし。危険度未知数^{アンノウン}。ソルジャー全機に通達。前方の知的生命

体をXと仮称、攻撃対象をXに変更。殲滅体制に移行せよ」

と、俺が考えごとをしている間にロボット、確かソルジャーだったかがなんか眩いてた。

(…知的生命体って、俺は宇宙人かなんかかよ…失礼だな)

ソルジャー共が持っている銃を構えようとしている。が、「おつそいなあ。早撃ちつつーのはな、こーやんだよ」

俺は眩くと同時に腰のホルスターから素早くデザートイーグルを抜き、弾を装填。すぐに銃を手近なソルジャーに向け、引き金を引く。

銃口から飛び出した鉛玉が音と並走しながら、ソルジャーの金属で覆われた頭を貫き、脳味噌の代わりに詰まっているコンピュータを破壊する。少し遅れて、ソルジャーの頭部が弾け飛んだ。

「…えつと、クロノスさん。この銃、何入ってるの?」

『んーとねー、

炸裂弾』

文字通りの爆弾発言が来た。それ拳銃に込めるものじゃないでしよ。

「もういいや…ツツコむのやーめた」

そして、俺はとにかく銃を撃った。それはもう撃ち過ぎと言えるようなレベルで。弾が切れては変え切れては変えを繰り返し、たまにヘッドショットしながらソルジャー共をぶち抜きまくった。しかし、ここで思わぬアクセシントが起こった。

「あーもう、キリがねえ。弾も切れたし、次やつを入れ…」ゴソゴソ

あれ?弾がない…?

(えエエエエエ嘘でしよ嘘だろ嘘だよねエエここに来て弾切れとかマジか!あ、でももしかしたらクロノスがまだ持ってるかも…)

『ぎーんねーん、アレがストック全部でーす』

「ナチュラルに思考を読むなアアア!というか、弾倉のストック12個だけかよ少な過ぎんだろおがよおお!」

だってあの人形共潰しても潰してもゲートから湧いてくるんだぞ?無限バンダナでもなきや無理ゲーじゃねーか!

「しゃーない、こーなつたら奥の手だ」

『おつ、もしかしてやつと使ってくれるのか?』ソワソワ
「くらいやがれ、『弾がなければ殴ればいいじゃない!』」
『いやそれただの脳筋!それよりちゃんとスマホ見てえ! 打開策なら
入ってるからさアア!』

叫ぶクロノスを無視し、俺は銃身を握ってソルジャーを撲殺(口
ポットにこの表現あつてんのかな)する。ふと近くを見ると、相棒も
その小さな体からは想像できないほどのパワーでソルジャーを粉碎
していく。そんな感じで50体ほどスクラップにした頃、

「ダアアアもうキリがない!おいクロノス!なんかねーのかよ 打開
策!」

『ケツ、やつとかよ…まいーや。とりまドラゴンの横顔の描かれたア
プリ探してみて』

「何、ドラゴンの横顔? (ドゴシヤア!) あ、あつた」

襲いかかってくるソルジャーを殴り飛ばしながらアプリを探す。
と、すぐ見つかった。

『見つけたら、アプリを開いて「0・0・1」のコードを入力!』

「お、おう、0・0・1だな』

アプリを開くと、バイクの時似たようなテンキーが表示された。そ
こに素早く0・0・1と入力する。

『Code photon stand by, ready?』

そんな音声とともに、電子的な待機音が流れる。その瞬間、なんと
相棒がこっちに向かって飛んできた。

「…ウエエイ☒ちよちよ…」

『はいそのまま相棒くんとハイタッチ!』

言われるがまま、相棒とハイタッチする。すると相棒の体がパーツ
ごとに分解され、いつのまにか着ていたスーツに装着される。装着さ
れたパーツは何故か大きくなり、俺の体に合った大きさになる。そし
て全てのパーツの装着が終わり、最後に二本の角を持ったドラゴンの
ようなヘルメットを被り腰にDフォンを取り付けて、ようやく変身が
完了した。

『Dragon warrior complete』

「…なあにコレエ…」

『フツフツ、これぞ、君が相棒くんの能力を最大限に発揮できる状態。その名も、ドラゴン・ウォリアー！君が生前使ってた武器も自由に使用できるZ E ☆ さあ、これを50時間掛けて作ったこの我、クロノス様を崇め奉るのだー！』

「…なんかよくわかんないけど（またスルー）、これならいける気がするー！」

そこから先は、戦闘ということすら生温いたただの蹂躪だった。もちろん、相手もゲートから無数に湧いてくるのだが、俺が蹴りでソルジャーをゲートにぶつけ、そのまま飛び蹴りでぶっ壊してからは完全な消化試合となった。残っていたソルジャーは、全て鉄クズの山と化した。

「ああ、疲れた…今日はもう何もしたくない…」ピピッ

Dフォンを操作し、変身を解除する。アーマーが外れ、相棒の姿に戻る。相棒は着地すると同時に、後ろ向きにすっ転んだ。かわいい。

「あー…ここからどうしよっk「ちよつと、いいかしら…?」「ふえ…?」
さつきチラ見した女がなんか話しかけてきた。クツソ眠みいのに…なんだってんだy…zzz…zzz…」

『次回へ続くー！』

What's the next episode…?

Ep. 3 「尋問？ああ、そういうのいいんで」

紫 side s

私は一体何を見せられているのだろう。大量のソルジャーとかいう機械人形に遭遇したと思ったら、突然割って入ってきたバイクの乗り手がソルジャーと戦い始めた。最初は銃ー私自身、そこまで銃について詳しいわけではないから、種類まではわからないーを使っていたのだが、弾が切れたらしく「弾がなければ殴ればいいじゃない！」と叫びながらソルジャーを殴り続けた。銃で。もうこの時点で頭が痛くなってきたのだが、まだ話は終わらない。なんと戦闘が始まってからずっと喋り続けていたスマホー外の世界を見てきているから、これくらいは知っているーを操作して、以前興味本位で見た某特撮ヒーローのように鎧をつけた：変身したのだ。そこからの私は、考えるのをやめていた。なんだか、考えるだけ無駄だと思ってしまった。「特撮のヒーローが画面から出てきた」、これで納得してしまおうとする自分がいた。ここまで何だかんだ語ってきたが、一言で言い表すなら、

(なんか特撮ヒーロー出てきたけど、ツッコむのめんどくさいから考えるのやーめた)

こんな感じである。

それでいいのか妖怪の賢者by地の文

目の前で行われている無双を何も考えていない子供のような頭で見ていたが、戦闘が終了し目の前の鎧男が装備を解除した瞬間、それまで失踪していた思考が一気に頭の中に戻ってきた。突然のことに一瞬フリーズしてしまっただが、すぐに持ち直し、声をかける。

「あー……ここからどうしよっk」：ちよつと、いいかしら？」「ふえ……？」

気の抜けた声と共に振り返ったのは、灰色の髪を肩まで伸ばした、一見女性の用にも見える顔の男。何故だろう、会ったことがないはずなのに、どこか見覚えがある。まあ、勘違いだろう、と自己完結させて、質問をくりだす。

「こんにちは、私の名前は八雲 紫。この幻想郷を管理している者で

すわ。ところで、

貴方は、何者なのかしら？」

質問をくりだすと同時にスキマを使って背後に回り、男の首筋に手刀をあてがう。これで、彼の生殺与奪の権は私が握った。私の質問に対して虚偽があればすぐに首を切り落とす。そのようなことを伝えたが、男は何の反応も示さなかった。了承しているのだと考え、私は質問…否、尋問に移る。

「…あら、答えにくい質問だったかしら？なら、これならどう？さっきの人形、ソルジャー…だったか、アレについて貴方、何か知っているの？」

応えはない。

「そう、だんまりなのね。でも、忘れたとは言わせないわよ？返答次第では貴方の息の根を止める。さっきは虚偽と言ったけど、だんまりも例外ではないわ」

応答はない。

「あら、まだ答えないのね。自分の命がかかっている状況なのに、のんきなものね」

返事はない。

「…あの、いい加減何か喋ってくれない？ずっとこうしてても話が進まないの分かってる？まさかとは思うけど、貴方分かっててやってるの？」

返事はない…

「(ブチッ) いい加減、なんとか言えやああああ！」ブンブンブン

NO side

いつまで経っても返事をしない鍊に堪忍袋の緒が切れたのか、キラ崩壊としか言いようがないほどに怒り鍊の肩を掴んで揺さぶる紫。人間よりも高い能力を持った妖怪、その中でも大妖怪、賢者といわれるに相応しい能力を持った彼女に加減もされずに思い切り揺さぶられれば、常人なら簡単に首が折れるだろう。しかし、前世から持ってきたアホみたいに頑丈な体を持った鍊には首を折るどころか関節一つにさえ傷をつけられなかった。またそれは、紫が話し始めた辺りか

らずつと夢の世界に沈んでいた鍊の意識を現実に戻すには十分だった。

「んゆ…うふあくあ。誰だよ、人が気持ちよく寝てる時に…」

そして、未だ目が覚めきっていない鍊の不用意な一言が、紫の怒りの火に油を注いだ

「…寝てる？まさか貴方、今の今までずっと寝てたの？立ったまま？人が喋ってるの？」

人が話している最中に寝る。こんな失礼極まりないこと普通の人は絶対にはやらないが、残念なことにはこの男にはそういった常識は持ち合わせていないのだ。

「ああごめん、何も聞いてなかった。もっかい言ってもらえますか？」

…鍊のこの言葉が、紫の怒りのキャンプファイアーにガソリンの入ったポリタンクを投げ入れた。

「…フザけんなよゴラァァ！」

「あべしっ☒」

紫の怒りが込められた鉄拳が、鍊の顔面に炸裂する。もちろん手加減など全くなく、そんな拳をもろに受けた鍊は犬神家のようなポーズで近くの茂みに突き刺さった。

くしばらくお待ちください

「ふう…。先程は失礼しました、あのように感情的になってしまいました」「いや、いいよ。むしろ謝るのはこっちだよ、失礼なことしてたの俺だし」

茂みから葉っぱやら草やらがついた状態で出てきた鍊に、感情をあらわに殴ってしまったことを謝罪する紫。それに続いて、鍊も自分の彼女への行いを謝る。

「さて、改めて自己紹介させていただくよ。俺は輝晶 鍊、輝くに結晶の晶で輝晶。名前の方は鍛鍊の鍊だ。年齢は22歳。こことは違う世界出身で、訳あってここに来たんだ。おっと、その訳は聞くなよ。色々和不味い内容だから」

「分かっていますわ。私は八雲 紫。先程申しました通り、と言っても貴方は寝ていて聞いていないけど、この幻想郷を管理している妖怪です。ところで、あの機械たちは？」

「ああ、あれはソルジャーって言う俺の世界の兵器。つっても、あのタイプだと特殊な能力も自己修復能力も持っていない戦闘員。つまり、ザコだ」

「そうなのですか。…ん？待って、自己修復能力☒そんなもの持つてるの☒」

「素に戻ってるぞ。まあ、中級以上のやつはみんな持つてる」
「嘘でしょ…」

互いに自己紹介したり、ソルジャーの情報を明かしたら紫がドン引きしたり、様々なことを話していた。そして、
ぐううううううう…

「悪りい、腹鳴っちゃまった」

「あら、もうそんな時間なのね」

見るとすでに周りは暗くなり始めていた。普通の人間ならそろそろ腹が空いてくる頃である。

「さてと…、飯はどうするかな…」

「(ピクツ)…そういうえば、この近くの神社で宴会を開く予定があるのだけど、貴方も来るかしら？」

「宴会？なんだってそんな…」

「幻想郷の習慣よ。簡単にいえば、仲直りね。少し前に、外から来た神社の巫女と神二柱が、幻想郷の神社にケンカを売ってちよつとした諍いになった。で、そのお詫びとして、外から来た方の神社で宴会を開催する。こんな感じかしら」

「成る程、大体分かった」

何処ぞの世界の破壊者みたいな返答をする鍊。

「もう一度聞いわね。今日の宴会、貴方も来る？」

「…美味しいモンは出るか？」

「ん、多分出るわn「よし行こう」即答かい…」

どうやら鍊は、かなり食い意地が張っているようだ。

W
h
a
t
☒
s

t
h
e

n
e
x
t

e
p
i
s
o
d
e
:
:
:
?

Ep. 4 「宴会」

鍊side)

妖怪の山。この幻想郷にある山の中で最も標高が高いのだそうだ。そしてその正体は、富士山に壊される前の八ヶ岳なんだとか。富士山がどうやって八ヶ岳を壊したのか、長野県から山梨県にまたがる火山群である八ヶ岳が全部壊されたとしたらどれだけの被害が出たのか疑問は尽きないが、今はそれらを全て忘却の彼方へとぶん投げる。

「いつまで登りやいいんだよ。もう飽きたんだが」

俺は今、その妖怪の山を登っている。この山の八合目にある神社、『守矢神社』で開かれる宴会に参加するために。ちなみに、紫（呼び捨てでいいと言われたのでこうしてる）はスキマから上半身を出している。便利だなソレ。

「いや、この急な坂を汗どころか息ひとつ切らさず登っている貴方の方に驚いてるわよ、私」

つつてもなー、前世^{むかし}で受けてた地獄の戦闘訓練及び実験に比べたら、こんなの蚊に刺されるようなモンだよ。…本格的な山登りなんてしたことないけど。あと、もうすでに日が沈んでいるので周りは真っ暗だが、俺自身夜目がきく方だから足元にも充分注意して歩ける。一応ライト（スマホ）も持ってるし。

「ん…あれでいいのか?」

しばらく坂を登ったところで、今俺達が目指しているものだと思われる木造の建造物が見えてきた。余談だが、黒い鳥…鳥の翼をはやした奴らが俺のこと監視するように飛んでたのがあまりにもウザかったんでそこらへんの木の枝折って投げつけたら、そいつの眉間に命中して墜落してた。紫によると、あれは烏天狗って言う妖怪らしい。あと何故か怒られた。

「ええ。あそこが守矢神社、今日の宴会の開催場所よ」

坂から続いた長い石段を登り終えた先にあったのは、実際に神社を見たことがない俺でも一目でデカいとわかる神社だった。建物の中から明かりが漏れている。聞こえてくる音量からして、かなりの人数

が騒いでいるようだ。そして何より、俺の鼻をくすぐる食事の匂い。腹が鳴る。口からは涎が垂れているのが自分でもわかる。

「ジユルツ…なあ紫、早く行こうぜ。もう待ちきれねえよ」

「はいはい、わかったから少し落ち着きなさい。あと涎拭いて、みつともない」

垂れ流しになってた涎を手で拭い、建物の方へと足を運ぶ。建物に近づくにつれて強くなる匂いに、俺の食欲はますます刺激される。正面の階段を登り、扉、というか障子に手を掛ける。

（この先に… 桃源郷が…ふへへ、想像しただけで涎がでてきますねえ。よしここは輝晶 錬22歳、心火を燃やしてゲートオープン！）

心の中でよくわからないことをのたまいながら、はやる気持ちを抑え障子をゆつくりと開ける。すると、そこには20人以上の女性もしくは少女が酒を酌み交わし、楽しそうに騒いでいた。が、そんなことはどうでもよい。俺の目は長机の上に並ぶ数々の料理に釘付けになっていた。

「旨そうな料理…ジユルツ。早く食べたい…」

「だったら早く中に入りなさい。詰まってるから」

「あ、悪い」

紫に注意されて中に入った俺は、まずその部屋の広さに驚いた。20を超す人数が入っているのに、まだスペースがあるのだ。一体何人入れるのだろうか。あと、

「…紫、どう見たって未成年が酒飲んでんだけど…大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。ここに外の常識は通用しないわ」

「…肝機能への影響とかはねーのか」

「多分、ないんじゃない？」

それはいい…のか？まあそれは置いて、さあ飯の時間だ！と机に駆け寄ろうとした時、

「あら紫、あんたも来てたのね」

俺達、というか紫に誰かが話しかけた。その人物は、赤いワンピースのような服を着た15〜6歳くらいの少女で頭に服と同じ赤いリ

ボンをつけている。しかし、それよりも目がいくのは、肩。少女の着ている服は、肩が丸出しなのだ。いや、それだと語弊がある。正確には肩や腋を含めた、腕の付け根全体というべきだろう。あまりにも奇抜な服装にカルチャーショックを感じ、しばし思考がフリーズを起こしてしまった。が、そんな俺を置いてけぼりに二人は話し始める。

「あら霊夢。私は来ないとは言ってないけれど？」

「宴会が始まってもなかなか来ないから、あんたは参加しないのかと思ってたけど」

「それは、ちよつとした野暮用ね。その彼も関係してくるやつ」

「ん？そういうえげつといたわね。なんか固まってるけど、誰なの？」

「それくらいは自分で聞きなさい」
少女の名前は霊夢というようだ。紫が驚いていないようだから、あの格好が普段着なのだろう。フリーズした思考の中でようやく理解できたのはこの2つだけだった。そこから30秒くらいして、

「…ハッ！ああすまない。少々思考がフリーズしてたんだ。それで、俺になんの用かな？」

「なんでフリーズしてたのかは聞かないでおくわ。それで、あんたは誰？」

「そう言う態度、嫌いじゃないね。さて、自己紹介とはいかがか。改めてはじめまして。俺の名前は輝晶 錬、22歳だ。よろしく」

「錬ね、よろしく。私は霊夢、博麗 霊夢よ。博麗神社で巫女をやっているの。もし立ち寄ったら、コレ、よろしくね」

そう言つて、霊夢は右手の親指と人差し指で円を作った。お賽銭のことだろう。がめつい巫女だ。ん、服のこと？諦めたよ…。

「分かりましたよ。で、そろそろ中に入りたいんだけど」

「あ、ごめんなさい。どうぞ入って。私の神社じゃないけど」

霊夢との話を終え、ようやく机の側に置かれていた座布団の上にあぐらをかき(紫はというと、いつのまにか机の方に動いていた)、さて食うぞと言ったところで、

「おつ、見ない顔だな。外から来たのか？」

誰かに声をかけられた。男っぽい話し方だが、声の高さからして女

だろう。だがそんなことは関係ない。俺の楽しみを邪魔したんだ、誰であろうとぶっ飛ばしてやる。そんなことを思いながら振り向くと、そこには金髪の少女がいた。白黒の、魔法使いというのが一番適当な服を着ている。快活そうな少女だ。と、俺の不機嫌そうな雰囲気を察したのか、

「あ、もしかして今から飯食うところだったか？ああ、悪い。あとで返事してくれ」

と謝ってきた。ふむ、ちゃんと謝ってくれるあたり悪いやつではないのだろう。このことに免じてぶっ飛ばすのは勘弁してあげよう。

「いや、大丈夫。話しかけられたら返事をする、人間の基本だからね。外から来たのか、という質問だが、一応YESだ」

「へー。あ、忘れてた。アタシは霧雨 魔理沙だ」

「輝晶 錬という。よろしく、魔理沙」

「魔理沙ー」

互いに軽い挨拶を交わし終えたところで、女性の声が魔理沙を読んだ。見ると、人形が着ているような服の、魔理沙より背の高い女性がこちらに歩いてきた。肌の色や美しいブロンドからして、西洋の人だろうか。

「おおアリス。お前も来てたんだな」

「まあ、招待されたからね。ん、その人は？」

ふと女性…アリスが魔理沙に俺のことを聞いてきた。

「こんばんは。俺は輝晶 錬。えっと確か、アリス、だったっけ？」

「ええ。私はアリス・マーガトロイド。よろしくね」

「よろしく、アリス」

アリスと話し終えたところで、自分が置かれている状況に気づく。自分はこの幻想郷では新参者。ならば、元からいる人たちに対して何をすべきだろうか。

(…挨拶回り、だよなあ)

今すぐ飯を食べると唸る腹を無理やり黙らせて、今までいた机の付近から離れる。

(適当に回ってきますか…)

―紅魔館―

「あら、初めて見る顔ね」

俺が適当にぶらついていると、突然声をかけられた。その声の主は、10歳くらいの少女、というか幼女で、背中からコウモリのような翼を生やしていた。髪は青みがかった銀で、真紅の瞳がこちらを興味深そうに見ている。

「ああ、最近ここに来たばかりだからな。はじめまして」

「はじめまして。私はレミリア・スカーレット。誇り高き吸血鬼よ」

「輝晶 錬だ。にしても、吸血鬼かあ…紫外線浴びせたら灰になるのかな」

「ツ☒」ビクツ

あれ、なんかまずい事言ったかな…？（無自覚）

「お嬢様、ここに居られたのですか。…お嬢様？どう致しましたか？」

「…ハッ、なんだ咲夜か。なに、どうもしていないよ」

「そうですか…。こちらの方は？」

「はじめまして、メイドさん。俺は輝晶 錬、よろしくね」

「私は十六夜 咲夜と申します。よろしく願います、錬さん」

「タメ口でいいよ。敬語なんてかたっ苦しくてしょうがないから」

「分かり…分かった。よろしく、錬」

「おう、よろしく」

―白玉楼―

「あらあらあなた、紫と一緒にいた外来人さんよねえ？」

「あうん？」

レミリア、咲夜と別れてぶらぶらと歩いていた俺に、また誰かが話しかけてきた。見ると、水色のゆったりとした和服を着た、桜色の髪をした女性だった。少し浮いている。雰囲気、とかじゃなくて物理的に。まあ、幻想郷^{この世界}ではよくある事らしいから気にはならないが、それとは違うところに違和感を覚え、彼女の胸元を見る。決していやらしい意味ではない。決していやらしい意味ではない。

（この人の服、左側が前になってる。以前資料で読んだような…そうだ、確かこの服って…）

「死人に着せる服、でしよう？」

「☒」

「ふふっ、私の胸をまじまじ見つめていたから、服のことかな、と思つて。それとも、違つたかしら？」

「…いや、あつてるよ。あんたのその格好つて、そういうセンスなのか？それとも…」

「そこは私に言わせてちょうだい。…あなたの予想通り、私は亡霊…本当はちよつと違うけど、まあ幽霊みたいなものね」

「なるほど。ちなみに、自分が死んだ理由は？」

「うくん、覚えてないわ」

「そうか」

そこから少し、無言が続いた。

（あーどうしよ、話題が見つからない）

「あ、いた！幽々子さまー」

と、俺の後ろから誰かが小走りで近づいてきた。白いおかつぱ頭に黒いリボン付きカチューシャをつけ、緑のツーピースを着た少女だ。彼女が呼んでいた「幽々子」とは、多分さつきから俺が話してた女性のことだろう。

「あら妖夢。あなたどこに行つてたの？」

「それはごつちの台詞ですよ。目を離すとすぐふらくつとどこか行つちやうんですから…」

と、ここで少女…妖夢が俺に気づいた。

「お、どうもはじめまして。輝晶 鍊つて言います。さつきまでこの幽々子さん、だっけ？と話してたんだ」

「あ、そうだったんですか。すみません、うちの幽々子様か…」

「いいっていいって。話してる分には楽しかったし」

「そう言ってもらえるなら…申し遅れました、私は魂魄 妖夢です」

「うん、よろしく妖夢」

「よろしくお願ひします」

彼女の敬語には何も言わない。なんか敬語がデフォルトみたいな感じだし。

―永遠亭―

妖夢と幽々子の二人と別れ、またぶらりと歩いていると、近くの机で長い銀髪を三つ編みにした 半分が赤、もう半分が青で、上下で赤と青が反転している変ラビットタンクみたいなわった服を着た女性…って誰だ変なルビ振った奴。正直に言いなさい、先生怒らないから。さて、少々脱線したが、その女性と長い黒髪をストレートにした、中世日本の貴族が着ていたような服…十二単だったか…をきた女性が談笑していた。その横では、ブレザーを着、頭から兎の耳が生えている少女が同じく兎耳の生えた幼女と揉めていた。どうやら料理の取り分のことらしい。「ちよつとてゐ！アンタ唐揚げ取りすぎ！もうちよつと減らしなさいよー！」

「まあまあ、子供っていうのはよく食べる生き物だから」

「アンタ子供って歳じゃないだろ」

…うわあ、すごくだらない。気持ちは分かるけどくだらない。そう呆れていると、銀髪のラブ…変わった服の人が俺に気づいたようだ。

「あら、何か用かしら？」

「いや、その二人がなんかくだらない争いやってるから、呆れて見えた。ほら、アホなことやってる奴に『何やってんだアイツ』みたいな視線向けることあるでしょ？それとおんなじだよ」

「…確かにそうね」

そう言っつて銀髪の人は苦笑いする。隣の黒髪の人は変わらずに微笑んでいる。

「紹介が遅れてごめんなさい、私は八意 永琳。で、こちらが私の主、蓬萊山 輝夜。で、あそこで言い争っているのが、鈴仙・優曇華院・イナバと因幡 てゐ」

「よろしくね、鍊くん」

「輝晶 鍊だ。よろしく、永琳、輝夜。ん？輝夜、つてことは…」

「ええ。私、蓬萊山 輝夜はみんなご存知『竹取物語』のかぐや姫、その本人よ」

「おおー」

とまあ、こんな感じで挨拶周りを終え、すぐに空いている座布団に座り箸を持つ。これでもう、誰にも邪魔はされない。そんな確信を抱きながら、近くの大皿に持つてある唐揚げをつまみ、口に運ぶ。衣のサクリとした食感ののちに、口の中に肉汁が広がる。肉にも、素材本来の味を殺さない程度に調味されている。美味しい。いくらでも箸が進んでゆく。止められない、止まらない。俺の知っている範囲内で、これより美味しいのを出した店はなかった。誰が作ったのだろう。「うわーすごい勢いですねー。そんなにがつつかなくてもまだおかわりはありますよ」

と、そう言いながら現れたのは、緑の髪を長く伸ばし、色や細部の形は違うが、概ね霊夢と似ている服を着た少女だった。両手で食べ物が盛られた大皿を抱えている。

「えつと…君は？」

「あ、すみません。はじめまして。私、東風谷 早苗って言います。最近ここに来たばかりなんです」

「へえー、俺と同じだねえ。おつと忘れてた。俺は輝晶 錬。よろしくね」

「よろしくお願いします」

早苗は俺の隣に座り、抱えていた大皿と空になった大皿を交換する。その様子を見ていた俺は、ふと湧き上がった疑問を早苗にぶつけた。

「そういえば、早苗っていつ幻想郷に来たの？」

「ええつと、確か2、3日前ですね」

「へー、俺は数時間前だな」

「す、数時間前…」

「ま、特になんかあった訳じゃないけどね」

もちろん嘘である。不要なことは喋らない、コレ大事。

「アグツ、ムグムグ、ゴクン。いやー、にしても美味しいなーこの唐揚げ。誰が作ったんだろ？」

「はい、今持ってきた料理は私が作りましたが、確か他の料理は咲夜

さんとか妖夢さんが作ってました」

へー、咲夜っていうと、あの銀髪のメイドさんか。あの人、かなり実力者みたいだし、周りの他のメイドさんより地位も高い見たいだ。メイド長、つて言うんだっけ？それに妖夢も。あのふわふわした人の従者らしいし、やつぱり料理とかよく作ってんのかな？

「後で感想言いにいこ…あ、そうだ。この世界の争いの解決方法ってどんなの？あ、武力行使の時オンリーで」

「んー、私も来たばかりでよく分かって無いんですけど、確か『スペルカードルール』だったかな」

「スペルカード？」

「はい、確か『人間では太刀打ちできない妖怪や神様と対等に戦うために作られたルール』だったはずです。使うカードの数を宣言するとか、意味のない攻撃はしてはいけないとか」

「なるほど」

「0ではないんですけど、あまり誰かが死ぬことはないそうです」

「そうか…」

誰かが死ぬことはない、ルールの決められた戦い。多分、スペルカードルールというのは一種のスポーツのようなものなだろう。それで争いが解決する、なんとも平和的だ。全世界が全力を持って互いを殺し合い、関係のない場所でおびただしい被害を生みながらいつまで経っても終わらない、あの世界に比べたら、遥かに。

「そうだ、スペルカードルールって、どうやって戦うんだ？」

「弾幕です。互いに弾幕を張って互いに避けあい、どちらが美しく戦ったのかを競い合うんです」

「なるほど、やってみたいな…」

「あ、じゃあやってみます？」

「はい？」

この時の俺は知らなかった。まさかこの一言がきっかけで、あんなことになるだなんて。

What's the next episode…?

Ep. 5 「はじめての弾幕ごっこ」

錬side

「あ、じゃあやってみますか？」

「はい？」

「どうも、輝晶 錬です。俺は今、驚きの最中にあります。だってルールわかんないゲームを、やってみる？みたいな感じで言われたら驚くでしょ」

「二応、頼めばルール知ってる人が教えてくれますよ？」

あ、じゃあ大丈夫だ。というかよく分かったね、俺の内心。

「声に出てましたよ？」

「嘘やろオイ」

マジかー、声に出ちゃってたかー。まああんま気にしないけど。

「で、そのルール知ってる人ってのは？」

「霊夢さんです。えっと…あ、いた」

早苗の指の先には、向こう側の机で酒を飲んでる霊夢の姿が。かなり飲んでいるらしく、顔が真っ赤だ。とりあえず、霊夢に話しかける。

「あの一、霊夢？少し話があるんだけど…」

「んん、なによ…？せっかく今気持ちよくお酒飲んだのに」

「どうやら話ができない程酔っ払ってはいないようだ。でも少し不機嫌そうだ。」

「悪い、少し聞きたいことがあって。弾幕ごっこって、どうやりやいいんだ？」

「ああーそれね。弾幕をイメージして、その内容を空のカードに書く。で、それを使う。それだけ！」

「説明ありがとう。よく分かったよ」

なるほど、この説明で手順は分かった。しかし、イメージか…

（俺は神秘とか奇跡とかよく分からんしな…あ、別にそういうので縛る必要はないか。俺の知ってる概念で弾幕を作る）

ということで、俺はスペカを作るために弾幕のイメージを開始し

た。

く青年構想中く

(んくまあ、とりあえずこんなモンでいっか)

数分後、俺の手元には4枚の絵柄の描かれたカード、俺のスペルカードがあった。絵柄まで描かれたカードは完全にイメージが決まっているけど、残り1枚は名前が途中まで決まって、弾幕のイメージが全然決まってない。

「さて、実験d：試し撃ちに付き合ってくれる人はいるかな？」

かなり大きな声で言ったから、一人は反応する人いるでしょ。

「お、弾幕ごっこか？いいぜ、私が相手になってやる！」

おや、この威勢の良い声は、魔理沙くんだな？よくし魔理沙、君には俺の実験台になってもらおう(ゲス顔)。

「いや、さつき自分でスペル作ったんだ。それで試し撃ちしてみたかったんだよね。でも動かない的に当てるのもアレだし、どうせなら実戦形式で、と思って」

それに、弾幕ごっこってのがどんなものか、身をもって知りたい、とも付け加える。まあやるからには、負けるつもりはないが。

「そうだ、先に宣言しておくよ。俺はこの勝負で、スペルカードを5枚使う。5枚、それ以上でも以下でもない」

実際には、まだ4枚しか完成していないけど。あと1枚は弾幕ごっここの途中で考えよう(常識知らず)。

「よし分かった、じゃあ私も5枚だ。公平だろ？」

まだ1枚完成してないから公平じゃないけどね(お前が悪いby作者)。

キング・クリムゾンッ！

さて、今俺は空中に浮いています。もちろん、あのアーマー：ドラゴ・ウォリアーだったかな…は着ていない。つまりは生身で飛んでいる訳だが、フライトユニットをつけたイメージでやってみたら難なくいけちゃった。原理？ぼくしらないそんなの。

「ごっちはもう準備OKです」

「お、じゃあ始めるか」

俺の向かい側には、箒に跨って飛んでいる魔理沙がいる。服装も相まって、魔法使いのようだ。

「先攻は俺が貰うよ。ソラッ！」

気合の掛け声と同時に、右手を横に振るう。すると、俺の手の通ったところから ^{1.2.7x9.9m} スナイパーライフルの弾丸に似た弾幕が放射状に時間を置いて連続で飛んでいった。途轍も無い、しかし避けられなくはない速さで飛ぶ弾幕を、魔理沙は箒を操縦しながら軽やかに避けていく。流石は経験者、この程度朝飯前ということか。というか、弾幕って思ったよりも遅いんだな。威力も予想以下だし。まあ遊びなんだし、仕方がないか。

「へへっ、こんなもんか？これじゃ私には当たらないぜ！」

「そりやそうだよね。じゃあ、コレはどうか？スperlカード、『格子ダイアモンドグリッド』」

スperlカード名を宣言した直後、俺の背後からレーザーのような直線型の弾幕が先に出現した小型の球体弾幕と結合した。小型弾幕4個につきレーザー弾幕3個の集まり、中には重複して結合したものもある。弾幕同士の間隔は面の部分で人1人、内部空間1つで人が3人は入るほどの広さだ。

「うおっ、なるほど、動きを制限する弾幕か」

「その通り。因みに、その弾幕達はダイアモンドの結晶構造で配置されているよ」

ダイアモンドは、4つの炭素原子が正四面体を描くように結合し、それが何十にもわたって続いている。だからこそ、地球上で最も硬い物質と呼ばれているのだ。

「そこにほら、こうしてやるだけで」

おもむろにレーザー弾幕を魔理沙のいる空間に放り込む。魔理沙には当たらないが、問題はない。

「おいおい、どこに向けて撃ってんだ、って危なっ！」

何故なら…

「跳ね返ってくるのってアリかよ！」

この弾幕結晶構造は、他の弾幕を3回まで跳ね返す性質がある。関

係ない方向にも跳ね返るが、それでも相手の動きを封じる点では十分と言つていいほど機能している。

「そろそろ、避けなきや当たつちまうぞ」

「うおっ、おわっ、ちよ、危なっ。こんにやろっ、意地の悪い弾幕だなっ！」

弾幕を避ける魔理沙を愉悦の表情で見ていると、レーザー弾幕の発射が止まった。どうやら、クールタイムと再装填に入ったらしい……しらんけど。

「おおっ、止んだか。それじゃ食らえ！」

ぼんやりと思考の海を漂っていると、魔理沙の方から星型の弾幕がこつちに飛んできた。0.1秒で思考を中断して、大急ぎで弾幕を横転しながら避ける。しかし、まだ残っていた発動中のスペルカードに数発の弾幕があたり、機能停止するかのようになりカードは光を失った。(ほう、スペカの止め方ってこんな感じなんだ……あれ、なんか想定外って顔してる。俺のが特別なだけかな?)

面食らったような顔をしていた魔理沙だが、すぐに気を取り直し、「今度は私の番だー」と言いながら、さっきの星型弾幕を大量に放ってきた。まあ、昔これよりも鬼畜な弾幕を避けたことがあるから、さつきみたいに油断してなきや簡単に終わる。

「くそう、すました顔で避けやがって。じゃこれならどうだ」スペルカード、『魔符「スターダストレヴァリエ」!」

魔理沙がスペルカードを発動すると同時に、彼女の周りを七色の星型弾幕が囲うように現れ、さらに外側には、俺が出られないようにめちやくちやな量の星型弾幕が円を描いていた。

(ハハッ、こんなのを避けるって?制限された中とかムズイわ!)

とは言えど、避けなきや負けるので、弾幕で作られた円の中俺は必死で避けまくる。途中、当たりそうになったとき、咄嗟に懐に忍ばせていたチタン合金製のコンバットナイフで受け、切り裂いたのだが、その時あることに驚かされた。

(ナイフの刃が少し溶けてる……チタンの融点は1,668℃、合金だから多少前後するとしてもかなりの温度だぞ俺のやつは威力が低

かったけど、こいつは完全に違う！どうなってんだよ☒

「へっへっ、弾幕はパワーだぜ！」

（あつ、ただのパワーバカの結果か）

少し時間が経って、また俺にターンが回ってきた。ターンと言っても、俺がスペカ撃つチャンスが来た、ってだけなんだけど。

「2枚目いくぜ。スペルカード、『原理「光の三原則」』」

唱え終わると同時に、魔理沙の周囲に大型と中型の球体弾幕が出現した。ちなみに、球体弾幕の出現パターンは5つある。そして、そこに直進するレーザー弾幕が当たると、

「うわ、また反射してきた」

中型弾幕に当たった弾幕が反射して飛んできた。これは光の三原則の一つ、「光の反射」だ。では、大型弾幕の方は？

「曲がった☒」

大型弾幕を通り抜けたレーザー弾幕が、進行方向を曲げて飛んできたのだ。光の三原則の一つ、「光の屈折」である。

しかも、弾幕の色によつて反射の角度、屈折率が変わるので並の奴だと避けるのは難しいだろう。

まあ百戦錬磨の魔理沙さんには、すぐにパターン見破られてスペカ止められちゃったけど。

「前振りは無しでいくぜ。スペルカード、『魔符「ミルキーウェイ」！』」

宣言直後、魔理沙を中心に曲線を描いた大型の星型弾幕が回転し、さらに小型の星型弾幕がバラバラと放たれる。まあ避けやすかった。

また少し時間がとんで、今俺と魔理沙は通常弾幕の撃ち合いをしている。

「なんだよ、スペカ撃たないのか？」

「今度のはちよつと大技だからね。チャンスは譲ってあげるよ」

「余裕だな。ま、そう言うんならお言葉に甘えて、スペルカード、『黒魔「イベントホライズン」』ッ！」

直後、魔理沙の周りを囲うように星型弾幕が…ってなんか見覚えがある。というかさつき使ってたやつじゃん。使い回しかよ。

（流石に、1回見たから避け方は分かるよ）

弾幕の量は増えていたが、それだけだ。弾いて、避けてしまえばいい。ナイフが一本おじやんになったが、手札を全て見せる前に負けるなどという限りなくダサい終わり方に比べれば安いものだ。

「さて魔理沙くん。イベントホライズン、というのが何か、知っているかね？ カウントダウンスタート、はいごく、よくん…」

「えっ☒えーっと確か…」

「はい時間切れ。自分のスペカの内容くらい暗唱できるようにならない」

急に質問振つといて何言つてんだ、と言いたそうな画面の前の君たち、君らの意見は求めん。

「では答え合わせだ。イベントホライズンとは、ブラックホールとの間で光すら脱出不可能になる領域との境界のことだ。事象の地平線とも言われている」

ブラックホール。太陽の30倍以上の質量を持った恒星が死ぬ時に星の核が自身の重量で潰れてできる、非常に高密度かつ大質量の天体。その重量は凄まじく、近づいたら最後、光さえも逃れる事はできない。

「こつちも準備完了だ。いくぞ、スペルカード、『黒引「ブラックホール」』」

発動すると同時に、俺の前に大型球体弾幕が出現した。2枚目のスペカで出てきたやつよりも一回り大きい。これこそがこのスペルの核、ブラックホールだ。もちろん本物ではない。そんなもの出したら地球が終わっちゃうしね。

「先に言っておく。こいつは時間経過でしか止められない。さつきみたいに攻撃しても無駄だからな」

後に聞いた話だが、このタイプは耐久型と呼ばれているようだ。あと、俺が始めに使ってたのは撃破型で、こちらも時間が経つと止まるらしい。スペルブレイクというそうだ。

「なるほど、耐久型か…うわっと！ 後ろからかよ、危ないな！」

中心の核弾幕が光を強くすると同時に、魔理沙の後ろから弾幕が曲線を描きながら飛んできた。さらに、ランダムな方向から小さな弾幕

が直線を描いて核弾幕に向かってゆく。バラバラに飛ぶレーザー弾幕も、核弾幕に近づくと、その進行方向を曲げられて核弾幕に吸い込まれる。

「ブラックホールの重力、その身で感じると良い」

そして、また核弾幕が強く光ると、曲線を描いていた弾幕の曲がり方が変わり、魔理沙が引き寄せられ始めた。

「この弾幕は中心に近づくほど弾幕の並びが歪になる。ブラックホールの重力によって光の向きが歪められるように、ね」

見ると、魔理沙は核弾幕の引力に逆らいながら飛んでくる弾幕を避けている。あの状況下でやるのはかなりキツイだろう。

やがてスペルカードの時間が切れ、核弾幕の引力が消失した。しかし、まだ核弾幕は消えていない。これからもう一度使うからだ。

「さてさて間髪入れずにもう一枚、スペルカード、『白斥「ホワイトホール」』」

ホワイトホールとは、先程のブラックホールとは逆に事象の地平線から物質を放出する天体のことだ。数学的にはあり得るとされているが、実在はしないという理論上の存在だ。しかし、何でもありなこの幻想郷で、数学的にはあり得るとか理論上の存在とかは関係ない。

「今度はさっきの逆か。ちよつと簡単か？」

魔理沙くん、そういう事は内容を全部見てから言いなさい。

核弾幕から溜まっていた弾幕が放出され、先程のブラックホールとは真逆の軌道を描いて飛んでいく。少し時間が経ったあと、急に魔理沙が後ろに下がり始める。ブラックホールのとときは逆向きの引力で飛ばされているのだ。これが普通なら弾幕の発生源から遠ざかれてラッキー、と思うだろう。しかし、こいつは違う。

「後ろに弾幕が☒これ下がったらダメなやつじゃないか！」

ホワイトホールは、事象の地平線から物質を放出する。しかし、ブラックホールとホワイトホールの重力は同等であるため、事象の地平線から出た物質がまた引き戻されて、物質が事象の地平線に溜まった結果、ホワイトホールの外側にブラックホールの領域ができるとする説がある。この状況はその再現だ。

「ホワイトホールの逆向きの引力、外側に溜まった弾幕^{ぶっしゅ}。果たして本当にブラックホールの時より簡単かな？」

返事は来ない。いや、返事をする暇さえ無いのだろう。何せ外側に向かう引力に逆らい、背後の弾幕に被弾しないようにしながら目の前に飛んでくる弾幕を避けなければならぬのだから。

時間切れでスペカが切れたあと、魔理沙はとても疲労していた。かなり疲れてそうなのに、まだ箒制御できるのか。

「ちよ、ちよつとタンマ…休憩させて…」

「本音は嫌だと言いたいところだが、動けない相手を攻撃しても面白く無いしな。いいよ、息が整うまで待とう」

最後の1枚もまだ出来上がって無いからね。

「そ、そうか…ありがと…」

少女休憩中

「よし、休憩完了！それじゃ早速デカイの一発ぶちかますぜ！」

「そうかい」

さて、魔理沙が復活して大技宣言しているその時、俺は、

(やべえ、アイデアが思い浮かばん。5分もあつたのになくんも出てこなかった)

どうでしょう、と考えあぐねていると、魔理沙が自分が被っている帽子から何かを取り出した。手に収まるサイズの正八角形の器具で、中心に小さめの穴が空いている。何かのエネルギーが中心に向かって溜められている。何か嫌な予感がする。

「いくぜ、私の大技！スペルカード、『恋符「マスタースパーク」！」

直後、魔理沙の手の中の小型機器から、極太レーザーが発射された。発射の直前に射線から離れていたからよかったが、危うく人生がゲームオーバーするところだった。まだ始まってから1日も経ってないのに。

「…あつぶねー、危うく消し炭になるところだった」

それにしても、すごいものを見せられた。何だよあの極太レーザー。ザ・男のロマンじゃん。あんなのあるんだったら、先に言っただけだ！

「フフ、フハハ、フハハハハハハハ…最後のピースは決まった」
目を細め、口の端を薄く吊り上げた顔を浮かべ、袖口から取り出した
ペンで書きかけのスペカに記入する。

「これが俺のラストスペルツ！スペルカアアアド！『龍咆』テンペスト
バスター」アアアアアア！」

喉よ張り裂けんとばかりに、俺の最後のスペルの名を叫ぶ。直後、
カードの表面が燃え上がるように変化し、巨大レーザーの絵柄が現れ
る。そして、相棒が吸い寄せられるように俺の右腕にくつつき、籠手
のような形状に変形した。手の部分を覆う恐竜の頭部の中にはグ
リップとトリガー、恐竜の口内には砲口がある。右目に装着されたモ
ニターに、ゲージが表示された。

『エネルギー充填率、30%』

充填率？という事は、この籠手に溜まっているエネルギーの量か。
しかし30%は少ないな。もう少し溜めてみよう。

『充填率、50%』

まだ足りない。もう少し。

『充填率、70%』

画面が黄色くなった。もう少し欲しいな。

『充填率、90%』

今度は赤くなった。こうなりや100%まで溜めてみるか。

『充填率、100%』

よし100%まで行った。なんか画面の奥で丸みたいなのが大き
くなったり小さくなったりを繰り返しているけど、まあなんとかなる
でしょ（お気楽思考）。

『反動軽減フィールド生成、砲口座標軸固定、射線固定、ターゲット、
ロックオン』

うん？なんか動けなくなった。あれー腕が勝手に動いていくぞー
？背中の方に魔法陣みたいなものもあるぞー？

『発射シークエンス、第3フェーズまで終了。これより、テンペストバ
スター最大出力が発射されます。射線上の友軍は、直ちに避難してく
ださい。繰り返します。これより…』

アナウンズ流れてきた。あれ、もしかしてこれ、ヤバいんじゃない？（今更）

『エネルギー、フルチャージ。発射準備完了。トリガーを引いてください』

え待って、なんか砲口の前にデカイ光の球現れたんだけど。直径15mくらいあるんだけどどう見ても人に向けて撃つていいものじゃないんだけど

『トリガーを引いてください』

いやいや待って、どう考えたっておかしいよねコレ。確実に殺しにかかっているよねコレ。

『トリガーを引いてください』

待ってマジで待って、コレ撃ったら遊びにならないから。遊びから戦争になっちゃうから。ホントマジで待つて『はよ引かんかいコラ、しばかれないんか』すみませんごめんなさい、すぐに引きます。その前に、

「魔理沙アアア、逃げルルオオオオ！」

「え、えええいや何が起きてんだ」

「いーからはよ逃げんかいイイイイイイ!!」

「は、はい！」

喉が潰れそうになる程の大声で魔理沙に逃げるように伝える。魔理沙は少し戸惑っていたが、次の^{命令}大声で脱兎の如くレーザーの射線から抜けた。

「よし、コレで撃てる。射線上に他の生き物はなし：多分。という事で、ファイアアアア！」

射線上に生き物がないことを確認して、引き金を引く。砲口の前でスパークを放っていた巨大な光球が、全てを薙ぎ払う破壊の光へと変わる。先ほどまで魔理沙がいたところの空気を焼き、射線上の樹木・土砂を消し飛ばしながら進みつつける。

「あく、やっちゃまったZE☆」

NO side

所変わって、妖怪の山頂上。暗く静かな夜、人工的な灯りなどなく。

頭上を見渡せば星が空いっぱい広がっている。周囲に生き物の気配はなく、天体観測には最適な環境だ。何故周囲に生き物がいないのか、そんな些細なことはこの幻想的な星空の下ではどうだって良くなるだろう。そんな美しい景色の広がる山頂を、

ズガアアアアン…

破壊の閃光が、吹き飛ばした。

下と比べ、木があまり生えていない、だからこそ空がよく見えていた山頂は、通り過ぎた閃光によって弧型に、最大できっかり5m削られていた。幸い、被害の出たところの周辺に動物はいなかった…おそらく、野生の勘のようなもので危険を察知したのだろう…が、その近くまで伸ばしていた枝を焼かれたり、その付近の土ごと根を消し飛ばされたりした木々もあった。さつきまでであった神秘性は何処へやら、一瞬でただの焦土と化してしまった。

翌日、これに気づいた天狗たちが大いに警戒した事は、想像に難くない。

錬side

ふう、ヤベエモン出しちゃった。さくて、危うく当てちまうところだった魔理沙さんは、

「……(ビキビキ)」

スツゲーイイ笑顔でブチギレていらっしやるウウウウ！

「す、すみませんでした魔理沙さん！お、俺も、あんな威力あるなんて知らなかったんです！」

「…それが遺言でいいか？」

あーらだーめだこれー。

「ホントにごめんなさいー！」

空中だけど、見事な土下座を決めて魔理沙に謝罪する。魔理沙が何か反応するまでは、絶対にこの姿勢をやめない。

「はあ…もういいよ。そんな謝られ方されたらこっちの方が気まずくなるし、さつきのだってノリで言っただけだし」

ノリかよ…こりや後で説教すべきか？いや、俺が全面的に悪いしいや。

「そのかわり：私の最後のスペカ、くらって貰おうか」

「H A H A H A、お安い御用さ」

「ほう？じゃあ耐えて見せるよ：スペルカード、『彗星「ブレイジングスター」』」

宣言直後、箒にまたがった魔理沙は、あの八角形のアイテムを発射面を後ろに向けて構えた。

「え、まさかそれって…」

「ああ、ブレイジングスターはマスタースパーク発射の反作用を利用して発動する、超高速のスペルカード：まさか避けたりなんてしないよなあ」

「ハハハ、ソクナワケナイジヤナイデスカーヤダー」

あ、死んだな（確信）。

「それじゃ、いくぞー！」

グッバイ、俺の人生…

「ふおお☒」ドゴーン！

マスタースパークで加速された箒の先端が俺の腹に、ついでに魔理沙の拳が俺の顔に突き刺さり、俺は向かいの山まで飛ばされそこに大きなクレーターを作る。

「フー、スツとしたぜ」

その後、錬はまるで何事もなかったかのように戻ってきて全員を戦慄させたとか何とか。

What's the next episode…？

Ep. 6 「Weapon rise」

錬side

「ふああああ…」

おはようございまくす、輝晶 錬です。

あの宴会の日から3日、俺は人里の外れに見つけた一軒家で生活している。いやー、にしても弾幕ぶっこの後の宴会すごかった。大食い対決で対戦相手の幽々子さんに僅差で勝つたり、飲んだ全員が酔っ払ってダウンした酒飲んでほろ酔いで済んだり…うん、全部俺だった。

「ん〜、7時くらいか…朝飯作ろ」

眠い目を擦りながら、キッチンまで歩く。意外と言われるが、俺は料理が得意だ。昔、仲間によく料理を振る舞ってたのは懐かしい思い出だ。…楽しかったな、あの頃は。地獄のような実験も、俺を使い捨ての兵器としか見ない上層部クッソ共もいなかった。本当に自由だった。やってることは傭兵みたいな感じで、生活も不安定だったけど、すごく楽しかった。みんなでワイワイ騒いで、どこもボロボロだったけどいろんなところ周って、初めて誰かを好きになって…

「…嫌なことを思い出した。もうやめよう」

回想をやめ、紅茶を淹れるために電気ケトルのスイッチを入れる。紅茶は新鮮な水を沸騰させたものを使うと美味しく淹れられるという話を聞いたことがある。が、俺はあまりそういうところに拘らない性格だ。

「あ、沸いた」

少しの時間ですぐに沸く。さすがT-Oal。というかこの家、いろいろおかしいなだよな。技術力江戸か明治あたりの世界なのに、太陽光発電パネルとか地熱発電用の装置とかあるし。一部屋だけ時間の流れがおかしいし。外観よりも中の体積大きいし。上下水道まで整ってるし。あ、まさか紫のやつか？

イマヒトリヒトリノムネノナカ―

あ、電話。こういう時にかけてくるやつは大抵…

『ゆかりんかと思った？残念、(犯人は)クロノスちやんでした〜！』
だと思つたよ。確かにお前なら何してもおかしく無いな。

「ふくん、つまり？俺ん家をビックリ技術のトンデモハウスに変えたのお前つてこと？」

『YES！あの〜いろいろ便利でしょ？だから怒らないで』

「怒る？むしろ感謝してるよ。おかげで退屈はしていない」

『あら、それはよかった』

「そろそろ飯作りたいただけ」

『ああ悪い悪い。そんじゃまたな〜』

電話が切れる。さて、作りましようかねえ。…あ、紅茶飲むの忘れてた。

〜青年調理中〜

「よつしや、完成つと」

フライパンの魚を皿に移し、机に並べる。今日の朝食のメニューは山で釣ってきたイワナの塩焼き、魔法の森のキノコ(食用)の味噌汁、ほうれん草のお浸し、白米。何、彩が足りないだど？シンプルイズベストという言葉を知らんのか。

「あ、そういえばアイツ起こさないと…つと、噂をすれば影か」

開けっぱなしにしてあるリビングのドアから、小さな恐竜型ロボットが目を擦りながら入ってきた。ロボットなのに仕草が人間臭い。

『おはようー兄ちゃん…』

「おはよう、フォトン。昨日はよく眠れたか？」

『うん…』

フォトン。俺の相棒だ。宴会の時に名前をつけてなかったことを思い出して急遽『相棒の名付けコンテスト』を開催したが、出るもの出るものへん…個人的な名前ばかりで、最終的に俺が相棒の兵器としての名前「マシン・ドラゴンOil Photon」から取って付けた『フォトン』に決まった。あと、フォトンが喋り出したのは一昨日だ。宴会の時に日本語をラーニングしていたらしい。最初は俺のことを「マスター」と呼んでいたんだが、どうにもしっくりこなくてな。いろいろ試行錯誤した結果、兄ちゃんに決まった。ちなみに、途中でお兄

様とか言われて猛烈な吐き気を催したのは完全な余談だ。

「ちようど朝飯ができたところだ。食べるぞ」

『うん…』

眠たげながらも、器用に子供用の椅子に座るフォトン。俺の分の料理を並べ、俺も椅子に座る。フォトンの向かい側だ。

「いただきます」

『いただきます…』

く青年&機械食事中く

「ご馳走様でした」

『ご馳走様でした!』

「さって、服着替えて、仮面○イダーでも見るか」

朝食を食べ終え、食器を片付けて最近入り浸っている娯楽室へと向かおうとし…たところで服の裾を引つ張られる。フォトンだ。なんでもロボットが飯食えるんだろうな。あつ、ド○えもんの原理か。

『兄ちゃん兄ちゃん、偶には外に行こうよ』

フォトンに外に行こうとせがまれる。えーやだなー、と言いたいところだが、最近の生活を振り返ってみると、娯楽室で仮面ラ○ダー見てるか漫画読んでるかゲームやってるか室内運動してるかのどれかしかなかった。運動しているとはいえ、だいぶ不健康な生活だ。まあ、向こうじゃ娯楽なんて全く味わったことがないんだ、これくらいは目をつぶってほしいとも思うが。

「んーそうだな、最近外出てなかったし。わかった。どこか散歩に行こう」

『わーい!』

嬉しそうにはしゃぐフォトン。俺もちようど新しい雑貨が欲しいところだったので、ちようどよかった。めんどくさがって忘れる前に行っておこう。あ、スマホは忘れずに。

「フォトン、今日は人里まで行ってみるか? 雑貨を買いに行こうと思ってるんだが」

『うん、いいよ。早く行こう!』

「ちよつと待って。服着替えてくるから」

『わかった！早めに着替えてねー！』

「わーったわーった」

さて今日の服は何にしようか…

少々お待ち下さい…

「待たせたな、フォトン」

『もー、遅いよー！』

着替えを終えて玄関へ向かうと、すでにフォトンが待機していた。はええよ。今の俺の服装は、白のフード付きパーカーの上に黒のブルゾン、黒のジーンズと言った感じだ（イメージは某幻想殺しの服装を、パーカー以外は書いてあるとおりに変えた感じですよby作者）。

『それじゃ、レッツゴー！』

~~~~~

俺とフォトンが人里へ向かう道中、

ガサガサ…バツ！

「久しぶりの人間！それも骨張った年寄りではなく若い人間！貴様の肉を食わせろおツ！」

茂みから小鬼と犬を混ぜたような異形…妖怪が飛び出した。普通の人間なら、一目散に逃げるか腰を抜かして助けが来ることを祈りながら貪り尽くされるかの二択だろうが、生憎と俺は普通の人間じゃない。なら、何をするとと思う？答えは…

「シッ！」グシャアツ

「ブゲツ」

「ツラア！」ボゴオオオオツ

「オブウツ」

「デエヤアツ！」ベキイツ

「グゲアツ」

ドゴオオン…

真正面から全力で叩き潰す。まあ、頑張りや誰でもできる。まず肘鉄で鼻っ柱を砕き、怯んだ隙に鳩尾にアツパーを入れてカチ上げ、オーバーヘッドキックでトドメを刺す。ね、簡単でしょ？（できるかby作者）相手が横から来た場合は相手の方向に向かって回し蹴りし

て、相手が地面に落ちたところを間髪入れずに後頭部踵落としだ。この時、躊躇いを虚無の彼方へ投げ捨てるのがポイントだ（鬼かテメエ、いや鬼畜だったわby作者）。後ろからの時は、あれだ。カ〇ト式カウンターキックからの頭に垂直蹴りだ。大抵の奴はそれで沈む（そらそうだろby作者）。つーか、俺を殺りたいなら静かに襲ってきなさい。

静かに襲いかかっても気配察して反撃しそうby作者

「さつきからうるせーぞ作者」

「ごめんなさい。」

~~~~~

「おっ、そろそろ人里だな」

少し経って、視界の先に関所のようなものが見えた。人里の門だ。

「おーっす、おはようございまーす!」

「おうアンちゃん、おはような! 今日は何の用だ?」

「ちよつと雑貨を買いに」

「おおそうか、どうぞ通つてくれ」

いつも通りに挨拶を済ませ、門をくぐる。江戸時代のような風景が広がっているが、所々洋風の建物もある。普段と変わらない、人里の風景だ。

「さてと、いつもの店は…あった。にしても、ほんとデカいなこの店」

少し歩いたところにあつたのは、俺が生活用品をかうのに世話になつた道具屋。名前は、『霧雨店』というようだ。人里でもかなり有名な店らしい。

「おはよう、店長」

「ああ、いらつしやい」

店に入り、奥にいる人物に挨拶をする。40代前半くらいの、大柄な男性だ。

「今日は何を買いに?」

「新しい食器をいくつか。最近料理への熱が再発してね、料理に合う食器を買おうと思つているんだ。あとは、いくつか調理器具も見繕うつもりさ」

「おおそうか、なら…」

俺の注文を聞いて、店長は店の奥へ行く。在庫の商品を取りに行つたのだろう。できれば圧力鍋が欲しいな。あと麺を茹でるための網とk…

♪♪♪♪♪

「この曲…まさか」

アイツら共が来たのか。クソツ、空気の読めない奴らめ…

「よし、とりあえず今あるだけの食器や調理器具を持ってきたぞ…どうした？そんな、険しい顔をして。具合でも悪いのか？」

「…ああ、大丈夫だ。それと店長、急用が入った。少し待っていてくれな
いか」

「あ、ああ。わかった、とりあえず、これらは奥に戻しておく」

「ありがとう、すぐに戻る」

店から急いで飛び出し、全速力で門を抜ける。そして、すぐに

ライドドラクナー
バイクを召喚し、跨る。

「行くぞ相棒」

『わかったよ兄ちゃん』

既にマップで位置は捕捉している。バイクのエンジンをかけ、田園の間にある道を一気に走り抜ける。こんな日にこの幻想郷に現れた、敵を叩き潰すために。

「ここか…祭りの場所は…」

平坦な道を抜け、森の中を突っ切つて到着したのは、人里から少し離れたところにある川。その川辺だ。茂みに身を隠しながら辺りを窺うと、川の対岸にポータルを確認できた。その周囲を 雑魚 ソルジャー共が見張っているのは前と同じだ。違うのは、ポータルの真上に、別のソルジャーがいることだ。体色は白く、頭が透明な傘になっている。傘の周りからは直径5mmか1cmほどの線のようなものが伸びている。触手だ。体色や傘の形状からして、クラゲをモチーフにしているのだろう。

(クラゲとは厄介な…毒でも使われたら堪らん。ならば…)

「速攻で片をつける！」

腰にマウントした拳デザートイーグル銃を抜き放ちながら川へ向かって走る。俺に気づいたソルジャーが銃を向けるが、相手が引き金を引くより早くこっちが撃ち、ソルジャーの頭を吹き飛ばす。

「遅いな。俺を殺したいならあと0.1秒早く引け」

やっとこちらに気づいたのか、クラゲのソルジャー…とりあえずヒドロゾアソルジャーとも呼ぶか…はゆっくりと振り向いた。

（舐められているのか…？まあどうでもいい。壊してしまえば、全部同じだからな）

油断せず武器を構える俺に、ヒドロゾアは自身の触手を伸ばしてきた。幸い、数で押す戦法なのか狙いが甘かったので、避けることはできた。しかし、俺に向かっていた触手が急に下から上へ鞭を振るうかのように動いた。

（まだ俺に届いていないのに一体何を…）

ゾクツ…

全身を悪寒が走り抜け、考えるより先に手が銃を離し、

ピーーツ…ズバアツツツ！

切れた。金属でできているデザートイーグルの銃身が、まるで豆腐のように切り裂かれて弾けたのだ。火薬が破裂したのかとも思ったが、弾を発射する時に使うものではここまでの威力はないはずし、仮にあつたとしても破断面は綺麗にならない。

「危なかった…なんなんだ、今のは…」

疑問を抱く時間さえ与えんとばかりに、ヒドロゾアの触手が俺に向かって伸ばされる。触手の攻撃を避ける中、さっきの現象の原因が解明できた。

「触手から、ワイヤーが…」

直径1cmの触手、その中にコンマmm単位の極めて細いワイヤーが数本内蔵されている。デザートイーグルが切り裂かれたときも、触手を振るうと同時にワイヤーが射出、振り抜かれたことで切断された、と見て間違いないだろう。さらにこのワイヤー、内蔵されている長さがかなり長いようで、俺のいたところの地面や周りの木々に切り

裂かれた跡が付いていた。銃を切った時に一緒に切ったのだろう。もし、あのまま留まっていたら、俺は間違いなくサイコロステーキになっていた。

(どうする？今の武器は潰された。格闘で勝負しても、近づいたら細切れにされる。それに、ドラゴン・ウォリアー^アに変身しようにも…)

ビュオツツ！ヒュンツツ！

(攻撃が速すぎて、おちおちコードも打てない！もたもたしてたらすぐに肉塊だ、どうすればいい☒)

思案している間にも、ヒドロゾアは攻撃の手を緩めない。ワイヤー付きの触手を振り回し、周りごと俺を切り裂こうとする。

ビュウウンツ！

(横からっ…つぶねえッ！)

横薙ぎに振るわれた触手を上体を逸らすことで回避、そのまま地面をつきロンダートの要領で距離を取る。

(このままじゃジリ貧だ。一旦下がって体勢を立て直すか…クソツ)

この状況は不利だと断定し、ヒドロゾアに正面を向けたまま森の方へ逃げる。もしアレに背中でも向けようものなら格好の的だ。森に入ってから川原に背を向け、勢いよく走る。

(このままじゃ、追いつかれるのも時間の問題か…あれ？)

100mくらい走ったところで、違和感を覚えた。ヒドロゾアが追ってくる気配がないのだ。今の丸腰の俺なら、追いついて殺すなんて容易いはずなのに。

(どういうことだ…？)

疑問に思った俺は、ヒドロゾアの方に近づいて目を向ける。留まっていた。ヒドロゾアはポータルの上に浮かんだまま、一歩たりとも動いていなかった。

(なんで追って来ないんだ？)

その答えは、ポータルの近くを黒い影が横切った直後に判明した。通り過ぎた影…熊のような妖怪にヒドロゾアが反応したのだ。振るわれた触手によって、名もなき妖怪は哀れにもバラバラにされてし

まった。1匹だけならたまたま巻き込まただけだと判断できるだろう。しかし、ヒドロゾアは異変を感じて近づいてきた他の妖怪たちも、同じように触手で切り刻んだ。それによって、あることが分かった。

(まさかアイツ、ポータルに近づいたものだけを攻撃しているのか☒)
そういえば、奴は俺が飛び出しても反応せず、こつちがある程度近づいてから攻撃し出したような…こういうことだったのか。

(原理がわかれば対処は簡単。要は、近寄らずに倒せばいい。触手を落とせば、近接でも戦える。問題は、武器がない中どうやって触手を処理するか…)

テレーツテレレ♪

「こんな時にメール…?」

唐突に送られてきたメールを開くと、

『困っているみたいだから、ちよつとヒントをあげよう。まずはドラゴ・ウォリアーに変身して、アプリの中で剣と銃が書かれているものを開く。そしたら、武器のアイコンが出てくるから、それをタップする。これで行けるぞ。ヤベエヒントのつもりが喋りすぎた。まあとにかく、健闘を祈る。』

クロノス』

いつも通りのふざけた口調だが、そんなことはどうだっていい。

「突破口さえ分かればいい。それだけ分かれば、十分だ」

『0・0・1』

『Code photon stand by, ready?』

コードを打ち、右手を高く掲げる。

「アームド・オン!」

『Dragon warrior complete』

右腰に出現したソケットにDフォンを差し込む。相棒が引き寄せられるように飛んできて分解、アーマーに変形する。そしてそれを装着した俺は、すぐにDフォンのアプリの一つを開く。

『Weapon rise』

画面にさまざまな武器のアイコンが現れる。大半はロックされて

いるが、幾つか使えるものもある。その中から、中遠距離に使える武器を選択する。

『L a s e r b l a s t e r f o r w a r d i n g』

虚空に光が形を描き、一瞬で俺の手元にかつての姿の相棒が背負っていたものと同じ形の鋭角的なライフルが現れた。少し違うのは、腹の部分に折り畳めるグリップとトリガーがついているところか。

「これなら、奴の間合いの外から攻撃できる」

片膝立ちになり、目の高さでライフルを構える。するとアーマーが変形し、前方と後方に細い脚を生成した。前方の脚からはライフルに接続する様に別の脚が伸びている。ブレを抑制するためのものだろう。そして、動けない俺を覆うようにアーマーから壁が作り出された。

「俺自身の装甲は薄くなったけど、あつちの攻撃は届かないし、攻撃もしてこない。絶好のチャンスだな」

スコープを覗く。アーマーの頭部にも照準補正機能はあるけど、なんとなくこういうことをやってみたかった。

「まずは小手調べに、真横をブチ抜く」

バシユン！

僅かな音と共に、一筋の閃光が銃口を出発しヒドロゾアの頭の右側にあつた触手を数本切り飛ばす。自身の攻撃範囲外からの攻撃に警戒したのか、まだ生きている触手をポータルに繋いで雑魚を召喚する。が、壁にもならない。

「そんな紙つぺらみたいなの防衛で、俺の攻撃を防げるとでも？」

ヒドロゾアの前に群がる雑魚諸共、触手を撃ち落としていく。さっきまで俺の方が劣勢だったのに、なんだこの状況の変わり様は。まあ、戦場ではよくあることか。

「クツッ、数が増えてきた。キリねーぞ。しかも見たところスナイパーもいるし」

いくら壁の役割も果たさない雑魚でも、数が来られるとキツイ。その上こつちに攻撃するためのスナイパーまでいる始末だ。

(さっさと終わらせて帰りたいんだよ。なんかこう、大量の敵を一気

に叩く、みたいな攻撃できないのか?)

とライフルをのぞいてみると、側面にソケットがあった。大きさは携帯端末1個程度が入るくらいか。

(もしかしてこれ、Dフォン差せる?)

とりあえず差してみたら、入った。しかも画面にボタンみたいなのが出できた。

(押せばいいのか...?)

一回押してみる。

『oncs!』

(ワンス...?もう一回押してみよう)

『twice!』

(なんか楽しくなってきた。もう一回押してみよう...)

『triple! Full charge!』

その音声と共に銃口に高密度のエネルギーが集まり、中程度の光球を作り出す。

「これならいける...食らえっ!」

『Critical attack! Phantom shoot
!』

引き金を引き、臨界に達した光球を撃ち出す。放たれたエネルギーは河原や川の水面を削りながら一直線に進み、雑魚共の目の前で弾けて無数の光弾に変わった。光弾は本当に光かと疑問に思うほど曲がりくねった軌道を残して敵を貫いていく。光弾の半分が雑魚を巻き込んでヒドロゾアの触手や胴体を撃ち抜き、もう半分が周りの雑魚を一掃する。その中のいくつかはポータルを攻撃している。

(...いやもうWのル〇トリガーじゃん!)

光弾による攻撃が終わる頃には、呼び出されていた雑魚は全員ただの鉄屑と化し、ポータルはもう二度と使えないほどにボロボロになっていた。ヒドロゾアの触手は一つ残らず地面に力なく横たわっていた。

「これで、間合いの心配は必要なくなった」

レーザーブラスターを放り捨て、ヒドロゾアとの距離を詰める。川

を越え、対岸についた時、奴の様子がおかしいことに気がついた。

『ギ、ギ、ギギギギギイイイイイイ！』

全身を小刻みに揺らし、両手に鋭い金属の爪を生やして奇怪な声を上げながらヒドロゾアが突撃してきた。

『ギギギギヤアアアア！』

「ッ、うあッ」

爪を振り下ろすような行動に、咄嗟に腕で防御する。しかし、爪の攻撃は装甲を貫いて腕を傷つけていた。

(ただのかすり傷だ、血管まででは行つてない)

装甲の自動修復が終了すると同時に、ヒドロゾアも構えをとった。ポータルが壊されたことでモードが変わったのだらう、体が少しゴツくなっている。少し目を離れただけでもものすごい変わり様だ。

(さて、まずはあの爪をなんとかするのが先か…素手だとあの爪を食らうかもしれないから…よし、これでいくか)

俺は腰のソケットからDフォンを抜き取り、剣と銃のイラストのアプリを開く。

『Weapon rise』

画面に現れた武器のアイコンの中から解放されている剣のアイコンをタップする。

『Photon gladiator forwarding』

『Vibro blade forwarding』

そして、光とともに2振りの剣が召喚される。1つは刀身が黒い片刃の直剣、1つは刀身がエネルギーでできた直剣で、どちらも相棒の昔の武器だ。

『ギイイイイ！』

ヒドロゾアが今度こそ俺をその手の爪で引き裂こうと飛びかかってくる。そして、振り下ろされた爪は、

「遅い」

ザンッ

俺に触れることなく、宙を舞った。

『ギギガガッッ』

「どうだい、俺のヴィブロ・ブレードの切れ味は？」

ヴィブロ・ブレード。この片刃の機械剣の特徴は、常に刃が細かく、高速で振動していることだ。その細かさは、原子・分子のつながりを容易く断ち切れるほど。カミソリよりも薄い、下手すると指を切断してしまいそうな刃と合わせれば、液体や気体はともかく、金属や岩石、ガラスなどの固体の物質ならば、切れないものなどこの世に、いやこの地球上にはない。

そして、この剣の対となる両刃の光剣、フォトン・グラディエーターは刀身がエネルギーであり、その密度はとても高い。

『ギ、ギイイイイ！』

片手を落とされたヒドロゾアが残った手を振り上げようとして、ドサツ

手が、いや腕が肩ごと地面に落ちた。その切断面は、溶断されたかのように赤熱していた。

何が起こったのか。答えは簡単、フォトン・グラディエーターの一闪で肩を焼き切られたのだ。

「このまま終わりにしよう」

腰のDフォンを抜き、両手の剣にかざす。

『Full charge!』

『Full charge!』

ヴィブロ・ブレードに黒いエネルギーが溜まり、フォトン・グラディエーターの刀身が白く輝く。その両方の輝きが最大となり、

『Critical attack! Sparkle circular!』

「フンッ！」

気合の叫びとともに、フォトン・グラディエーターで虚空を斬り上げる。もちろん、これだけでは攻撃にはならない。目的は、剣から放たれたエネルギーでヒドロゾアを拘束することだ。

『ガガッ☒』

光の柱で拘束されもがいているヒドロゾアに、全速力で近寄る。そして、

「セイッ！ハアッ！オオリヤアッ！」

右手のヴィブロ・ブレードで右一文字に斬りつけ、すかさず左のフォトン・グラディエーターで左上に斬り上げる。その勢いのまま両手の剣を右上から斬り下ろす。

『ガ…ガガッ…』

中枢をズタズタにされ、もはや崩壊を待つのみとなったヒドロゾアに、手向の言葉をかける。

「Heil 2 U! (地獄を貴様に!)」

右手の親指を立て、下に向ける。ヒドロゾアは断末魔の声を上げることなく、バラバラになって爆散した。

「…ふいふ、さて、さっさと帰って荷物を

パチパチ…

あ…？何処だ？」

突然頭上から響いた拍手に戸惑っていると、さらに声がした。

「流石ですね。中級とはいえ、まさか改良型ソルジャーをあつさり倒してしまうとは」

まあ、少々手間取ってはいましたけどね、と付け足す声は、少し高いが間違いなく男のものだった。

「誰だ…？」

そして見つけた。その声の主を。

「お前は、誰だ？」

What's the next episode…？

Ep. 7 「飛蝗の戦士」

錬side

「お前は、誰だ？」

「どーも皆さん、輝晶 錬だ。今、俺は新しい敵さんに話しかけている。どこにいるかって？木の上だよ。」

「ああ、名乗るのを忘れていましたね」

樹上の影は、勿体ぶるようなセリフとともに枝を降りた。影の正体は、緑がかった黒い軍服姿の20代ほどの青年。短く切りそろえられた髪の色は黒く、幼さの残る顔立ちには似つかわしくない吊り気味の目を鋭くしている。

「僕の名前は草下くさか 跳はねる。覚えて貰わなくて結構ですよ。だって…」

直後、何処からか取り出したナイフを俺に投げつけてきた。って危ねえな！細工などは施されてないごく普通のナイフだったので傷を負うことは無かったが、今のであいつの言いたいことがハッキリ分かった。が、ここは挑発も兼ねて、

「…何のつもりだ？」

「わかっている癖に、白々しいですよ」

「お前の口から聞かせて欲しいな」

「やれやれ。分かりきっていることを言うのは嫌いなんですけど、まあいいか…貴方は、此処で殺します。障害は手早く排除しなければなりませんからね」

目の前の男…跳とやらは声をトーンを落として、俺の殺害を宣言した。本気だな…コイツ。ま、そう簡単に殺されてやるつもりも無いけどな。

「自惚れるつもりはないが、俺は小さいとはいえアンタらの先兵隊を2度壊滅させている」

「ええ、知ってますよ。1回はこの目で見ましたから。その実力も理解しています。それが必ず僕等の邪魔になることも」

そして、奴は懐から何かの器具を取り出した。見た目は拳銃のグリップのような形状をしていて、人差し指のくるところにはトリガー

がついている。上の方には円錐形の太めの針のようなものがある。

「新兵器だそうです、僕専用のね。まだ完全に完成した訳じゃ無いようですけど、起動実験ということだ」

奴はそう言って、腰のホルスターから何かのカプセルを出し、グリップのような器具に差し込んだ。

『Grasshopper!』

直後、電子音のような音楽を引き連れ、何かが落ちてきた。土煙が払われる。その先にいたのは、巨大なバッタだった。

跳まの軍服と同じ色の表皮は金属のような光沢を帯び、その赤い複眼は無機質ながらもどこか意思を宿しているような光を宿している。そして、周りの木々をなぎ倒しながら飛び跳ね回り出した。

「何じゃ、これ…」

「節動物型金属生命体メタリカ。同じく新兵器とだけ言っておきましょう。これ以上話すと上から怒られかねませんし」

跳は呟きながら左手を胸の前に出し、右手の器具を左手にあてがう。

「融合」

トリガーを引く。

『Injectiooon!』チューー コポコポコポ…

やけにテンションが高い電子音声とともに液体が注入されるような音が響く。その後すぐに跳の体表に昆虫の羽を思わせる模様が浮かび上がる。と、さっきまで周囲を跳ね回っていたバッタがいきなり跳の上に落ちてきて、跳を押しつぶした。って、えええエエエエエ

⊗ 「うげえ…」

確かに敵は全員殺すつもりだし、そのためならどんな手段も辞さないつもりだけど！だからって目の前でスプラッタ繰り広げられても困るわ！つか、絶対あの下ロクなことになってないよ…と思っていたらバッタの体に波紋のようなものが走り、バッタが溶けた。

「ホッ…」

液体になったバッタは、体の中心に向かうようにより集まる。凝集

が終わったそこには、

「バッタ…人間…？」

全身がバッタのような金属の装甲で覆われている人間だった。その正体は、て、1人しかいないか。

「潰されてなかったのね」

「？何を言っているのですか？」

俺の独り言に手甲に器具を取り付けながら問い返してくる跳。別に気にしなくていいんだが…

「あーいや、こつちのことだから気にすんな。それよりも、さつさとおっ始めようぜ」

「…わかりました。全力でいかせていただきます」

ボクサーのような構えをとる跳。合わせて俺も構える。

風が吹く。それと同時に互いに向けて走り出す。

「ハアアアアッ！」

右手のヴィブロ・ブレードを跳の頭に向けて勢いよく突き出す。そのまま当たれば奴の頭は左右に泣き別れだが、そう簡単に事は運ばない。

「見えますよ」

跳は呟くと、体を左に傾けて突きを避け、

「胴がガラ空きです！」

追撃として腹に拳を叩き込もうとした。

「分かってんだよ、んなこたアよオー！」

跳の拳が当たる前に、右足を軸にしてヴィブロ・ブレードをなぎ払う。そしてその動きのまま左手のフォトン・グラディエーターを突き出す。なぎ払いを避けられたときの保険だ。

「」

とつさに屈んでなぎ払いを回避した跳は、左手の突きには気がついてるか左手と両足をバネに後ろに10mほど飛び退いた。ま、これくらいは分かるだろうな。

「驚いたな。なんだその跳躍力は、普通のバッタでもんなことできねーぞ？」

「普通のバツタがこんなことしたら、それこそ怪奇現象ですよ。ま、超強化された身体能力だと思ってください」

跳はそういうと右手を払い、バツタの意匠があるナイフをどこからか取り出した。

『Locus edge!』

ナイフー ローカスエッジを逆手に構え、俺に向かって突撃する跳。

「たあああああ!」

「オラアアア!」

ギイイイイイインツツ!

右手に逆手持ちしたヴィブロ・ブレードとローカスエッジが激突し、火花を散らす。

「ツ、まさかヴィブロ・ブレードで切断できないものがあるとは…いや、当たり前か。元はコレもあっちの技術だし」

「そういえば、何故あなたがヴィブロ・ブレードを所持しているのですか?それは僕達が製造できる装備の中でも上位のもの、この世界の見どころの技術力では作れるはずがないのに…それにその鎧、あのメタル・ドラゴンによく似ている。アレは確か、プロトタイプの1機と10機のナンバリング機のみが製作されて、その全てが消失したはず…コレは一体なんなのですか?」

なるほど。もう存在しないはずの兵器を何故持っているのか、ってことか。ま、その疑問は当たり前だよな。

「悪いが、それに関しては企業秘密ってことで」

「へえ。なら、力づくで聞き出させてもらいますよ!」

刃を弾いて飛び退き、また近づいて切り結ぶ。これを何度も繰り返すうちに、地面はボロボロに削れていた。

「テエヤアツ!」

「!!」

何度も斬り合っているうちに握る力が抜けていたか、右手のヴィブロ・ブレードをローカスエッジで弾き飛ばされてしまった。さらに間髪入れずに放たれた回し蹴りによってフォトン・グラディエーターを

遠くに飛ばされる。そのまま勢いを落とすことなく突撃して来た跳をバックステップで避ける。

「お返しだア！」

着地と同時に左脚で回し蹴りを繰り出す。咄嗟にガードの体勢をとる跳。俺は脚に内蔵されたブースターを起動して蹴りを加速し、

「ぶっ壊れろ」

跳の手首に叩き込む。

「ツぐ…」

衝撃で跳の手の力が抜け、ローカスエッジを取り落とす。

「痛ってて…容赦ないなあ。もう少し加減してくださいよ」

「敵にんなこと言って、はいそうですかと応じてくれるとでも?」

「思ってませんよ。でも今のは結構痛かった」

「そうかい、そいつはすまなかつたな(笑)」

右手を痛そうにさすって恨めしげにこつちを睨んだ後、さつきとは違う構えをとる。

「武器なしでの格闘戦か…乗ってやるよ」

「フツ、ありがとうございます。実は、僕の本来のバトルスタイルはこつちなんですよ」

No side

構えをとり、錬は開始の一步を踏み出す。ボロボロの地面に追い討ちをかけるように削り取りながら跳に拳を当てる。が、それほど効いていないのか平気そうな様子で弾き飛ばし、錬に蹴りを喰らわせる。そこからは単純。互いに殴り、蹴り、取っ組み合う。生身ならズタボロになる程の応酬は、しかし金属の外骨格に小さな凹みを入れるだけだ。

「ぐ、ラアッ！」

「つ、ハアッ！」

同時に突き出した拳が2人の頬を抉る。モロにクロスカウンターが決まった2人はよろめき、離れる。

「が…ぐ…」

「く…うあ…」

よろめきながらも構えを取り直す。見ると、相手も同じようだ。そろそろ体力も限界に近づいている。だから…

(だから次で…決める!!)

錬は腰のソケットからDフォンを抜き、側面のボタンを押す。

『Full charge!!』

Dフォンをソケットに戻し、全身を循環するエネルギーを両足に集中させる。

『Critical attack! Photon smash!』

跳はグリップインジェクトリガーを自身の左腿に当て、引き金を引く。

『Over Injection!』

インジェクトリガーを左の手甲に戻し、右足にエネルギーと装甲を集中させる。

『High Wind Strike!』

そして、必殺の一撃が激突する。

「デエアアアアア!」

宙へと飛び、空中で両足を揃えるように構えた錬は、背中のブースターで加速しながら光子の螺旋とともに突撃する。

「…ハッ!」

跳は迫りくる錬の蹴りに対し背を向けるように立ち、旋風を纏った左上段回し蹴りを繰り出し、錬を迎え撃つ。

激突の瞬間、辺りに閃光が走る。

「ウオオオオオオアアア!」

「テエアアアアアアアア!」

2人の戦士の魂を燃やしてかのいるような咆哮。そして、決着の時間が来た。

「ウワアッ!」

「グハッ!」

閃光は爆発へと変わり、爆風と衝撃が戦士たちを襲う。吹き飛ばされ地を転げた2人は、同時に起き上がる。そして、

「ぐ、あアアアアアアアア!」バチバチバチバチ!

錬の全身に電流が走り、変身が解かれる。生身の姿に戻り、力なく地面に倒れる錬にトドメを刺すべく歩み寄った跳は、

「う、ぐうウウウウ」

錬と同じように電流が走り、流体金属の装甲が溶け落ち、元のバツタに戻る。ダメージのあまり膝を突く跳。視界の先には、気力を振り絞って立とうとする錬。しかし、双方ともに戦えるだけの体力はない。

「…どうやら、引き分け…みたいですね…」

「ああ…そう…なるな…」

短い会話を交わし、跳は小さな箱のようなものを取り出す。

「使い捨てのコンパクト・ポータル。まさか使うことになるとは…」

「待て…」

「今回は撤退させてもらいます。また会う機会を楽しみにしていますよ」

天板を押してポータルを起動させる。阻止しようと手を伸ばす錬。しかし一歩遅く、跳の姿が消える。

「…クソッ」

取り逃した。

「錬！錬、大丈夫」

錬の近くに目玉だらけの空間が開き、中から女性が現れる。八雲紫だ。敵襲については知らせていないので、自分で見てたか、クロノスから連絡をもらったのだろう。

「…ゆ…かり…」

「錬…なにこれ、ボロボロじゃない！」

「すまん…少し、寝かせてくれ…」

「ちよつと錬…なに言ってるの、ダメ、目を開け…」

紫の言葉を聞き終わる前に、錬の意識は闇に溶けていった。

What's the next episode…?

Ep. 8 「ホットでHeatな新兵器」

錬side

「あーくそ、硬てえなこの野郎」

皆さんどうもこんにちは、輝晶 錬です。今現在俺は絶賛狩りゲームしてます。にしてもこいつ硬すぎませんかねえ、どこ殴っても弾かれるし。これがいわゆる糞肉質？

え？なにを狩ってるか、だつて？バ○ルモスだよ。モ○ハンたのちい。

「にしても、この前は紫に迷惑かけちゃったな」

3日前の草下 跳との激突の後、俺はそのまま眠ってしまったらしい。それも丸2日。目を覚ましたときの紫の心配そうな表情はとても印象的だった。コイツこんな顔するんだな、つて思った。というか、まだ会ってから一か月も経ってない奴だというのに、無二の友人、もしくは最愛の恋人が倒れたみたいないな表情は何なんだ？

あと、この幻想郷にいる数少ない医者、それも現代と遜色ないほどの医療技術を持つ永琳によると、俺の怪我は軽く見積もっても全治に1ヶ月はかかるくらいだったらしい。再生能力がここで働いてくれたようだ。

「ま、考えるだけ無意味か……ああアアアアアアアアアア」

思考を終了し、ゲーム画面に視線を戻した俺は、目の前の信じられない事実^に絶叫する。

『力尽きました』

「ウヅダドンドドコードーン！」

〜30分後〜

「あー腹立つ。マジで腹立つ」

ゲームを終えた俺は、今家の周りの林を散歩している。バサル〇ス？あの後畏と怯みではめ殺してやりましたよ。

「んーやることねーな。パズ〇ラでもすつか！」

さつきまでゲームしてたのにまた別のゲームをしようとしている自分にゲーム中毒にでもなったかと若干心配になりながらDフォン

を起動すると、スマホの液晶に見慣れないアプリを見つける。

「えーっと、『Expansion Arms』?こんなん入ってたっけ?」

名前からしてドラゴン・ウオリアーの強化用だろうが、まさかあの神（自称）が入れたのか?

「いや嬉しいんだけどね、戦闘手段が手に入るのは。でもさ、一言くらい言っただけだよなあ…」

♪♪♪♪

誰に聞こえるでもなく愚痴る俺の耳に、警報じみた通知音が響く。

「おつ、ちょうどいい時にきたな。どうせ暇だったし、相手してやるか」

まあ、暇じゃなくても相手はするが。

NO side

人里を囲う森、その中の開けた草原に機械的な門のようなものが屹立していた。ポータルと呼ばれるソレからは、人形の機械歩兵が次々と湧き出てくる。それに加え、人のフォルムから外れた金属の異形と生身の人間がポータルから現れる。異形の方は、大人の身長程もある球体から武器の装備された腕と4本の節足動物のような脚が伸びており、球体に刻まれた溝の上をカメラが動き回っている。そして人間の方は、少し前に輝晶 錬と戦闘を行い引き分けに持ち込んだ軍服の青年、草下 跳だった。

「で、どうです、そのバトルアーマーの乗り心地は?」

『ああ、最高だ。この『クロウ・ポッド』なら、お前の言っていたイレギュラーも楽にスクラップにできる』

そう言っただけに笑う搭乗者に、苦笑いを浮かべる跳。そう簡単にはいけばこつちも苦労はしない、と考えていた。

（だがこのバトルアーマー、耐衝撃性と対光学兵器バリアコーティング、そして特殊重兵器用徹甲弾の装填された重機関砲が搭載されているらしいですし…こつちには更なる調整を行ったメタリカとインゼクター ーあの鎧のことですー があります。撃破とまではいかなくとも再起不能にはできる…かもしれません。あくまで予想の話で

すが)

それに、たとえばバトルアーマー彼の操縦者が死んでも特に問題はない
：跳は小さくそう呟いた。

「来ましたね…」

草木を揺らす風の音に混じって、自動二輪の内燃機関エンジンの唸り声が近づいてくる。直後、目の前の森から龍を模した白いバイクが飛び出して、横向きに停車する。操縦者は被っているフルフェイスのヘルメットを取り、顔を晒す。女性のような優しさを感じさせる顔立ちの男は、しかしその涼やかな目をまるで獲物を見定める肉食獣のように細め、薄紅色の唇を険しく結んでいる。

「性懲りもなくまた来たか。ぶっ潰される覚悟はいいか？」

「こつちのセリフですね。今度こそ殺します」

互いの変身アイテムを取り出しながら睨み合う鍊と跳。

『0・0・1』

『Code photon stand by, ready?』

『Grasshopper!』

「アームド・オン！」

「融合！」

『Dragon warrior complete』

『Injectioooooon!』

それぞれの電子音が鳴り響き、2体の異形が現れる。

片や、一対の角と特殊合金の甲殻を持つ白亜の竜戦士。

片や、濃暗緑の装甲に身を包んだ飛蝗の戦士。

ここに、両陣営の戦力が出揃った。

鍊side)

「いくぞコラアアアアアアア！」

走り出した余波で地面にヒビを入れながら、眼前の大群に突撃する。十把一絡げのソルジャー共が襲い掛かってくるが、俺はそれらを殴りつけ、蹴り碎き、腕を振るい、脚を薙ぎ、捻じ上げて破壊する。しかし壊しても壊しても際限なく湧いてくるソルジャーに、少しずつだ
が押されていく。

「クソツ、フライトユニット・テイクオフ！」

『Flight Unit Take off』

背中のブースターが稼動し、爆風でソルジャーを吹き飛ばしながら飛翔する。そして安全圏である空中でアプリを起動する。

『Weapon rise』

そして、画面にズラリと並ぶ武器の中からロボットアニメに出てくるようなビームガンのグリップに弧状のパーツが付いた武器を選択する。

『Axe shooter forwarding』

『Single mode』

アックスシューターのグリップを握り、引き金を引く。銃口からは途切れること無く光線が放たれ、直撃したソルジャーが爆散していく。俺は地面に向けてブースターを蒸かせ、急加速する。その間に俺はアックスシューターのグリップの側面にあるダイヤルを操作する。

『Burst mode』

ソルジャーの群れに突っ込みながら、銃口から光弾をばら撒く。少し精密性には欠けるが、破壊力と攻撃範囲はとてん広くなりのソルジャーが爆発していく。

「ドンドンいくぞォー！」

アックスシューターのダイヤルを操作し、銃身を握って内部の棒状の持ち手を引っ張り出す。するとグリップ下のパーツから光の刃が出現し、手斧の形態へと変化する。

『Axe mode』

「ハアアアアア！」

加速しながら、斧モードのアックスシューターでソルジャーをすれ違いざまに切り裂いていく。ジグザグに飛行しながら雑魚を潰し、本命に突撃する。

「フンツツツツツ！」

渾身の力でアックスシューターを跳に振り下ろす。そこに巨大な丸い影が割り込む。敵のバトルアーマーだ。振り下ろしたエネルギーの刃がバトルアーマーの球状の装甲に刺さる。

しかし、相手のバトルアーマーには僅かな傷がついただけだった。
「固…ガツ☒」

直後、俺は宙を待っていた。ブースターで飛行しているわけではない。殴られたのだ、あのバトルアーマーに。

「づッ…づッ…」

勢いよく地面を転がり、そのまま体勢を立て直す。ドラゴン・ウォリアーの衝撃吸収能力のおかげで骨は折れてないが、殴られたときの鈍い痛みはまだ残っている。

『このクロウ・ポッドの性能はどうよ、イレギュラー？お前の持つ光学兵器や物理武装はコイツには効かない。なんせ、お前の戦闘データを基に改良を加えた機体なんだからな』

俺の戦闘データ：誰が持ってたかは簡単に想像がつく。このデカブツの後ろに佇んでいる黒鉄のバツタ、草下 跳だろう。

「だったら…コイツはどうかない！」

腰にアックスシューターを吊るし、反対側のスロットからDフォンを抜き、素早く操作する。すると、中空に光が走り、2本の剣を形作る。

『Photon gladiator forwarding』

『Vibro blade forwarding』

メタル・ドラゴン1号機にして俺の相棒『Photon』の初期装備であり、俺の愛剣たち。ヴィブロ・ブレードとフォトン・グラディエーター。

『コイツらも受け止められんのかア☒』

ブースターを蒸し、爆発的に加速する。右手のヴィブロ・ブレードをバトルアーマーの腕に向けて切りつける。刀身が半ばまで腕に刺さるが、それで限界か切り落とせない。すぐ様ヴィブロ・ブレードを離し、反対のフォトン・グラディエーターを相手の球面に突き立てる。が、貫けない。丸い装甲の一部を赤熱させただけで止まってしまっている。

『それで終わりかあ？なあ、イレギュラーさんよオ！』

相手のアーマーの脚が俺の腹を叩く。ブースターのおかげで大き

く吹き飛ばされる事はなかったが、吸収しきれなかった衝撃が体を走る。再度体を通り抜ける衝撃。どうやら地面に叩きつけられたようだ。しかも変身が解けたらしく近くにフォトンも転がっている。

「ガ…ハツ…」

立てない。体が上手く動かせない。

『なんだよインゼクター、お前はこんな程度の奴に負けたのか？せつかく変身したつてのに、これじゃお前が出る幕もねえな』

「貴方が勝手に僕の前に出たんでしよう」

『ケツ、悪かったよ。にしても、あのビームブレードの出力がもちよつと高かったらヤバかったな。例えば対光学兵器用バリアが貼られていても、熱で装甲を溶かされちゃ意味ないからな』

俺が気を失っていると思ったのか、ポロリと弱点を零すバトルアーマー。

(ね…っ…?)

そういえば、フォトン・グラディエーターの刃先のエネルギー量は温度にすると1500℃くらいはあるんだったか。集中したエネルギーが刃先の狭い面積で開放されればそれはかなりの熱になるだろう。だが、それでもあの装甲を破るには足りないらしい。もつと高い熱が必要だ。

(熱か…それは俺じゃなくてアイツの、焦也の得意分野だったな)

ふと脳裏に巡るのは、俺のかつての仲間…俺が向こうの日本軍から逃げてたときに一緒に過ごしていた仲間、その1人である陽気な熱血漢との交流の記憶。灼熱と火炎を纏う機竜を駆った青年、赤峰 焦也の記憶。

(あー、今ここにアイツがいりやーなー、畜生)

そんなifを考えていた俺は、ふと今朝見かけた謎のアプリを思い出した。アレには九つの異なる模様——炎、稲妻、十字の軌跡、銃弾、刃、爆炎と爆風、流水、竜巻、雪の結晶——が描かれていた。

(もしかしたら、アレってアイツらの機体の能力が使えるのか？だとすりゃこの状況をひっくり返せる…)

今は考えてる場合じゃない。一か八か、やってみるつきやない！

「ぐ、ぬううう…!」

『おお? まだ立てるのか。いいねえ、俺もまだ殴り足りなかったんだよオ!』

カメラアイが俺を向き、バトルアーマーが近づいてくる。その速度は速く、このままだと俺はまもなく轢き潰されるだろう。

Dフォンを握る。そして、『Expansion Arms』を開き炎のエンブレムを選択、コードを打つ。

『0・0・2』

『Code heat stand by, ready?』

俺の頭上に、赤いアーマーが出現する。炎と熱気に包まれたそれを見上げ、叫ぶ。

「イクスパンデッド・アームド・オン!」

ソケットにDフォンを嵌める。直後、全身にアーマーが合体しフォンのときと同じようなスーツが生成される。違いがあるとすれば、スーツのラインが水色ではなく赤であることか。最後に頭部をメットが覆って変身が完了する。同時に衝撃波が放たれ、目の前のバトルアーマーが後退する。

『Dragon warrior expanded』

その見た目は、サラマンダーの意匠がある消防士の耐熱服といったところだ。肩には一挺のキャノン砲、腕には一对の筒状の武装、腰には一本の剣。その名は、『ドラゴン・ウォリアー タイプ2:Heat』
『なんだなんだ、データにねえカツコだなあ?』

「新装備だ。さあ、こんがり焼かれる準備はOK?」

『残念だが、その前に俺がお前をバラバラにしちまうよ!』

バトルアーマーが自らの拳を打ちつけんと走り出す。人間なら知覚できない速度で払われる拳に、俺は腰の剣を抜き、あてがう。赤く輝く刀身に拳が触れ、まるでバターに温めたナイフを当てたかのようにするりと切り裂かれた。理由はただ一つ、剣にある。

『っ、そいつあ…!』

「そう、剣だ。でも、ただの剣じゃない。紅蓮の刃先が全てを断ち切る灼熱の剣

ヒートブレードだ」

ヒートブレード。この武器の最大の特徴は、最高8000度にも及ぶ熱を発する刀身だ。8000度といえば、太陽の表面温度に匹敵する温度だ。並大抵の物質では耐えることすらできない。ちなみにこの情報はヘルメットのスクリーンに書かれているものだ。

『厄アツ介だなあ、装甲をやられたら終わりなんだっつもの！』

背部、脚部のブースターを起動して下がろうとするバトルアーマー。だがもちろん、逃がすつもりはない。

「さつき聞いたよなあ、こんがり焼かれる準備はOKってさ！」

両腕の筒のロックを解除し、バトルアーマーに向ける。瞬間、筒の先から火炎が吹き出し、奴を包み込んだ。

『つづああーあ、熱っ、熱っちい！』

火炎が一部剥がれ、バトルアーマーが墜落する。背部と脚部がズタズタに壊れている。どうやら、ブースターが熱に耐えきれずに爆発したらしい。

『ぐ、この野郎…排熱システムまでおじゃんにしやがって…』

『そうか、じゃあこのまま蒸し焼きにでもするか』

『ヒツ、まつ待て。俺の知っている向こうの情報を教える、だから殺すのは待つて』

「そんなもんに興味はない。それに、お前が死んでも話を聞くことはできるからな。ということでは話は終わり」

…ッ、インゼクターッ！何見てんだよ、さっさと助けろ！』

そう跳に怒鳴るバトルアーマー、の操縦者。しかし、跳は動こうともしない。

「フフッ、お忘れですか？敗色濃厚な時には引くのも一手。まあ、貴方は置いていきますが」

『なっ…ふ、ふぎけんなあ！俺は「それに」っ』

バトルアーマーの台詞を遮って、僅かに声を落として跳が続ける。「俺はアンタらの味方なんかじゃ無いんですよ」

そう言って、個人用ポータルを起動する跳。

「さよならです」

『おつ、オイ待…』

バトルアーマーの腕が伸びる。しかし、それは空を切るに終わった。

『あ…あああ…』

「話は終わったっぽいな、じゃあさっきの続きといこうか」

『う…うあああああ！』

ヤケになったかのように残った拳を振るうバトルアーマー。しかし、それはヒートブレードで切り落とされる。

「そうだ、さつき蒸し焼きつつたが、スマン、ありや嘘だった」

『Full charge!!?』

「正しくは『焼き払う』になりそうだ」

腰からDフオンを取り外し、側面のボタンを押して戻す。すると、肩のキャノン砲、その砲身に赤い光が溜まっていく。

『Critical attack! Burning Blast
!』

両腕の装甲とバックパックから体を固定するためのアンカーが伸び、地面に刺さる。キャノン砲が変形し、エネルギーを放出する準備が完了する。そして、

「Fire!」

砲口から熱線　ー　実際は高温・高圧のガス　ー　が発射され、射線上のバトルアーマーを貫き、爆散させた。

「さて、帰るかな」

にしても、跳が去り際に残したあの言葉…どういう意味なんだ…?

跳sideゝ

さつきはマズいことを言ってしまった。上に報告されてない
といいですけど…もしもバレたら、僕は…

(父さん、母さん…待っていてください。僕が必ず…)

必ず、仇を取りますから…

What's the next episode…?

Ep. 9 「束の間の休息」

錬side

「んんん、いい朝だ」

皆さんおはようございます、輝晶 錬です。

「今日の朝飯何にしよ…その前にフォトン起こすか」

バトルアーマー（奇跡的に残ってたデータボックスを解析したところ、名前はクロウ・ポッドというらしい）との戦闘とドラゴン・ウオリアーの新装備追加から、特に戦闘もないまま5日経った。戦いが無いのはいいが、少し退屈だ…これじゃ戦闘狂みたいだな。

「そういや、今日は紫と会う約束があるんだったな」

そう、なんと今日は紫に呼び出しをくらっているのだ。何やら、話したいことがあるらしい…俺何もしてないよな？間違って民間人殺しちゃってないよな？

「…まずはフォトンだ、おーい起きろー！もう朝だぞー！」

キング・クリムゾンツ！

『ご馳走様でした』

フォトンの寝坊助を起こして、飯を食った。ちなみに、メニューはトーストとベーコンエッグだ。材料の調達？知らん、そんなことは俺の管轄外だ。

『で、兄ちゃん。今日はどうするの？』

「今日は人里に行く。紫に呼び出されたんだよ」

『へー、なんの用なんだろ？』

『さあ？』

服を着替え、家を出る。人里までの道を歩きながら、今妖怪に襲われたらどうボコってやろうかななどと考えていると、

ガサガサ…

「！敵か！」

咄嗟に構える俺。そして草むらから出てきたのは…

『ピギャー』

赤いラインと黒い金属の皮膚を持つトカゲだった。

「なんだコイツ？どつかで見たような…ああつ、Heatの！」

そういえば、5日前に追加されたドラゴン・ウオリアーの拡張装備で、俺の仲間だった赤峰 焦也の機体の能力を持っていたあのアーマーはトカゲのようなデザインをしていた。なるほど、小さくなればこうもなるか。

「さて、取り敢えずコイツも連れてくとして…名前何にしようか？」

『ヒートでいいんじゃない？』

「んな安直な…トカゲだし、リザード…というか、よく見たらコイツサンショウウオだな。サランダー…そうだ！ランダにしよう！」

なぜ俺はトカゲとサンショウウオを間違えたんだ？

「お前は今日からランダだ。よろしくな！」

『ピギャー♪』

どうやら気に入ってくれたようだ。

「そうだ、お前も行くか？紫に紹介しときたいし」

『ピギャー』

「そうか。じゃあチョイと失礼して…つしよつと」

ランダを抱き上げ、胸元に寄せる。

「さ、いこうか」

『ピギャー！』

〜青年移動中〜

「おお兄ちゃん、一昨日ぶりだな！ソイツあ新しいペットか？」

人里の入り口に着くや否や、門番のオツチャンに話しかけられる。

「ハハハ、ペット…まあおおむねペットだな」

「そうか。にしても、でつかいトカゲだな☒ひよつとして妖怪の赤ん坊とかじゃ…」

「違うよオツチャン。コイツはロボット…絡繰だ。見た目がトカゲなのは、そういうデザインとしか言えないな。あとサンショウウオな」
「ほう。それで、今日はなんの用だ？」

「ちよつと待ち合わせだね。茶屋のある通りに行くつもりなんだ」

「へ、彼女さんかい？」

「そんなんじゃないっての。つと、そろそろ時間だ。じゃあなオツ

チャン」

「おう、頑張ってるよ」

オツチャンとの世間話を済ませ、門をくぐる。そして、そのまま茶屋の通りに向かう。その入り口が待ち合わせ場所だ。

「さて着いたが、まだ紫は来てないな」

まあ、約束の5分前だし。来てなくても仕方ないか。

（5分後）

「お待たせ、遅れてしまつてごめんなさいね」

「いんや、時間ピッタリだ」

ホントに時間ピッタリに紫がきた。スキマは使つてなかった。ここ人里だし、あまり目立たない方がいいかもしれないが。あ、紫の服装だが、藤色っていうのか？なんか薄い紫色でロングスカートのワンピースだ。柄は花だな。

「どうしたの？黙り込んでるやつ」

「いや、似合ってるな」

「ちよつ：」／／／

「？どうした？」

「な：…何でもない」／／／

「そうか」

「…この鈍感め」

「なんか言つたか？」

「いいえ、何も。そういうえば、その子は？」

そう言つて、紫は俺の胸元のランダを指差す。

「ああ、コイツはランダ。さっき拾つたんだ」

「へー。もしかして、この子つてフォトンと？」

「もちろん、同じだ」

（青年&BB（ドゴツ：少女移動中）

「紫、結局話つて何なんだ？」

「ああ、それはね：…どうせなら、あそこで話しましょう？」

そう言つて指を差す紫。その先には茶屋の暖簾がある。

「お、いい考えだな。小腹も空いてきたし、なんか食つてこうぜ。フォ

「トンは？」

『オイラも賛成！』

と満場一致なので、入店することになった。茶屋（店名は牧野庵というらしい）の入口の隣には、座席と日よけのための傘。店内は案外広く、通路の両側に座敷があり、そのうえには4人掛けの席が3席ずつ、合計6席ある。そのうちの1席に座り、店員の少女に2人分のお茶と団子を注文する。

「じゃあ話すわね」その言葉から紫の話が始まった。

「最近、変な夢を見るの。と言っても、別に悪夢とか予知夢って訳じゃなくて、本当に普通の家族の夢」

家族という言葉に、俺の胸がチクリと痛む。過去に俺が見殺しにしてしまった、とある少女の家族の姿が脳裏に浮かぶ。だが、紫の夢に出てくるのは多分別の家族なのだろう。

「へー、そんな夢を見たのか。それだけか？」

「これだけだったら別にあなたを呼んだりしないわ。…不思議なところがあったのよ」

「その夢にか？」

「ええ。まずは、その家族全員に既視感を覚えたこと。会ったこともないはずの家族なのにね。2つ目は、家族、両親と女の子1人の3人なんだけどね、その女の子に関するだろう情報だけが認識できないこと。名前や声にはノイズがかかって、顔は暗くて見えなかったわ」
「なるほど。後は何かあったのか？」

俺は紫に質問する。紫は少し躊躇うように視線を逸らした後、ゆっくりと話を続けた。

「…3つ目は、あの夢に鍊にそっくりな男が現れたことよ」

紫の言葉に、俺は絶句するしかなかった。俺の悪い方の予想が、紫の夢があの子の少女の出来事なのではないかという予想が当たってしまったかもしれないからだ。

「…まあ多分、思い過ごしでしょうけど。ねえ鍊、どうしたの？すごく険しい顔をしてるけど」

「っ、ああ、何でもない。そうだな、多分その通りだ」

そう、その通りだ。これはただの夢、ただの紫の思い過ごし。あの少女とは無関係のはずだ。

ちなみに話の間、フォトンとランダは俺が頼んだ団子をひたすら食っていた。おかげで俺の分を追加注文するハメになった。

松木庵の前で紫と別れた俺は、少し人里を散策した後家路に着いていた。そんな俺の頭は、先刻の紫の話でいっぱいだった。

(さつきは思い過ごしだと否定したが、もしあの夢があの子のことなら、俺は…)

そこまで考えて、かぶりを振る。

(よそう。こんなことを考えても無意味だ)

言い訳じみた理由をつけて、無理やりに思考を終わらせる。いや、実際言い訳なのだろう

本当は…怖いのだ。彼女のことを思い出すのが。彼女が死に際、自分にどんな思いを持っていたのか、なんと言おうとしたのかを思い出すのが。だからもつともらしい言い訳^{理由をつけて}を吐いて逃げている。

(ごめんな、■■■■…こんなダメな男で…)

跳side)

「…最上級研究職員のパスとはいえ、セキュリティが嚴重ですな」

僕：草下 跳は、さつきその辺で会った研究員を後ろから襲って奪った…お借りしたカードキーとセキュリティランク(リストバンドにインストールされています)を使って軍のデータベースに潜っています。目的はもちろん、こここの機密情報をいただく為です。

(新型ソルジャーに新装備の配備、特にどうでもいいことばかりですね)

それにしても、彼らは何故あの世界を侵略しようとしたのでしょうか？ただの慰安婦目的なら、こう言ったら失礼ですがそこら辺の女でも使えばいいだけの話…何か別の目的があるのでしょうか？だとしたら、考えられるのは資源、土地、食糧…ですが、そのどれもが目的には当てはまらないようにも思えます。

(ん？このフォルダ、どのデータも文字化けだらけですね。こんな故

障ファイルが放置されているなんて、アイツらのフォルダ管理能力はどうなって…あれ？」

僕は文字化けした複数のファイルの中に、不可解な内容が記されたファイルが一つあるのを発見しました。内容というのは、数字の列。但し、単なる数列ではなく漢数字とアラビア数字が混ざっているという奇妙な組み合わせの数字の列ですが。

(何ですかね、コレ？ただの数列…ではないですね。それなら漢数字は必要ないし。乱数表…ならばコンマやクオーテーションマークが入っているのはおかしい…一体何なんですか、ホントに？)

パソコンの前で唸りながら数列を解読しようとする僕。しかし、どれだけ考えても数列の意味の手がかりさえ掴めない。そもそも一四とか六一とか何の意味があるんですか、何かの組み合わせで…組み合わせ？

(ひょっとしてコレ、五十音に翻訳できる？)

脳内に表を作る。漢数字は一から十までであるのに対し、アラビア数字は1から5までしかない。アラビア数字を表の縦に置いて母音を当てはめ、漢数字を表の横に置いて子音を当てはめれば五十音表が完成する。「ん」にあたる数はゼロだ。これを当てはめて数列を解読し、「…これは」

その結果に、僕は絶句した。この科学者たちは人道とか倫理とかを奈落の底に全力で投げ捨てたのかと言いたくなるような人間ばかりでしたが、この内容はそんなレベルを超えている。

『龍の子計画』の報告書及び不適合個体の始末報告…?』

What's the next episode…?

Ep. 9 「共闘」

跳side)

(はあ、予想はしてたけど…面倒なことになりましたね)

どうも、開始から出てくるのは初めてですね。草下 跳です。ただ今現在、僕が何をしているかと言うと、

「逃すな！裏切り者を捕縛しろ！」

絶賛追われてます。何故かって？前回のデータベース侵入がバレました。と言っても、バレること前提でやりましたし、今の状況は結構好都合なんですよね。抜けるの楽だし。

「大人しく投降しろ！」

「殺されると分かかって止まるバカが何処にいますかねえ！」

いい加減、鬼ごっこにも飽きてきました。なので、

「ポチツとな」

最新型個人用次元転移装置、通称「お一人様ポータル改良版」のスィッチを押して足元に設置します。作動から転送までの時間は0.1秒。追手は銃を持っていますが、人間の反応速度と同等の速さで転移されては何も出来ないでしょう。

「では、さようなら(笑)」

「クソがあッ！」

ポータルの転移が始まった証である青い閃光に視界が塗りつぶされる中、悔しがる追手のリーダーにむけてとびっきりの腹が立つ笑みを向けてやりました。

く青年転移中く

「見覚えのある天井…いや、青空だ」

視界が晴れると、そこに広がっていたのは森でした。一面見渡す限りの木、木、木。鬱蒼、と言うほどではありませんが、かなり先まで木で埋め尽くされています。

「さて、幻想郷に逃げたのはいいんですが…どうしましょう？」

僕が転移した先は幻想郷、僕も参加していた作戦の侵攻先です。幸い、今まで僕の姿はあの機竜の戦士以外には見られていませんし、と

りあえずは迷い込んだ一般人のふりをし

「おいお前、何やってんだここで」

…気のせいでしょうか、今すつごく聞き覚えのある声が聞こえたよ
うな気がしたのですが…

「おい聞いてんのか、ここで何をやってるんだ？」

「……………」

「アイエエエエエエエエ☒ドラゴンライダー☒サン☒ドラゴンライダー

☒サンナンデ☒」

「…なんでニンジャリアリティショック発症してるんですかねえ…つ
か、懐かしい呼び名だなオイ。ここが俺の家の近くだからだよ」

「嘘でしょ…」

最悪だあ…今この場で最も会いたくない人物にエンカウントして
ますよ…しかも大まかにセットした座標が家の近くとかどんな偶然
ですか。あ、一応補足すると、ドラゴンライダーってのはメタル・ド
ラゴンの搭乗者のことです。

「とりあえずもつかい聞くぞ？お前はここで何をしてた？」

「……戦闘準備、と言ったら？（震え声）」

「いいだろう、その喧嘩買ってやる」

「じ、冗談です!!? 貴方ってそういうの通じないタイプですか☒」

！
こつち今ホントに余裕のないのに！下手な冗談言ったの僕ですけど

「わーってるよ」

「あーもーヒヤヒヤさせないでください…もう冗談は抜きです。僕が
ここへ来た目的は…」

ブウウウウウン……………!

突如背後から鈍い振動音、空間が歪む音が鳴り響く。嫌な予感とと
もに振り返ると、見慣れた門のような機械、次元転移装置「ポータル
ver. 4」が鎮座しており、そこから雑下級ソルジャー兵がまるで不衛生な場所
にワラワラ出現する黒い昆虫のように湧き出し、続いて、

「見つけたぜえ、裏切り者」

つい先程撒いたばかりの追手が、下品な笑みを浮かべ、立っていま

した。

錬side)

ドーモ、皆さん。輝晶 錬です。なんか忍殺風に挨拶しちゃったけど、さっきの跳に引つ張られたかな？

まあそれは置いて、今俺の目の前には見覚えのある（本当なら見たくもない）ポータルと雑魚ソルジャーども、そして人間の兵士が数人立っていた。

「見つけたぜえ、裏切り者」

裏切り者だとお？俺はそもそもお前らの味方だったつもりはない！と言おうとして、男達が俺を見ていないことに気づいた。その目線を追ってみると、苦々しげな表情を浮かべた跳の姿が。

（なるほど。アイツが何かやってこつちに逃げてきた、と）

具体的に何をしたのかはわからない。が、今跳が奴らと敵対しているのは事実だ。

（さて、どうしたもんかねえ…）

正直、まだ跳を信用しきれてはいない。この全てが壮大な演技…とこののは飛躍しすぎかもしれないが、可能性が無いわけじゃあない。だが、

（今回は、コイツ側に着いてみるか）

俺はズボンのポケットの中でDフォンを操作する。選んだアプリは武器。そのメニューの中から一丁の拳銃を選択、後ろに回した手に転送する。ズシリとした重みと共に俺の手に収まる銃は、人に向けるには大きい口径を持つ、マグナムと呼ばれるものだ。元は熊狩りに使われたというそれを体で隠しつつ、目の前の敵に話しかける。

「おいおい、俺を無視して話進めんなよ。寂しいじゃねーか」

「ああいたのか、例のお邪魔虫。ちようどいい、ついでにテメエの首も貫つておいてやるよ。俺達の昇進の土産としてな！」

リーダー格と思しき男は勝ち誇った笑みを浮かべながら、俺の首を取ると宣言してきた。いいのかなくそんなこと言っちゃって。

「ほく、お前らは俺の首が取れる程の実力があるんだな？そいつは楽しみ…だ！」

ダアンダアン！

隠していたマグナム：俺が初めて幻想郷に来たときに使っていたデザートイーグルによく似た銃だ…を構え、銃口を男…の両隣で武装を構えようとした複数のソルジャーに向け連続で全弾発砲する。転送された時点で弾は込められているので引き金を引くだけで弾が飛び出るって寸法だ。よく暴発しないよな。ヘッドショットをかまされたソルジャーどもがのけ反りながら後ろに倒れていく。男は驚愕していた。

「これすら見切れないのに、俺を倒すって…ビッグマウスも程々にしといた方がいいぜ？」

「デメエ…まあいい。俺たちにはこれがあるからな！来い！」

男が呼びかけると同時に、ポータルから身長2メートル半はありそうな巨漢が現れた。いや、巨漢というのは間違いだろう。正しくは2メートル半の巨躯を持った、リクガメのような人型ロボットだ。

「行け、トータスソルジャー！ソイツらをグシャグシャに叩き潰せ！」
ロボット、トータスソルジャーは命令を受けるとともに、その巨体からは考えられない俊敏さで俺に近づき、両手を組んで振り下ろしてきた。

「て、危ねえッ！」

咄嗟に後ろに跳んでアームハンマーを回避するが、直撃した地面に小さなクレーターができていた。

（あんなのが直撃してみると、ミンチよりヒデエ目に会うのが容易に想像できるっての！）

すぐにデザートイーグルに次弾を装填し、トータスソルジャーに発砲する。しかし、撃ち出された弾丸はトータスソルジャーの合わせた両腕に防がれる。腕についた甲羅が盾の役割を果たしているようだ。「チツ、かってー野郎だな。オイ跳、アイツスクラップにするの手伝ってくれ」

「…人にものを頼む態度じゃないですよね、それ。分かりました、一応は協力しますが、僕の優先事項はあっちなので」

そう言つて男達を指差す跳。

「別にいいぜ、そつちを片付けてからでもさ」

「ありがとうございます」

俺はポケットからDフォンを取り出し、変身用のコードを打ち込む。隣では跳がグリップに黒緑のカプセルを装填している。

『0・0・2』『Code heat stand by, ready?』

『Grasshopper!』

「イクスパンデッド・アームド・オン！」

「融合」

準備が整ったことを示す音声とともに、俺たちは各自の変身プロセスを完了させる。

『Dragon warrior expanded』

『Injectiooon!』

俺の体に粒子変換されてきたフォトン（家で留守番している）の装甲が取り付き、スーツが生成される。跳の方は、相変わらずバツタに潰されてた。

「だから潰されてませんよ☒」

「的確なツツコミありがとうございます」

そして、竜の鎧の戦士と飛蝗の鎧の戦士が並び立つ。

「さつきも言った通りに、俺はあのデカブツを、お前は追手を片付ける。それでいいな?」

「もちろん。一番苦戦しそうな相手を引き付けてくれるんですから、むしろ感謝したいくらいですよ」

「はっ、そうかい。そうだ、折角だからなんか決めゼリフみたいな言わね?」

「別にいいですけど…僕は言いませんよ」

まあそれならそれでいいさ。さて何にしようか…決めた、コレにしよう。

「ドラゴン・ウオリアー02・Heat、^{エンゲージ}交戦。これより殲滅行動を開始する」

What the next episode…?

Ep. 10 「電光と斬撃」

跳side)

「フツ、ハアッ！デヤア！」

どうも、跳です。現在絶賛戦闘中です。相手は僕宛の追手が5人、全員がヘルメットつきの強化外骨格を身につけています。あと雑魚がダース単位でいましたが、木々の間を飛び回りながら蹴り飛ばしてたら数分もかからず終わってしまいました。問題は追手です。強化外骨格を身につけているだけならまだいいのですが、

「効かねえなあ！こんな程度かよ、ええ？オイ！」

「くつ、攻撃が通らない……！」

拳や蹴りが全くと言つていいほど通用しないのです。おそらく、強化外骨格に衝撃を吸収する機能がついてますね。打撃主体のホツパーアーマーとの相性は、はつきり言つて最悪です。何度か攻撃してある程度強いものならよろめかせはできることが分かりましたが、結局そこ止まり。肝心の内部への攻撃は果たせません。ローカスエツジは1度召喚しましたが、情けないことに手を撃たれた際に取り落としてしまいました。

「オラ、背中がガラ空きだぜ！」ババババババババ！

「グツ……」

背中に連続した衝撃。いつの間にか背後に回っていた他の追手（ここではAとしましょう）、Aが持っていたアサルトライフルの射撃でした。追手達は森林という地形を利用し、僕から10mの距離を維持しつつ木々に姿を隠しながら僕を攻撃し続けているのです。ホツパーアーマーの持つ跳躍能力ならば10mの距離などないも同然なのですが、いかんせんその移動は直線的。見当違いの方向に飛んではまえば大きな隙を晒す羽目になるのです。普段なら僅かな気配を探知してその場所にピンポイントで跳べばいいだけの話なのですが、今回ばかりはそうもいかないようです。

（…ダメだ、気配を探れない。超音波か何かで集中が散らされているようです。アーマー自体の索敵機能もジャミングがかかっています

すね)

こうなってしまうと、姿を見せた敵を1人づつ潰していく、という手段しか取れそうにありません。ハイウインドストライクなら外骨格を貫通して攻撃が通るとは思いますが、あれは1度使うと20分は使えなくなるので、あまり連発はできません。

(もう戦闘開始から10分経っている。これ以上隠れんぼを繰り返しているのは、こっちのスタミナが持たない。このままでは打つ手なし、ですね…)

そう、このままでは。

(まだ調整が終わって無いけど、これを使うしか道は無さそうです)

僕が鎧から取り出したのは、若草色のカプセル。あのドラゴンライダーの青年との戦闘データから作り出し、昨日までずっと調整を続けていた新装備です。

(まあ、試運転には丁度良いかも知れませんが)

インジェクトリガーを取り出し、その中に装填されているカプセルを入れ替える。

『Mantis!』

そして、左手を胸元で構え、インジェクトリガーを押し当て、引き金を引く。

「二重融合」

『Dual Injection!』

左手の掌を起点に、腕に、脚に、胸に、鎧の全体に波紋が走る。そして、鎧が融解し、その姿を人型のバツタから人型のカマキリへと変えていく。その細いシルエットの所々に武器が内蔵されている鎧は、一見すると暗殺者か忍者のように見える。加えて、背中から胸にかけてはカマキリの前脚のような装飾に覆われていた。

「インゼクター・マンティスアーマー、アクティヴ起動」

これが僕の新装備、マンティスアーマー。機能は色々付いてますが、その辺りはまた後で。

「さて、ここからは僕のターンです」

「フン、姿が変わったぐらいで粋がつてんじゃねえ!」

「では、この実力を体験させてあげましょう…命の保証はできませんが」

「抜かせ！」

追手の男（こいつはBですね）、Bが手の中の得物を向け、弾を撃ち出してきました。

「おっと」

横に転がって弾を避け、姿勢を立て直しながら両腰にマウントされていた2振りの鎌「プログレスシックル」を両手に構えます。

「そろそろ、まだあるぜ！」

Bに加え、Aまでもが僕に向けて発砲します。迫りくる銃弾、僕はそれをプログレスシックルを振るって切断しました。

「な…」

「ぼんやりしてて良いんですか？」

「ハッ、しまっ…」

Aが何かを言い終える前に、僕は両手のプログレスシックルで挟み込む形でAの首を切断しました。どうやら、この強化外骨格は切断系統の攻撃には弱いようです。

「く、クソッ」

Bが急いで僕から離れようとはしますが、

「逃がしませんよ」

右手のプログレスシックルをBの頭に向けて投げました。投げられたそれはBの後頭部に見事命中、鎌とヘルメットの間に噴水のように鮮血が吹き出します。

「う、うわあああああ！」

隠れていた男、Cが叫びながら逃げようとしています。

「おやおや、隠れんぼのルールをご存知ないのですか？僕わたしに見つかったら、ゲームオーバーですよ？」

直後、胸の装飾、正確には折り畳まれて装飾のように見えていたマニピュレーターアームが展開される。

「行け」

僕の命令とともにアームが勢いよく伸び、逃げようとしていたCを

捕らえました。

「やめろお！は、離せえ！」

「引き寄せろ」

命令を受理したアームが動きと同じ速度で縮み、Cを僕の元に連れてきました。およそ時速50kmで近づいてくるC、正確にはその心臓にプログレスシツクルの刃を向け、

ザクリ

「あ……が……」

僕の手にはAの時と同じように肉を貫く感触が伝わります。相変わらず気持ち悪いものですが、今は我慢。プログレスシツクルを右に動かして、脊椎もろともCを切り裂きました。

「クソオオオオオオオ！」

自棄になったか残っていたD、Eが僕に銃を向けてきました……あまり時間を掛けたくはありませんしとつと片付けてしまいましたよ。う。

「これで、終わりです」

インジェクトリガーをプログレスシツクルに接続し、引き金を引きます。

『Over injection!』

音声と同時にプログレスシツクルとマニピュレーターアームにエネルギーが充填され発光し、その終わりと共に輝きがピークに達しエネルギーの刃を生成しました。

『Crescent Slicer!』

「ハアッ！」

腕を振り抜き、プログレスシツクルとそれと連動しているアームから光刃を飛ばしました。光刃は周囲の木々を切り裂きながらDとEに迫ります。

「う、うあああああ！」

光刃に気づいたEが撃ち落とそうと試みますが、銃弾は光刃に触れるや否や溶断されていきます。そして、抵抗も虚しくDとEは光刃に両断されました。

「さようなら」

2体の死体が地面に転がる音に被せるように、小声でそう呟きました。

『追跡部隊の全滅、及び戦闘用強化外骨格全機の損壊を確認。損壊は修復不可能です。よって、機密漏洩防止の為に自爆処理します』

そんな警告ののちに転がっていた死体の全てが爆散しました。それと同時にアーマーの索敵機能のモニターからモザイクが消滅しました。

「お、感覚と索敵機能が回復しましたね。伏兵はなし。雑魚は一番最初に片付けてポータルも破壊したから増援もなし」

モニターを見たところ、どうやらあちらも戦闘が終わったようですね。

「では、彼の所に行ってみますか」

鍊 side

ども、輝晶 鍊だ。今俺はカメみたいなデカブツ、トータスソルジャーと睨み合っている。

え、雑魚？跳が真っ先にぶつ潰してましたが、何か？

話を戻そう。コイツは見た目からして動きは鈍そうだが、油断はできない。こういう奴って大抵パワー型だし、何より腕に取り付けられた盾が厄介だ。弾丸じゃまず歯が立たないし、そのまま殴るなんてアホの行動だ。ヴィブロ・ブレードならなんとか…ならないかもしれない。分厚い金属板を斬るのはただの装甲を斬るのとは訳が違う。ましてやヒートブレードなんて熱の伝わり具合によつてはもつと時間がかかるぞ。ヤベエ、選択ミスったかも…。

「い、いや、まだ火炎放射と熱線がある！アレでなんとか…なるかなあ…」

とにかく、ダメ元でやるしかない。両腕の火炎放射器を展開し、構える。まずは小手調べだ。

「そらよっー」

右手から炎を吹き出した。攻撃に反応してトータスソルジャーはすぐ様盾を突き出し、それに炎が当たる。盾の表面が赤くなり始めた

が、一向に溶ける気配がない。当たり前か。

「なら、コイツも食らえー!」

左手からも炎を吹き出す。どちらもトータスの盾を焼き続けるが、盾の色を変えるだけだ。

(ん? いや違う。ちよつとだけど、表面が融けている)

熱による攻撃が効いてきている。このままダメ押しだ!

「ほら、遠慮なく食らえー! なんならおかわりもあるぞ!」

火炎放射の出力を上げ、さらに盾を融かす。そして肩のキャノン砲を展開し、エネルギーを溜める。しばらく後にエネルギーが許容量の100%に到達し、射撃の態勢に移る。

『Full charge!』

「いきなり全力だ、かなりの威力だぜ? 防げるもんなら防いでみな!」

砲撃。高圧の環境から解放された高温ガスが真っ直ぐトータスの盾に向かって飛び出す。「!!?」

その攻撃の危険度を察知したのか表層が融けた盾をよりしつかりと構えるトータス。そして盾とガスが接触し、

ドゴオオオオオオオンツツ!!

大爆発。爆風に軽く煽られるが、体が地面に固定されているため倒れることはない。土煙に紛れてトータスの姿は見えない。

「…奴はどうなった?」

やったか? とは言わない。それはフラグだ。

「……………」

警戒を解くことなく消えゆく土煙の向こう側を睨む。その先には、

「……………」

腕の盾は使い物にならないほどに砕けてはいるが、本体はピンピンしているトータスがいた。

「…どんっただけ硬いんだよ、あの盾は」

砲台の冷却を開始した。全力を撃ち出したんだ、さらに続けて撃とうものなら砲身が吹き飛ぶな。加えて本体のエネルギー残量も少ない、後数分もすれば装甲を維持出来なくなるだろう。

(さて、どうしたものか。ヒートはもう使えそうにないし、フォトンだ

と決定打に欠ける。ヴィブロ・ブレードならワンチャンあるか…)

ふと、攻撃の構えに移ろうとしているトータスの胸部を見る。やっぱり銃弾じゃかすり傷一つ付きそうにもない胸板には、しかし小指ほどの隙間が空いている部分があった。どうやらそこだけは装甲が薄くなっているようだ。

(参ったな、俺はヘッドショットはできても精密射撃は苦手なんだよ、反動でブレるからさ)

え、レーザーブラスター？あれは反動ないだろ？だったらそれ使え？今あれバージョンアップ中なんだよなあ…ホントに間の悪いことだ。

(にしても、ホントどうするよ？ここには弾丸並みに小さくて反動がなくて、尚且つ高威力の武器なんて…さてよ、もしかしたらアレが使えるかも…)

腰のDフォンを取り外し『Expansion Arms』を起動、稲妻のエンブレムを選択する。

『0・0・3』

『Code electric stand by, ready?』

「イクスパンデッド・アームズ・オンツ！」

Dフォンの装填と同時に頭上の黄色のアーマーが分解され、素体スーツだけの俺に接続する。左右で形状の違う籠手、腰に装着された2門のニードルガン、ヒートとは反対の右肩に装着されたレールガン。両肩には鹿の角のような放電装置が付いている。全体のシルエットは所々に鹿の意匠がある日本の甲冑。

『Dragon warrior expanded』

『ドラゴン・ウォリアー タイプ3:Electric』、コンプリート

合体完了とともに衝撃波を添えて周囲に放電する。残念ながらも大したダメージをトータスに与えることは出来なかったが、それでも少しの間動きを止めることはできた。

「今だ！」

腰のニードルガンを展開し、1カートリッジ分の針 ー後部には円

柱形の発電機が付いているー を撃ち出した。針は一本残らずトータスに突き刺さり、発電機から電力が供給される。

「いくら外殻が硬くても、中身を狙われたらどうしようもないよなー！」
左手に出現したスイツチを押し針の先端からトータスに放電、一呼吸置いてトータスの各部が爆発し、沈黙した。どうやら重要な回路が軒並みやられたらしい。運良く何処かのコードに刺さったのだから。

「なーんか、あっけないなあ……………」

「なんというか、消化不良だ。」

ドゴオオン……………」

「あ、向こうも終わったっぽいな」

索敵レーダーにはこっちに向かって移動してくる影が映っている。確実に跳だらう。

「あいつが来るまで待つか」

NO side

「お待たせしました」

「おー、そう時間も経ってないから気にしないでいいぞー」

既に変身を解いている鍊に、こちらにも変身を解きながら跳が歩み寄る。

「そつちは5人抜きだろ？なんとかなったか？」

「ええ。苦戦はしましたが、新装備の性能テストに付き合ってもらいました」

『『試し斬りの的』の間違いだろ』

「まあ、そうとも言いますね。そちらは？」

「なんつーか、さっきまで苦戦してたのに方法を変えたらあっさり終わっちゃった。消化不良の一言しかねえな」

「…ちなみに、何をしたんですか？」

「え？熱が効かなかったから内側に高圧電流流し込んだ」

「そりゃあっさり終わりますよ☒」

互いの戦闘の経緯・感想を伝え合う2人。両者の間には、数日前までの敵意はなかった。

「それで？お前はどうすんだ、跳？」

「んーそうですね、とりあえずこの付近で寢床になる場所を探します。僕には侵略者どもの出現を探知することはできないので、見つけ次第連絡してください。できる限りで駆けつけます」

「もし、協力するふりして俺の背中を狙ったら…」

「しませんよそんなこと。もうあなたと敵対する必要がないんですから、やったって損害が増えるだけです」

「そうか、ならよかった」

それでは、と寢床を探しに行こうとする跳、しかし鍊は彼を呼び止めた。

「おい、跳」

「なんでしよう？」

「…いつか、決着つけようぜ」

「フツ…望むところです」

What's the next episode…?

Ep. 11 「危険なH」

跳side)

「ん…朝ですか…」

おはようございます、草下 跳です。ここは山の麓にある小さな洞窟、数日前に見つけた僕の寢床です。広さは人が2、3人でギリギリと言ったところでしようか。まあ、1人で生活するには困らないスペースなので問題はないですね。

グクキュルルルル…

「さて、食事はどうしましょう」

そう、今現在目下の問題は食事です。実はここ数日間、ロクに食事ができてません。携帯食料を向こうの世界に忘れてきてしまったからです。

「この付近で食べられる植物を探して、あと川があれば魚も釣ってみますか…サバイバルキットが入ってたのは本当に不幸中の幸いでしたね。はあく、なんで携帯食料忘れてきたんだろ…」

ホント、慌ててたとはいえ携帯食料を忘れたのは僕のミスです。

「ここどうだうだ考えていても仕方ないし、まずは川を探しに行きますか！」

気分を変えるために頬を叩き、僕は荷物を持って洞窟を出ました。目指すは大きめの川、道中に食べられる果実の類でも有れば万々歳ですね。

〜数分後〜

「なあんでですかあ…?」

森の中を歩いて数分、残念ながら道中で果実は見つけれられませんでしたが、ある意味で川よりも大収穫なものを発見しました…面倒事も一緒についてきますが。

「侵攻部隊の野営…食料の備蓄はありそうですが、どうあがいても戦闘になりますよね…」

これから起こるであろう事態を予想し、ゲンナリとなる僕。だってそうでしょう?食料を探しに行ったら戦闘になりましたって、何処の

RPGゲームだつて言いたくありませんよ。

「彼に連絡を入れておきますか」

ポケットから携帯電話（事前に用意されてたらしく鍊に渡されました）を取り出し、鍊（貰った携帯にフルネームと連絡先が記録されました）に「侵攻部隊発見」とメッセージを送りました。

「さて反応…返信早っ。何々、『すぐ行く』：場所教えてないんですがわかるんですかね」

「一方、鍊は」

「しまったー☒跳から出現情報もらったのに場所聞き忘れたー☒」

「何やってんの兄ちゃん…」

『ギョア』

「つーかリーダーに反応が全っ然ないんですがあ☒故障かよ、とりあえず開発者に電話するしかねーな…」

「」

「多分すぐには来れませんよね…一人で頑張りますか」

「どうやら見張りは少ないようですし、ここはステルスでいきましょう。」

NO side

平行世界の日本軍、その異界侵攻部隊。彼らは過去数回にわたって幻想郷に侵略を仕掛けていたが、正体不明の竜戦士と裏切り者の昆虫戦士によって悉く壊滅させられた。

この結果を受け部隊の上層部は方針を変更、敵対存在2名に見つからないように潜伏し、ゆっくりと制圧する作戦に出た。この野営はそのための前線基地だ。

「ういしょっと、これで物資は全部かな」

倉庫と思しき小さな建物で、弾薬の入った箱を床に置きながら男が呟く。男は物資の運搬やその他の雑務を行う、いわゆる下っ端の非戦闘員である。そんな彼に背後から忍び寄る影。

「嫁さん養うためにも、頑張らなきゃなあ…ぐッ☒」

「申し訳ありませんが、少しだけ眠っててください」

男の頸動脈を締め上げて意識を奪い、倉庫から食料を漁る1人の青

年。誰あろう、草下 跳である。

「どうやら、ここには食料があまり置かれてないようですね」

そもそも弾薬と食料を同じ場所に置いたりはしないだろ、とツツコまれそうだが、単に管理者がズボラなだけだろう。

「ここ以外に倉庫は無さそうだったんですがね…仕方ない、別の建物に…」

ドガアンツツツ!!

「へッ、一丁上がりよ」

燃え盛る建物、さつきまで倉庫だったものの前にリモコンを握り全身に機械的な鎧を纏った男が立っている。その背後には複数の同じような見た目の人物。

「ネズミが1匹忍び込んだっ—ことで弾薬の1つに爆弾仕込んで偽の倉庫に運ばせたが、見事に引っかけたぜ」

男は手の中のリモコンを弄びながら笑う。目の前の建物の中には跳以外にも人…非戦闘員の男もいたというのに、彼はなんら気にも留めていない。後ろの人物達も皆同じように笑っている。彼らにとつて、非戦闘員とはいくらでも補充の聞く消耗品でしかないのだ。

「…あー、このままじゃ死体確認できねえな。オイ、早く火い消せ」

「分かりましたよ、隊長」

リモコンを持った男…侵攻部隊第53小隊隊長は、背後にいる自身の部下に指示を出す。

「隊長、あのネズミって例の裏切り者ですよ？確かアイツの首にはかなりの賞金が掛かってたような」

「ああ、ざつと1億だったな」

「うひょー！隊長、俺らにも分けてくださいよ〜」

「わーってるよ、ったく」

既に跳が死んでいるかのように話す男達。あとは建物の火が消えるだけ…そう考えていた彼らの目に奇妙なものが入る。

「なんだありや…壁が、4枚？」

放射状に広がった高さ2 m程の金属の壁。黒鉄色に輝くそれは、結晶のような形状をしていた。こんなものが一体どこから？そう考え

る男達の前で突然壁が液化、収縮し、その向こう側から黒鉄のバツタ人間：インゼクターに変身した跳が顔を出した。

跳 side s

「不意打ちで爆発とは、なかなか穏やかじゃないことをしてくれませぬね」

ヤレヤレ、変身があと少し遅かったらミンチになってましたよ。それにしても…

「補給要員まで巻き込むなんて、貴方達に人の心はあるんですか？」

「あ？知るかよんなこと。それにそいつみてえなのが死んでもな、代わりならいくらでもいるんだよ！」

「…感心するくらいに予想通りの答えを出してくれましたね。まあ、どんな返答であろうと容赦なくぶつ潰しますが」

「ぶつ潰すだと…やれるモンならやってみるよ！」

よし、挑発にはノってくれましたね。相手は見たところ6人くらい、声質からして全員男、手に武器はなし…何処かに隠し持っていると見たほうがいいですね。サクツと…とまではいかなくても手早く終わらせましょう。

「あ、あく危ねえ、ついお前のペースに乗せられるところだったわ。俺らを煽ってくれたお礼として、コイツをプレゼントしてやるよ」

目の前の男が手元のリモコンを操作します。すると、何かがこちらに向かってくる音。

「いったい何の音……ッッ」

音の正体を探し視線を彷徨わせていた僕の表情が驚愕で強張りました。僕の目に映ったのは、背後から猛スピードで迫る背丈ほどの金属球。確実にあれが音の正体と考えていいでしょう。

「うわあッッ」

咄嗟に側転し、鉄球を避けます。その見かけ上の質量からは想像もできないほどの速度でした。もし回避が間に合わなければ僕は今頃、轢かれてネギトロやミンチ肉のような状態か板ガムのような様で地べたに転がっていたでしょう。回避に成功したことに安堵しつつ油断なく鉄球の挙動を確認。やはりというか、鉄球は滑らかにカーブし

ながら再度僕に向かって突進してきました。

「明らかに普通の鉄球ではありませんね…」

何にせよ、アレを止めない限りずっと僕を追ってくるであろうことは確実。僕は構えをとり、迫りくる鉄球と相對します。右脚を軽く後ろに引き、脚のブースターに空気を吸入、装甲を集中させます。その間にも鉄球と僕との距離は縮まり続け、残り1mを切った瞬間、

「イヤアアア！」

ブースターを作動させ、勢いをつけて右の蹴りを鉄球に食らわせました。回転する鉄球が右脛と右足の甲の装甲を削り取る感覚が僕の脚にも伝わってきます。ですが、蹴りを入れた以上止める訳にはいきません。そうしようものならたちまち僕の右脚はひしゃげ潰れることになるでしょうから。

「ぐ、おオオオオオ！」

ブースターの出力を全開にし、蹴りの威力を上昇させます。それまで蹴りと拮抗していた鉄球の勢いが、少しずつ落ち始めました。

(このまま、押し切るッ……！)

『Over injection!』

僕はインジェクトリガーを右脚に当て、引き金を引きました。同時に、右脚にエネルギーが集中していきます。

『High Wind Strike!』

「オオオオラアアッ！」

ハイウインドストライクを発動し、鉄球を蹴り飛ばしました。鉄球は放物線を描いて男達の背後へ落下。僕は右脚に痺れを感じながらも僕は膝をつくことなく立ち続けます。

「ハアッ、ハアッ、ハアッ…」

ハイウインドストライクの反動で息が上がっています。鉄球の表面にはけして小さくは無い凹みが見えました。鉄球は静止したままピクリとも動きません。チラリと目を向けると、まだ余裕のありそうな表情の男達。

「…随分と、余裕そうですね」

「ああ、まだ俺達の手は全然終わっちゃいないからな。そら、モタモタ

してつと危ね〜ぞ〜」

その言葉と同時に、リーダーが高速で接近する3つの飛翔体を捉えます。まだ使える左足だけで飛び退いた直後、さっきまで僕がいたところに3本の何か突き刺さり爆炎を上げました。飛んできた方角を見ると、そこにはまるで剣山のように背中から棘…ミサイルを生やした機械人形の姿が。

「…ソルジャー…!」

「そう。歩く対地対空攻撃要塞、ヘッジホッグソルジャーくんだ。だがそつちばかりに気を取られていいのかな?」

その言葉に、僕は先程蹴り飛ばした鉄球…否、装甲を解除して人の形を成していくソルジャーを見ました。

「そつちもソルジャーでしたか」

「こつちは自分で転がれる殺戮鉄球、アルマジロソルジャーくんだ。これで2対1、いや、俺達を含めれば8対1かな?」

クソツ、多勢に無勢にも程があるでしょう!ソルジャー2体でもキツいつてのに、そこにパワードスーツが6人も加わるなんて…!こんな時に鍊は何をしているんですか!
くちよつと前からの鍊くんく

「もしもしクロノスⅡサン?跳から敵の前線基地を見つけたって連絡来たけど、こつちのリーダーには何にも反応なかったぞ。どういう事なのか説明してもらおうか?」

『あーそれね。実はそのリーダー、まだ試作段階でね。相手さんが一気に転移してくる時の大きな歪みは感知できるんだけど、細かく転移してくる時の歪みは小さすぎて感知できないのよ』

「はあ?それは先に知らせておくべきだったろ?何で教えてくれなかつたんだよ?」

『忘れてた☆』

「お前今度会ったら本気でぶつ飛ばすからな」

『うひ〜やめちくり〜。リーダーは後でアップデートしておくからお兄さん許して』

「できれば今アップデートして欲しi (デデデン!デデデン!デデデ

ン！デデデン！）おい、コレって…」

『転移、というよりはソルジャーの出現だね』

「えっと場所は…ここの正反対かよ」

『近くに跳くんの反応もあるね。どうやら2体と交戦中のようだ』

「2体☒尚更早く向かわねえと！」

『ライドドラグナーを使うべきだね。距離が離れすぎている』

「言われなくても分かっている！」

ブオン、ブオン！

（跳、持ち堪えてくれ！すぐに向かう！）

くく

多分、鍊はすぐには来られなさそうですね。こうなったら、1人で持ち堪えるしかない！

NO side

森を駆け抜ける跳、それを追うヘッジホッグとアルマジロ。跳は時に木々の間をすり抜けるように走り、時に木を蹴って跳び回りながら森の奥へ異形を誘い込む。インゼクター・ホッパーアーマーは平地での格闘戦だけでなく森林や高層ビル群（幻想郷には存在しないが）などの地形を利用した立体的な戦闘を得意としている。もし相手が並のソルジャー1体ならそう苦戦なく倒せただろうが、今回の相手はそう簡単にはいかなかった。

『！』

跳が木を蹴って大きく跳び上がった隙を見逃さず、ヘッジホッグが背部装甲から複数の小型ミサイルを射出した。ミサイルは乱立する木々の隙間を縫うように飛び回り、いくつかは木にぶつかったりして不発に終わりながらも多くのミサイルが跳に殺到する。

「嘘でしょ☒」

まさか木が生い茂る中をミサイルが通り抜けてくるとは思わなかった跳が叫んだ。さらに森の奥に向かってミサイルを撒こうとするが、枝から足を踏み外してしまう。

（動きが、鈍ってる☒まさか、今までの…）

落ちながら思考する跳にミサイルが迫る。避け切るのとは不可能と

判断した跳はすぐに装甲を自身の前面に集めて盾を形成、ミサイルを受け止めた。

「ぐう……ッ！」

いくら小型のものとはいえミサイルはミサイル、即席の盾を凹ませながら跳を弾き飛ばす。落下する跳の元へ、球体化したアルマジロが迫る。

「く、あアアアッ！」

装甲を戻し全身のブースターをフル稼働させて、アルマジロの回転に合わせて身を捻る跳。直撃は避けたものの勢いよくアルマジロの後方へと吹っ飛ばされてしまった。

「うあつ、ああつ……」

木に激突し、変身が解除される跳。立ち上がって再度戦おうとするも、体に力が入らず崩れ落ちてしまう。空腹を誤魔化して無理やり動かしてた体に、限界が来てしまったのだ。動けない跳へ2体のソルジャーが襲いかかる。危機に対し、彼の思考はとても冷静だった。

（向こうはどちらも攻撃態勢が整っている。対して、こちらは体を動かすことさえままならない……ここまで、かな……）

目を閉じ、命が刈り取られるのを待つ跳。しかし、いくら待っても痛みは来ず、代わりにバチバチという音が耳に届くだけ。

（何が起きているんだ……）

疑問に思った彼がうつすらと目を開くと、そこには電撃を受け硬直するソルジャーと角からの放電でソルジャーを攻撃する鹿のようなロボットがいた。

（あれは……一体……？）

唾然としていた跳だが、すぐにこの機を逃すまいともたれかかっていた木の裏まで這いずるように移動し、ポーチから奪った食料を取り出し食べる。幸い、殆どが消化に良い流動食だったため少し休めば体力は回復するだろう。

（休息中にあの鹿に攻撃されれば終わりですが、彼からは敵意を感じない。多分、大丈夫……）

腹を満たした跳は、睡魔の誘うがままに意識を手放した。

W
h
a
t
,
s

t
h
e

n
e
x
t

e
p
i
s
o
d
e
:
?
?

Ep. 12 「黒蝗の逆襲、鉄竜の追走」

跳side)

「ん…んう…っ」

どうも、草下 跳です。目が覚めたら何故か洞窟の中にいました。人が3、4人は余裕で入れそうな洞窟です。

(僕は確かさつきまでソルジャー2体と戦闘になって、一方的に叩きのめされて、鹿のロボットに助けられて…そうだ、あの鹿は何処にー)

ガシヤ…ガシヤ…

「~~×~~」

洞窟の外から聞こえる足音に身構える。まさかもうソルジャーに追いつかれたのか、それとも兵士か、そう考え警戒態勢に入っていた僕の目の前に現れたのは、

『クルルッ』

「…なんだ、あなた鹿でしたか…気張って損した…」

僕を助けてくれた鹿でした。しかも(ダジャレではありませんよ)、彼(?)の角にはいくつか果実がついた蔓が乗っています。僕が空腹だったことを察してくれているのでしょうか。

「気遣ってくれているのですか?それはありがたいのですが、食事なら既に…」

『クルルッ』

僕の返事を遮って、まるで「食べ」と言わんばかりに彼は角を押しつけてきました。人が3、4人入れるとはいえ狭い洞窟に鹿1頭と人1人、さらに鹿の方が頭を押しつけてくればその圧迫感は言葉にもできません。

「うわわっ。わ、分かりました!食べますから角を押しつけないで下さいー」

『クルッ』

僕の言葉に満足したのか、彼は角を押しつけるのをやめました。僕は果実を角の間から拾って、汚れがないことを確認してから頬張りま

す。

「…美味しい」

以前向こうの生産プラントで見た木苺の実とよく似た果実の甘酸っぱい味が口の中に広がるなか、僕は感嘆とともにそう呟きました。向こうでは果実を口にする機会などそうありませんでしたからね。

「…わざわざこれを探ってきてくれて、ありがとうございます」

『クルクルッ♪』

僕が頭を撫でると、彼は気持ちよさそうに喉を鳴らします。いや、いつまでも『彼』呼びでは少し可哀想ですね。名前を決めてあげましょう。

「ん〜、どんな名前がいいでしょうかね…」

『クルッ?』

そういえば、彼は電撃を使って攻撃しましたよね…電撃の鹿、雷の鹿…そうだ。

”ライカ”

『クウ?』

「君の名前ですよ。」雷を操る”鹿”だから”ライカ雷鹿”。安直な名前かも知れませんが」

『クルッ、クルウッ♪』

「ハハハッ、お気に召してくれましたか」

名前をつけて貰ったことが相当嬉しかったのか、ライカは僕に顔を擦り付けてきました。ちよつと冷たくて、くすぐりたいです。

「…狭い、やつぱり狭い。ライカ、外出ませんか?ちよつと狭いです」

『クッ?クルル』

僕の話聞いたライカはすぐに顔を離し、洞窟から出ていきました。続いて僕も荷物(ライカが運んできてくれたのでしよう)を持って洞窟を出ます。僕が洞窟から歩いてきたのを見たライカが、少し心配そうにこちらを見ていることに気付きました。

「ライカ?...ああ、大丈夫ですよ。少し休んだおかげで、体力満タンです」

『クルクツ♪』

安心したように短く鳴くライカをひと撫でし、僕はすぐに辺りを見渡しました。近くに敵が潜んでいる可能性を考えての行動でしたが、案の定木々の向こう側に活動を再開した2体のソルジャー、アルマジロとヘッジホッグを発見しました。周囲には様子を見にきたと思わしきパワードスーツ6体も確認できます。

「あれは、僕らを探してますね。どうします、ライカ？アイツら僕らに気付いてないようだし、このまま無視してここを離れますか？」

『グル…』

『嫌だ』、ですか？そういうと思いました。何せ君、あの錬の仲間なのでしょう？そんな君がソル^あジャー^{連中}共を放置するわけありませんよね。実際、アイツらを放つといたらいずれ幻想郷^コに迷惑をかけるだけでしょうし、この場でブツ潰しておいた方が色々得です」

そして一呼吸おいて、僕はライカと視線を合わせます。

「力を貸してください、ライカ」

『クルツ！』

「ありがとうございます、ライカ」

ライカが返事と共に戦闘態勢に入るのに合わせ、懐からインジェクトリガーとグラスホッパーボトルを取り出します。

『Grasshopper!』

「融合」

『Injectioooooon!』

頭上から降ってきたメタリカ（今まで何処にいたんでしよう？）を纏い、インゼクターに変身、ライカの背に飛び乗ります。

「ライカ、いきまますよッー！」

『クルルツ！』

僕の言葉と共にライカが地を蹴り、ソルジャーへと一直線に走り出しました。

錬side

どうも、跳の連絡で緊急発進したものの見事に方向間違えて大幅口スやらかした輝晶 錬です。現在、俺は異世界^{クソ}侵入^タ部隊^共の拠点に向

かっていたわけだが、

「チツ：足止めなんざいらねーんだよ」

目の前に広がるのは下級ソルジャーの群れ。10体20体なら何の問題もなく通り抜けられるのだが、今見えているのはその軽く10倍はある。しかも、全員敵意マックスだ。

「ハアア〜：殺るか」

『0・0・2』

『Code heat stand by, ready?』

「イクスパンデッド・アームド・オン」

『Dragon warrior expanded』

「時間が惜しいんだ、手間をかけさせるなよ?」

変身を完了し、ヒートブレードを構えた直後、下級ソルジャーの群れが俺に向かって殺到した。全員が警棒のような武器か短剣を持っている。

「フツ、ハツ、セイヤアツ!」

迫り来る無数の下級ソルジャーを、俺は斬って斬って斬りまくった。ヒートブレードに斬られたソルジャーがことごとく真つ二つになって地面に転がっていく。が、進撃が止まることはない。さらにソルジャーを斬り続けていくと、近接戦闘員の増援がなくなった。それでも攻撃は終わらない。今度は小銃を持ったソルジャーによる乱射祭りだ。まあ、装甲のお陰で俺のダメージはあまり高くないんだけどな。

「鬱陶しいなあ…まとめて焼き払ってやる」

『Full charge!!?』

Dフォンを操作し、必殺技の態勢に入る。

『Critical attack! Red Hot Burst

!』

「燃え尽きろ!」

両腕の火炎放射器から広範囲に広がる炎を放出。炎はたちまち小銃持ちを飲み込み、焼き焦がしていく。

「汚ねえキャンプファイアーだ：☒」

ソルジャーが燃えている中から、下級ソルジャーの胴体に装甲を加えたソルジャーが俺に向かつて突撃してきた。ソルジャー：エルダーソルジャーと仮に名付けよう…はその下級がそのままベースになっっているとは思えない力で俺に殴りかかってきた。

「又オワツッ~~ク~~こんの野郎…！」

エルダーソルジャーの拳を避け、ヒートブレードで斬りかかる。しかし、ボクサーを思わせる素早いステップで避けられてしまう。

「チツ…」

エルダーソルジャーの繰り出すヒット&アウェイの戦法に苦戦を強いられる。これが人間だったら、間合いから出る前に斬り伏せられる。しかし、今の相手は機械。反応速度も身体能力も人間よりも上だ。故にコイツを倒すには、コイツが退くより早く一撃、それも必殺の一撃を入れる必要が…いや、待てよ。

(あるじゃないか、この状況にピッタリ当てはまるモノが)

この方法だと確実に相手を捕縛できるが、少し発動までに時間がかかる。できる限り俺の周り、その上同じ場所から離れさせないようにしなければならぬが、その辺りは立ち回りでなんとかしよう。

「さあ、来い！」

俺が構えるのを見て警戒するエルダーソルジャーだが、攻撃してこないと判断したのか突撃、ラツシユで攻め立ててきた。

「オオオオオオ！」

そのラツシユを時に腕で受け、時にかわしながらエルダーソルジャーが離れないように慎重に立ち回る。今気づいたのだが、どうやらコイツは反撃しなければ攻撃を続けるようにプログラムされているようだ。ならば、決定的な隙を晒すまでは受けに徹しよう。

「どうした？そんな風にチマチマと小技を出すしかできないのか？それじゃあそこら辺に転がってる雑兵^{スクラップ}と変わんねーぞ？」

「！」

俺の挑発に反応したのか、さらに苛烈なラツシユを繰り出してきた。俺のガードをも弾くほどの威力だが、こんなものを出し続けてたらいずれエネルギーが枯渇する。事実、ソルジャーの動きが鈍りだし

た。

「そろそろ終わらせようか」

ソルジャーの繰り出した右ストレートを受け流し、その勢いのまま右腕だけで逆立ちし左の蹴りでソルジャーを地面に叩きつける。

「さらに、ドーンッ！」

続けて倒れたソルジャーの体を透明な塊が覆い尽くし、空中に固定する。ソルジャーを空中に留めている塊の正体は二酸化ケイ素、石英や水晶を構成する物質だ。俺の持つ能力は、ドラゴ・ウォリアーの鎧の能力、つまり相棒^{フォトン}やランダの能力を最大限に発揮できる（変身の過程に関しては能力とは無関係だ）『機竜を纏う程度の能力』に加えてもう一つ、俺の手に触れた物質から二酸化ケイ素だけを取り出して水晶や石英の形にして操る『水晶を錬成する程度の能力』の2つだ。まあ、前者ばかりに集中しすぎて後者の方をすっかり忘れてたけどね（ちなみに僕も忘れてましたby作者）。

「これで避けられる心配は無いな。おっと、『卑怯だ』とか『自由を奪った状態で殴るなんて…』とかいうなよ。俺はお前らをブツ潰すためなら手段は選ばないからな」

もつとも、コイツに発声機能はないようだが。

『Full charge!!?』

腰にDフォンを装填し、ソルジャーを捕らえる時点から背中に移っていたヒートブレードを腰に戻し柄に手をかける。

『Critical attack! Shakka Ittou!』

柄のトリガーを引きながら鞘からブレードを抜く。あまりの熱量に赤熱を通り越して白熱すらしているブレードを振るい首を斬り、続け様に両肩、両脚の付け根を斬り落とし、最後に胴体に逆袈裟斬り。

「…六閃」

鞘にヒートブレードを戻し、トリガーから指を離す。それに遅れて背後のソルジャーの体が7つに分かれ爆散した。

「これで邪魔は無くなったな。来い、ライドドラグナー」

すぐ近くに止めてあったドラグナーを呼び、それに跨がる。

「跳、すぐに向かう！」

ドラグナーのアクセルを一気に入れ、俺は森の中へと飛び込んだ。
NO side)

跳が目を覚ますおおよそ30分前、森の中に立ち尽くすソルジャー達の元にパワードスーツの男達が様子見に来ていた。先ほどまでターゲットを追い詰めていた両機が突如所属不明の反応によって機能停止させられたためである。

「おい、ソルジャーの様子はどうか？」

「緊急停止スイッチが入ってるな。それ以外にも、いくつか回路が焼けてるところがある。もしかしたら記憶装置にも影響が出てるかもな」

「回路が焼けてる？ハッ、雷でも落ちたとか言いたいのか？上を見ろよ、真っ青だぜ？」

「ああ、分かってるよ。でもそう考えなきゃあり得ねえんだよ。この森の中に、コイツらの装甲を突破してどデカイ電流をブチ込めるような設備があるとでも？」

問答を繰り返しながら、男達はソルジャーを修理していく。男達に電子工学の知識はあまりないが、スーツに内蔵された小型マニピュレーターが自動でソルジャーの損傷箇所を修復しているのだ。

「おし、だいたい修復は終わったな。記憶装置は基盤は無事だったが、データはとんでるかもしれない」

「マジかよ。じゃあ、再起動スイッチを入れて……」

胸のカバーを開き、その中の強化ガラスのカバーで覆われたレバーを右に回す。直後、ソルジャー達の体が小刻みに振動し停止、数秒後に両機の目に光が灯った。

『…再起動を確認。命令データの確認、開始……データの甚大な破損を発見。復元は不可能と判断。データの削除を開始……完了』

「うわ、ホントに全部ぶっトんでんのかよ。ハア、また1から入れ直しか」

そう言うと、男は胸にあるデータ読み取り装置に手をかざし、命令をソルジャー達に伝えていく。

『命令データ、確認。内容、第1観測世界侵略の為の拠点防衛及び侵

略の妨害となる敵対存在の排除』』

「あーメンド。どこの誰だか知らないけど、仕事増やさないでくれよ」
ドカカツ、ドカカツ…

「ホントだよなあ。ああ、早く酒がのみてえなああ」

「だったら、コイツらをとつとと拠点に持つてくぞ。そろそろ施設は揃ってきてるだろうし、あとはコイツらさえ置いとときや仕事は終わりだ」

ドカカツ、ドカカツ…

「うし、じゃすぐにでも……………?」

「おい、どうした?」

「いや、なんかさつきから音が聞こえるんだが…」

「はあ?音?」

ドカカツ、ドカカツ…

「ホントだ、なんか聴こえるな。馬の蹄か?」

ソルジャーを連れて拠点に向かおうとした男達の耳に、謎の音が伝わる。音の正体を探す中、何人かがある事実気がついた。

「この音…だんだん大きくなってねえか?」

「というより、何か近づいてきてるような…」

ドカカツ、ドカカツ!

『クルアアアン!』

「グホツ☒」

突然横から飛び出してきた銀灰色の何か…機^{ライ}械^イの鹿^カが男の1人を跳ね飛ばした。幸いなことに、全身を覆うスーツのお陰で大したダメージを負ってはいない。が、いきなり現れた謎の存在とその背中の上に乗っている黒い影にとってはあまり良い結果ではなかったようだ。

「1人は潰しておきたかったのに…無駄に硬い奴ですね。どうも先程ぶり」

「テメエ、インゼクター…!くたばってなかったのかよ!」

「お生憎様、彼のお陰ですよ」

そう言いつつインゼクター、跳はライカを撫でる。

「!…なるほど、ソイツに助けられたってことか」

「大正解。さて、そのソルジャー達には先程のお礼をさせてもらいましようか」

「おっと、今度は俺たちも参加させてもらうぜ。さっきは丸々こいつらに任せちまったが、今度は真正正銘1対8…いや、その鹿も含めりや2対8かな?」

各々が武器を取る、もしくは武装を展開して跳とライカを取り囲もうとする。実際はこのままでも彼らにとっては無問題のだが、ここに更なる援軍が現れる。

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

「轢き逃げアタック!」

『⊠』

真横の木々の間から、銀のバイクがソル^ラジヤ^イーの1^ダ体^ブを轢^レき^イ飛^クばしながら飛び出してきた。

「今度はお邪魔虫の方かよ!」

「跳!大丈夫か⊠」

「ええ。1回やられましたけど、この通りピンピンしています」

男達をスルーしつつ、跳に安否を問う闖入者…鍊。そして問題なしと答える跳。

「おい、いつまで無視し続けるつもりだ?」

「ん…どうやら、まずこつちを先に片付ける必要があるみたいだな」

「そうですよ。無駄口は終わり、ここからは殴り合いの時間です」

What's the next episode…?

Ep. 13 「駆けるは雷蝗、荒るるは裂牙」

NO side

「それじゃ、始めようか？」

「ああ錬、その前に少しいいですか？」

戦闘開始と武器を構えようとする錬を、跳は手で制止する。何事かと首を傾げる錬を尻目に彼はライカに問いかける。

「ライカ、ちよつとくすぐつたいですよ？」

ガシャン！

『クルル』

『Connection Electric』

「おつと、やっぱりはまった。少し気になってたんですね、ライカの首裏の窪み」

ライカの首に空いた5cm×3cmほどの窪みに、跳はインジェクトリガーを嵌め込んだ。想定外の行動だったのか、ライカは上半身を大きく持ち上げる。

「すみませんライカ、いきなりこんなことをして」

『クルル』

「次からはちゃんと了承は取りますから、許してください」

『クル？』

「ホントですよ。ホントですつてば。本当なんです、信じてください！」

「おい、フザケてんのかテメーら。俺たちはこんな茶番見せられるために来たんじゃないんだよ!!」

跳の謝罪から始まった1人と1匹の漫才に苛立ちがマックスになった隊長格の男が、錬達の足元に射撃する。

「おい、なんで俺まで撃つんだよ。まあ、こつちが先に喧嘩ふっかけといて、何もしないのも無礼ってモンだよな」

「ええ、漫才してたの僕が言うのもなんですが同感です…気を取り直して、いきますよライカ！」

『クルルッ！』

『Boost Injection!』

ボソリと呟いた跳は、ライカの首に刺さっているインジェクトリガーに手をかけ、引き金を引く。するとアーマーの表面に稲妻が走り、各部に黄色のラインが走った蒼白の鎧へと変化した。

「インゼクター・ボルテックホッパー、アクティブ」

ボルテックホッパー。本来ならば存在し得ないはずの形態であるが、おそらく外側からの観察者の仕業だろう。跳は知る由もないが。

「え、マジ?そんなことできたの?あ、さては…」

「何してるんですか。そっちもさっさと準備してください」

『ル〜』

「わ、わかった!じゃあ今回は…コイツにしよう」

『0・0・5』

『Code edge stand by, ready?』

「イクスパンデット・アームド・オン」

錬の真上に浮いていた刺々しい機械が粒子状に分解され、錬のスーツの上で装甲に再構築される。その姿は、全身に刃を生やした人型の肉食小型恐竜のようなものだった。

『Dragon warrior expanded』

「ウ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”」

「ちよつ…どうしたんですかいきなり」

「ああ悪りい、ちよつと叫びたくなってな」

「あ、そうですか…なんか声おかしくなってませんか?」

「気のせいだ。とつとと行くぞコ”ラ”ア”」

「いや絶対気のせいじゃないですよねぬあく、もういいや!」

普段よりも好戦的になり、声もおかしくなった錬のテンションに困惑しながらも、戦闘態勢に入る跳。

「チツ、どこまでもフザケやがって。アルマジロ、ヘッジホッグ、仕事だ!」

『敵勢対象確認。戦闘形態へ移行、戦闘行動を開始』

各自の武装を展開し、こちらも戦闘態勢を整えるソルジャー2体と兵士達。全員が睨み合う中、近くに生えていた木の枝から1羽の鳥が

飛び立ち、それを合図に両陣が激突する。

「ウ”オ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”」

誰よりも勢いよく飛び出しヘッジホッグに向かっていく錬の前に、兵士6人が立ち塞がる。

「先に俺たちの相手をしてもらおうか？ヘッジホッグ！まずはアルマジロとともにインゼクターを潰せ！」

『命令を確認』

ヘッジホッグが背中のミサイル発射の準備を整え始め、それを阻止せんと突つ切ろうとする錬を兵士達が6人がかりで抑え込む。

「邪魔ア：：すんなアアアアアア！」

「グアアアツ！」

錬の反撃に吹き飛ばされるも、兵士達はすぐに復帰し妨害に戻る。さらには、いつのまにか呼んでいた下級ソルジャーも加わり、錬の動きが鈍りだした。

「又アアアアアア！」

—————

同刻、跳もまたアルマジロに苦戦していた。

「コイツ、前よりも速い！」

アルマジロの回転速度が、最初に戦ったときよりも速くなっていったのだ。出し惜しみしていたのか、前回の戦闘でリミッターが外れたのか、攻撃のスピードが増している。跳達は直撃を避けるだけで精一杯になっていた。

「うわっ☒」

アルマジロが自分に直撃しそうになり、咄嗟に回避した跳。しかし、その回避先にアルマジロが先回り、突撃してきた。

「しまっ…☒」

避けきれない、そう瞬時に悟った跳の前に四足の影が立ち塞がる。

『グ…ル…』

「ツ…ライカ☒」

ライカは、回転速度を上げ押し退けようとするアルマジロをその大きな角で受け止め、四つ足で耐え続ける。

「ライカ、何やってるんですか☒早く逃げて！」

『グ：グウウ…！』

まるで「嫌だ」と言うかのように首を小さく横に振るライカ。

(このままでは、ライカがやられる…もし僕がここから離れてもアルマジロは僕をずっと追いかけてくる。そしてその度にライカに負担がかかる…どうすれば良い？どうすればアイツの回転を止められる?)

自問の時間は僅か、それでもライカのダメージは増していく。そのとき、跳の頭に閃きが走った。

(そうだ、これなら！)

天啓にも等しき閃きを受けた跳の行動は素早かった。跳の全身を覆っていたアーマーが流体のように変化し、ライカの角と脚に取り付く。角に取り付いたものはまるでブルドーザーのブレードのような形状に変化し、脚に取り付いたものは地面の奥深くに突き刺さる杭となった。

「ライカ！合わせてください！」

『クルルツ!!?』

たった一言の短い指令。それでも、ライカはその意味を汲み取った。

「ありがとう…跳ね上げろッ！」

その声に従い、ライカの角に取り付いている金属が変形、ピストンを最大まで突き出すことでブレードを持ち上げた。さらに、合わせるようにライカが首を大きく振り上げたことが合わせり、

☒

アルマジロは空中に投げ出された。

「今だー！」

跳はすぐさま流体金属をアーマーに戻し、空中のアルマジロに電撃を帯びた鋭いキックを2発、タイミングを少しずらしてさらに2発放った。

「これで、どうだッ！」

トドメに、一度着地してからの跳躍による勢いを乗せたオーバー

ヘッドキックをアルマジロに浴びせた。蹴り飛ばされたアルマジロの行き先にあるのは、アルマジロ自身よりも大きな岩。

『障害物サーチ：前方、全高およそ4mの岩を発見。衝突時の損傷計算：損傷は甚大であると予測、進路の変更を：不能。噴出口に異常発生』

ぶつかるまいと進路を変更しようとしたアルマジロは、そこで背部の噴出口が破壊されていることに気付く。

「残念でした。とつくにそこは壊しましたよ」

軌道変更を封じられたアルマジロは、勢いよく岩に激突、その球面の一部は大きく凹んでいた。

『装甲に損傷、うち背部の被害甚大。球形態での戦闘続行は不可能と判断、形態を変更する』

地面に転がるアルマジロの体が割れ、畳まれていた手足が広げられる。球体から人型に戻ったアルマジロは腕の短機関銃を展開し、跳に敵意を向けた。

—————

さらに、無数のソルジャーに群がられ身動きが取れなくなっている錬にも逆転の好機が訪れる。

ブワアアツ！

ドゴンツ！ バゴオツ！

『[X]』

「ヌウツ…？一体何が…っ、あれは…」

急に拘束が軽くなったことに錬は驚き、辺りを見回す。すると、くぱあ…と中空に突如開いた不気味な紫色の空間から魚の鱗のように見える藍色の光弾…弾幕が放たれ、自身にまわりつくソルジャーを吹き飛ばしていくのが見えた。

「おい、大丈夫か？」

「藍か！助かつ…たア！」

錬は紫の空間、スキマから身を乗り出し声をかけてきた金の髪と九つの狐の尾を持つ女性、八雲 藍に礼を言いつつ、全身の刃を伸ばしソルジャーを串刺しにしながらヘッジホッグへの突撃を再開する。

「雑魚は頼んだ！」

「任せておけ、あとこれが終わったら一杯奢れよ？最近休みがなくて疲れているんだ…」

「わかった。さアて、どオこ見てんだア？お前の相手は俺だつつたろオがア！」

叫びながら飛び上がり、鍊は体を丸めて回転する。すると、鍊の背骨部分の刃と腕・脚にの刃が変化、サメの歯とナイフを合わせたような形状となり回転の勢いに合わせてヘッジホッグの背中を抉る。

『×』

発射態勢に入っており背後への対応が遅れてしまったヘッジホッグは、背後に迫る刃に抵抗できず、ミサイルもろとも装甲を破壊された。さらに、破壊を免れたミサイルに破壊された際の爆風で加速した別のミサイルの破片が刺さり、さらなる爆発を引き起こす。

『…背部装甲の被害甚大。本体へのダメージを計算…大破、活動不能は確定。背部装甲の切り離しを実行』

本体が受けるダメージを抑えるために装甲を切り離し、離脱を試みるヘッジホッグ。しかし僅かに遅く、背面の内部装甲を損傷する。

「これで飛び道具は消えたなあ？そんじゃあこっからはア、殴り合いだアアア！」

叫ぶやいなや鍊は全身のバネをフル活用してヘッジホッグへと跳躍し、殴る、蹴る、腕の刃で切り裂く、マスクの顎に生成された牙で噛み付くといった野性味溢れる攻撃を矢継ぎ早に繰り出し続ける。そのあまりの攻撃頻度にヘッジホッグも手が出せなくなっていた。

『右肩部ケーブルに重大な損傷。敵性個体の攻撃への反撃…不可能。反応が…間に合わない…』

ヘッジホッグの各部からは千切れたケーブルが飛び出し、片腕は半ばから切り落とされている。誰が見ても戦闘不能どころか放っておいてもそのまま壊れそうな様相をしているというのに、鍊はDフォンを操作して大技を繰り出そうとしていた。

『Full charge!!?』

「これでエ、トドメエ！」

『Critical attack! Hunting Fang!』

電子音声と共に両肩の刃が巨大化、それを両手で掴んでボロボロのヘッジホッグに投げつけた。投げられた刃は一度ヘッジホッグの横を通り抜け背後へと飛んでいき、それを確認した鍊は一直線に走り出す。

「飛んで、跳ねて、ぶった斬る!」

掛け声と共に側転、宙返りを披露しながら右足首に刃を生成、直後の宙返りから踵落としの要領でヘッジホッグを脳天から真つ二つにした。

「ついでだ、貫つとけ!」

その言葉の数刻後、鍊のバク転と同時に先程背後に飛んでいった刃がブーメランの用にカーブしながら飛来、×字にヘッジホッグを切り裂いた。

『ギ…ジ…: 損傷…: 非常に…: 甚大…: 戦闘、不能…』

そう呟き、ヘッジホッグは爆散した。

—————

鍊に続き、跳もアルマジロとの戦闘を終了しようとしていた。

「フツッ! ハアッ! オラオラオラオラオラア!」

電気を纏った脚から繰り出される亜音速の蹴撃は、グラスホッパーのままでは貫けなかった装甲を容易く破壊していく。腕の短機関銃も片方は原型を留めていないほどに潰され、残ったもう片方でアルマジロは跳を撃ち抜こうとする。が、それを読んでいたのか既に真横に跳躍していた跳の脚で役目を果たす前に潰された。

「終わりです」

『Over injection!』

インジェクトリガーを脚にあて引き金を引き、両脚に稲妻と風を纏わせる跳。そこから一気にアルマジロまで距離を詰め渾身の蹴り上げを食らわせ吹き飛ばす。

『Volt Storm Strike!』

「フンッ!」

宙を舞うアルマジロの着地点に瞬時に移動した跳は、落ちてくるの

に合わせてアルマジロに回し蹴りをかまし、地面に叩き落とす。

『ガガ…ギ…』

ヘッジホッグとは違い、アルマジロは特に何も言い残すことなく爆散した。

錬side

あ、俺に視点回ってきた。どうも、さっきから声がおかしくなってる輝晶 錬です。ここでは声変わらないのかって？流石に心の声ぐらいは普通のままでもいいだろ。

「これで残りはお前らだけだなア、えエ？」

「グソツ、まさか上級が2体もやられるとは…だが、こっちはまだ6人も戦力が残ってるんだぜ？そこの嬢ちゃんは下級にかかりきりみたいだしなあ、2人で俺たちを相手するのはきついんじゃないのかい？」

確かに奴の言う通りだ。おそらく俺たちよりも圧倒的に強いはずの藍がいてくれればかなり戦闘は楽になるだろうが、現在彼女は俺たちの方に来る雑魚の相手をし続けてくれている。てか、弾幕ってそんなに威力あったのか、下級の体ブチ抜いてんぞアレ。確かアイツら9mm弾くらいなら余裕で受け止められるほど頑丈だったはずだぞ（俺らポンポンぶっ壊してるけど）。しかも渦を巻くように弾幕ばら撒いてるから、数の多いソルジャーどもの被弾率が上がってる。陣形が仇になってるな…

「…死ぬ。酒の為に、私の休みの為に…！」

あ、これ確実に藍の鬱憤晴らし混ざってるな。

「…それはどうでしょうね」

なんか跳が自信あり気に返事した。何だ、この状況をひっくり返せる策とかがあるのか？

「錬、その装備を解いてください」

「は？お前何言ってるの？」

「お願いします」

「…わかった」

Dフオンを操作し、装甲を解除してアンダースーツだけになる。解

除・分解された装甲は俺のすぐ側でヴェロキラプトルのようなロボットに再構築される。

『ギャオ!』

それを確認した跳は、腰のホルダーから若草色のカプセルを取り出しグリップに装填する。

『Mantis!』

「二重融合」

『Dual Injection!』

跳は引き金を引き、カマキリのような見たことのない姿に変身した。

「では、失礼します」

ガチャン!

『Connection Edge』

『ギャ?』

「拡張融合」

『Boost Injection!』

跳の連れていた鹿：ライカだったか?というか、多分アイツ俺の装備だ：と同じように首の後ろの窪みにグリップを突き立て、引き金を引いた。すると変身に伴い若草色に変わっていた鎧の色が白磁に変わり、全身に灰色のラインが現れた。

「ウ：：ア”ア”ア”ア”：：：インゼクター：リツパーマンティス、アクティブ」

「怖っ!跳おまつ：声怖えよ!」

「今の：ダジャレですか?」

「違うわ!たまたまダジャレっぽくなっただけだわ!」

「そんなことより、変身しないでいいんですか?」

「そんなことよりってなんだ、そんなことよりって!：：ああわかったわかった、すぐやるから指トントンすんな!」

跳に急かされ、俺は急いでコードを入力する。

『0・0・3』

「ええつと：ライカ?力貸してもらおうぞ」

『クル』

「それは了承と受け取っていいんだな？分かりにくいなコイツ…いっこぞ。イクスパンデット・アームド・オン！」

Dフオンをソケットに差し込むと、ライカがパーツ毎に分解され俺のスーツと合体、変形していく。やがて俺の全身は鹿を模した鎧兜で覆われた。

『Dragon warrior expanded』

「…よし、準備できたぞ」

「わかりました。では、今回はできる限り殺さずにいきましょう。向こうの情報を手に入れたいので」

「了解」

跳に戻事をしながら、左の籠手から電磁ロッドを展開する。右肩のレールガンにも電気を供給し、いつでも使えるように準備をしておく。

「…ゴー！」

号令とともに走り、手近な場所にいた兵士にロッドによる突きを叩き込む…が、相手もそれを読んでいたようでロッドを掴んで左に回避する。避けて見せたのはお見事だが、残念、そいつは判断ミスだ。

「お生憎様、避けたご褒美として電気ビリビリの刑だ」

ガギンツッ！

バチチチチチツツツツッ！

「ガグツ、ギツ、ギャアアアアアアア」

ロッドから放たれた致死量ギリギリの高圧電流が装甲を貫く。が、装甲の耐電能力が高いのか気絶する程度には弱まっているようだ。た。

「ア…ア…ア…」

「おっと、これ以上は死んじゃうな」

2分くらい流したところでロッドの電流を停止し、ロッドを掴み立ったまま気絶している兵士をヤクザキックで蹴倒す。

「よし、つーぎーは…お前だ！」

またも手近な兵士の方へ振り向きながら、右の籠手を展開、四角く

角ばった一対の爪のついたナツクルを装備する。

「本当ならお前もビリビリの刑に処してやりたいところだが、コイツは加減が効かなくてな。だからただブツ飛ばすだけで済ませてやる、ありがたく思いな！」

叫びながら、体の捻りも乗せた大振りの右フックを外すことのないように左手で相手の首根っこを掴みながら側頭部に叩き込んだ。首の拘束を解こうともがきながら反撃しようとしているのが見えたが、もう遅い。

「ガッ……グ……？」

「はい、おやすみなさい」

糸が切れたように地面に倒れ伏す兵士を尻目に最後の1人に目を向ける。

「さて、これで俺の担当は残り1人……グワツッ☒」

突如背中に入った衝撃に倒れ込みそうになるのを、気合で耐える。背中越しに見えた衝撃の元は、俺の腕をロックする先程とは別個体のエルダーソルジャーだった。

「……俺たちは今までのバカ共とは違う、技術が劣るからって侮ったりはしない。これでアンタの動きは封じたようなモンだよな！」

そう言っつて、奴はバックパックからショートブレードを取り出し俺に何度も斬りつける。

「グッ、ガフッ、グオツ……侮らない、ねえ。そこで転がってる奴らは、グッ、何もできずにリタイアしているが？これは油断した、ガッ、結果じゃないのか？」

「油断などしていたら何の抵抗もしていない。お前が一枚上手だっただけのこと、だ！」

「グウツ、そりやどうも」

「これで終わりにしてやる。俺たちの大義の為に死ぬ、危険分子！」

ショートブレードを仕舞い、新たにロングソードを取り出した兵士はそれを俺に振り下ろそうとする。

「大義とはご大層なことだ。でも、まだ俺も死ぬわけにはいかないんだよ！」

俺は右脚の装甲をカタパルトに変形させ、そのレールに搭載されたコイルに高圧電流を流す。さらに足の装甲に内蔵されたコイルにもレールとは異なる極となるように電流を流す。さて問題、レールのコイルに＋、－の順で電流を流します。足のコイルには通過するコイルと逆の電流が流れています。この後何が起こるでしょう？

「今だ！」

俺の脚は磁力の反発と引き合いによつて加速され、レールから抜ける頃には大凡人間が出せる速度を超えた蹴りになっていた。そして振り下ろされたロングソードに激突し、それを弾き飛ばす。普通片足だけでこんな蹴りを繰り出したら思いつきり後ろに倒れ込むはずだが、今は俺の両脇をエルダーがガツチリ固めてるから体勢を維持できるんだよな。

「ぐっ…」

「相手が動けないからつて勝利を確信したらダメだぜ？こういう風に手痛いカウンターを喰らうことがあるんだからさ。あといつまでくつついてんだお前ら」

Dフォンを操作し、籠手を八角形のボードのような形にする。

「鬱陶しいから…離れろー！」

ボードが勢いよく俺の腕から離れ、エルダーを巻き込みながら頭上に飛んでいく。見てみると、ボードから俺の腕に向かってスパークのようなものが伸びている。俺もよく分からないが、多分磁力なり何なりが働いているんだろう。

「これで終いだ」

『Full charge!』

右肩のレールガンが砲身を展開させながら手元に移動する。俺がグリップと安定して撃つための取っ手を掴むと、眼前のモニターが照準モードへと変わった。

「ターゲット補足」

モニター上に大きな緑の円が現れ、上空でボロ雑巾にされているエルダー2体の中間を捉えた。

『Lock on』

「シユート！」

『Critical attack! E・M・Rail Cannon
!』

レールガンからスパークを纏った杭状の金属弾頭が音を遙か彼方へと置き去りにして飛び出し、エルダー達の体を掠める。直撃とまでは行かなかったが、なにぶん速度が速度だ。ついさつき測ってみたところおよそ秒速6880m、音速のおよそ20倍、掠っただけでも致命傷なのは確実。実際とつくにボロ雑巾だったエルダーが今の一撃で完全に屑鉄の欠片と化したのがはつきり確認できた。そして、砲身から真つ赤になったレールが排出される。武装の特性上、レールの交換は必須だ。背中の発電機関からも、冷却のために絶えず蒸気が吹き出している。

「く、クソツッ…」

(ここは…悔しいが、撤退するべき…)

「逃がすわけないじゃん」

逃げようとしていた最後の1人の後頭部に籠手のボードを2つとも位置エネルギーを存分に乗せながら叩きつける。とても鈍い音とともに兵士は倒れ込んだ…死んでないよな？

「よいしよっ…呼吸音がするし、死んではないな」

倒れている兵士の頭を掴んでヘルメット越しに呼吸を確認、微弱だが息の音が聞こえたのでどうやら生きてはいるようだ。

ザバアアアーン!!?

森の向こうから大きな衝撃音が響いた。十中八九跳だろう。アイツ、自分から殺すなどか言っておきながらどうあがいても必殺の一撃なモン繰り出してんじやないよ。

「よーし。向こうも終わつたみたいだし、こっちも尋問を始め…ん？」

「グ、ゴブ…グゴバボ…」

突然俺の手の中で変な声を出しながら兵士が暴れます。

「あ？オイ、暴れんな…」

暴れる兵士を抑えようと胴体を地面に押し付けると、スーツの隙間から赤黒い粘液のようなものが吹き出した。その光景と粘液から漂

う悪臭から、俺はそれがなんなのかをすぐに理解した。

「おいまさか…クソツ、完全に溶けちゃった。情報は意地でも喋らせませんってか？」

そう、吹き出した粘液はスーツの中にいたであろう人間の体。なんらかの方法で中の人間を生きたまま溶かしたのだ。他に倒れている奴らを見ると、残らずスーツの隙間という隙間から粘液状になった体組織を地面に垂れ流していた。

「あゝあ、どう説明するよコイツら？」

「……………」

跳side

「…ゴ―」

号令と共に錬が敵陣の半分につっ込んでいくのを確認し、僕も武装を展開する。

「展開、スケルトンサイズ」

背中に増設された2対の折り畳み式切削マニピュレーター『スケルトンサイズ』を展開、胸部のマニピュレーターも切断モードに切り替えてから展開する。これで準備完了ですね。

「さあ、ゲームの始まりです。頑張つて死なないようにしてくださいね♪」

「ふざけんじやねえ！」

1人が僕に弾をばら撒いてきましたが、それをスケルトンサイズとマニピュレーターを遮蔽にすることで防御。そのまま続けてスケルトンサイズで攻撃します。

「バラします」

「何を…」

何かを言い終わる前に、スケルトンサイズが兵士の四肢を四方へと飛ばした。

「え…あ、ぎやうぎあぐあぎあアア☒」

「まず1人目」

「お前…さつき殺すなって…」

「ええ、殺してはいませんよ？尋問するのに、手足なんていりませんか

ら」

「くっ…このサイコ野郎が…」

「サイコって言い方はやめてください。僕はただ、貴方達を潰すのに精一杯なだけですか…らっっ！」

両腕を切り飛ばしたスケルトンサイスを別の兵士に向け、斬りつける。しかし、相手はそれをギリギリで回避、木の陰に隠れながら手持ちの突撃銃で僕に反撃してきました。

「この距離ならその鎌も届かないなあ」

「…確かに、スケルトンサイスは届きそうにありませんね」

その言葉を聞いて勝ったとでも言わんばかりの笑みを浮かべる兵士。でもね…

「ですが、僕の武器はこれだけではありません」

両腕にプログレスシックルを装着しながら背後の地面に関節を折り畳んだ状態で刺し、木の近くのスケルトンサイスも地面に刺す。そして前のものを畳み、背中ものを伸ばすことで一気に木の前に突進、本来の長さよりも伸びているプログレスシックルの刃で木ごと兵士の両腕を切り裂いた。

「ぐあがッッ」

「残念でした。こういう使い方もあるんですよ」

無力化した兵士を置いて、最後の1人となった隊長格の男に向かって走る。あとはアイツを無力化するだけ、そう考えていた僕の前で、残った1人は地面に4つの機械の正八面体…小型のポータルを撒いて展開し、下級ソルジャーに似た見たことのないソルジャーを召喚しました。

「コイツらは…」

「新型のパワードだ。やれ！」

男の号令を受け、4体のパワード（後で知った話ですが、鍊もこれ等に遭遇しており、エルダーと読んでいました）が僕に攻撃してきました。

（これは…下級よりも出力が上がってますね。その上、量産もできると。厄介ですね…）

パスワードの攻撃を捌きながら思案する。1体1体に構っているのはキリがない。ならば、まとめて斬ってしまった方がいい。

「貴方達に時間を掛けたくはありませんので…これで決まりです!」

『Over Injection!』

胸にトリガーを刺してグリップを引き、スケルトンサイズとマニピュレーター、プログレスシックルにエネルギーを充填する。

『Gray Ripper!』

「フッ!」

灰色に輝くスケルトンサイズを素早く振り抜きパスワードを両断した後、既に少し遠くにまで逃げていた隊長の兵士に向けてプログレスシックルとマニピュレーターのエネルギーを飛ばし、周囲の木々を切断しながら彼の両手足を切り飛ばしました。

ザバアアアーン!!?

「がっぐツツ☒」

「ゲームクリア」

地面と熱烈なキスを交わしている男の元へと走り寄り、男の頭を掴み上げる。

「とりあえず、色々吐いてもらいましょうか。向こうの行動、装備、それから…」

「…無理だよ」

「は?」

尋問を始めようとした矢先、男はそう呟いた。何が言いたいと問おうとした瞬間、手足の断面から血液とも違う赤黒い粘液が流れ出した。

「なっ…」

「こういう訳だ。残念ながら、お望みの情報は得られないよ」

おそらくは肉体が溶け落ちながらも男は言葉を紡ぐ。

「じゃあな、お前の顔は覚えてたぜ。また会おう」

それだけ言い残し、男は完全に液体となった。

「…クソッ!」

してやられた。僕はただ悔しさに歯噛みするしかなかった。

男の遺した『また会おう』という言葉の意味に気づかず…
What's the next episode…?

Ep. 14 「これから」

NO side

「跳、そっちはどうだ？」

鍊が人型の袋：体が溶けた兵士の死体を引き摺りながら跳の元に歩み寄る。

「……こっちもダメです」

「そうか。鎧の中に自害用のタンパク質溶解剤でも仕込んであったのか？」

「わかりません。ただ、向こうは絶対に情報を漏らす気は無いようですね。ご丁寧に通信用端末や記録装置もやられています」

跳が自身の側で斃れ伏す死体を指さす。その背部ユニットやヘルメットからは白煙が上がっていた。

「どれどれ……あー、ホントだな。こりや修復も無理そうだ」

「それで、これからどうします？ 近くに彼らの前線基地がありますが……」

「まずはそこに行こう。残しておいたらまた使われる可能性が高い、できるなら潰しておかないと」

「そうですね。防衛戦力は破壊するなり停止させるなりで無力化すれば問題ありませんし。残った非戦闘員は……」

「それはそのとき考えりゃいい」「了解です」

前線基地の処理の方針を固めた2人は、跳が先導する形で基地へと走った。森の向こう側には、跳が最初に見たときと変わらない基地が広がっていた。どうやら爆発の跡は修復済みのようだ。

「鍊、あそこの崖の方に行きましょう。様子を見るのにちょうど良さそうです」

「OK」

2人は崖まで走り、そのまま10mはありそうな崖のてっぺんまで飛び上がった……生身で。元から色々魔改造気味な鍊はともかく、跳はただの人間のはずなのだが。

「思った通り、基地の様子がよく見えますね」

「そうだな。大きさは30m×40mで、施設は中央に広場と通信棟、居住区が2区画、貯蔵庫が3棟。さらに工場兼兵器庫と思われる大規模な建物が2棟。外にある防衛機構は…俺たちがさっきいた場所を正面側として、固定砲台が正面側に2門、右手側に2門。左手側には捕縛用電磁ネットランチャーが1門か。森を背にしているためなのか、背面側に武装はなし」

「まずは、見えている範囲での防衛設備の無力化が必要ですね」

「それなら任せとけ。ちょうどいい奴がある」

そう言って鍊はDフォンを操作、虚空から鋭角的なフォルムのライフルのような銃、レーザーブラスターを召喚した。

「お、可変スコープが付いている。これがアップグレードの内容かな？」

ライフルのスコープを覗き込みながら、新機能の確認をする鍊。スコープのレンズ部分をグリグリと回していじり、すぐにやめた。

「よし、それじゃサクツと終わらせますか！」

鍊は地面に跪き、銃身を斜め下に向けて構える。スコープのレンズをグリグリと弄り、そのまま基地正面の砲台の少し後ろにある壁を狙い、撃ち抜いた。

「あの、どこ狙ってるんです？」

「まーこの距離からじゃ見えないわな…ちよつとこれ覗いてみ？」

「はあ…」

言われたままにスコープを覗いた跳は、すぐさま壁を狙撃した理由を理解した。

「配電盤が壁の中に…しかも、めっちゃくちや巧妙に隠されていますね」

「だろ？可変スコープと一緒に搭載されたサーモスコープがなかったら俺も分かんなかった」

鍊は続けて、左手側にあるネットランチャーに繋がっている配電盤を撃ち抜き停止させる。そのまま右手側の砲台の配電盤を撃ち抜こうとしたが、壁が一枚遮蔽となっている事に気づく。

（おっと、このままじゃ一発でブチ抜くのは無理そうだな。一発で破壊し損ねると警報に引っ掛かっちゃう）

ま、だつたら威力を上げりやいい話なんだけどね、と口だけで呟く
錬。ブラスタアの側面に付いているダイヤルを回して引き金を引く
が、すぐに離さず5秒ほど引いたままにする。

「…フアイヤー」

気の抜けるような掛け声とともに引き金から指が離れ、先の2発よ
りもより強い光を放つ光弾が壁を貫き配電盤を破壊した。

「よし、これで防衛機構は軒並み無力化…っと。おし跳、今からあそこ
に潜入すつぞ」

「分かりました。では今度は僕が行ってきます」

「あれ、俺は行かなくていいの?」

「僕は一度ここに侵入しています。だから、大体の構造は分かっています。それに、錬は隠れるのとか下手そうですし」

「おい今聞き捨てならねえこと言ったな? 誰がスニーキングドヘタク
ソだつて?」

「そこまでは言ってますよ。あなたは正面から殴り込むタイプじゃないですか、コソコソ隠れて潜入するのは性に合わないんじゃないんですか?」

「………わかった。行つてこい」

「了解」

そう言つて跳は崖を飛び降りた、生身で。重ねていうが彼はまだただの人間のはずである。

跳side

ズダンッ! ビイイイイン…!

「んんんんんん」

崖から飛び降りながら前腕と関節とにメタリカでできたプロテクターを装着し、左手・左膝・右足で3点着地。しかし衝撃を逃すことはできず痺れてしまいました。

「あゝ あゝあゝ…くうッ! 行きますす!」

基地の左手側の門を飛び越え、物陰に隠れながら基地の全域を探索する。今探しているのは兵器庫と通信室。兵器庫は残っているかもしれない未稼働の自律武装の搜索と破壊、通信室は基地掌握が終わつ

た後に残った非戦闘員への通達に使います。

「兵器庫はこの先と、ここを右に曲がった向こうのようですね」

僕は一番近いところにある建物に登り、そこから屋根伝いに距離が近いまっすぐ先の兵器庫まで跳び進む。目的の屋根までたどり着き、通気口を壊して侵入。そして今から、非稼働の兵器群を残らず破壊して…

ピ。ピ。ピ。ピッ…

『侵入者を確認、スキャン開始…失敗。^{エラー}不正侵入者と判断、これより迎撃を』

「させるか」

ズギャン！ドガン！ベキヤツ！

部屋に仕掛けられていた監視システムを蹴り碎き、そして動き出そうとしていた全ての無人兵器を破壊。そしてまた屋根の通気口を通って兵器庫を脱出し、今度は左手…さっきの通路から見た場合は右手…のほうにある兵器庫へと跳び、今度は派手に屋根を蹴り破ってダイナミックに侵入、無人兵器と監視システムを残らず破壊しました。「ふう、これ以後は通信室を制圧するだけ…よっ！」

蹴破った屋根の穴から兵器庫を出た僕は、基地の中央にある施設、通信室…正しくは通信棟の中央制御室…を指す。というか、仮の前線基地なのにやけに気合入ってますね。防衛システムしかり置いてあった武装しかり。

「お邪魔しまーす」

建物の真つ正面のドアにドロップキックをかまして突入、中にいた人たちをメタリカで形成した鎖で縛り上げます。思った通りに動いてくれるので、かなり便利ですよこれ。

「えーっと制御室は…こっちだな」

通りすがった人たちをメタリカでぐるぐる巻きにしながら制御室まで進む。

「ここですね…おりゃ（バキッ）、開いてますね、ヨシ！」

制御室の前についた僕は認証装置を殴って破壊し、ちょうど開いていた（お前が開けたんだろとか言わないでください）ドアをスライド

させて部屋に入る。

「はい皆さんこんにちは、そして動かないでくださいねー」

そう言いながら鎖で制御室にいた全員を拘束する。

「単刀直入に言いますように、ここの責任者は誰ですか？」

あまり怖がらせないよう、笑顔で一番近くにいた女性に問いかけると、彼女は震えながら椅子ごと拘束された男を指差した。

「ありがとうございます」

女性に礼を言い、男の元に向かう。椅子ごと縛り上げられた小太りの男が、苦悶とも憤怒ともつかない表情で暴れていた。

「こんにちは。あなたが責任者で間違いないんですね？」

「き、貴様あー私に何をしているのか分かっていいのかあ！早くこの鎖を解けえ！」

僕の問いかけに対し、唾を飛ばしながら拘束を解けと騒ぎ立てる男。

「質問に答えてくれたら考えますよ。それで、あなたが責任者で間違いないですよね？」

「ああそうだ！クソツ、護衛の奴らは何をしている☒」

「護衛？ たった6人の兵とガラクタで護衛とは、随分舐められたものですね」

「何☒…そうか貴様、例の裏切り者か！」

「ええ、例の裏切り者ですとも。それが何か？」

いけしやあしやあと答える僕を見て、男の歯噛みが歯軋りに変わりました。

「グツ…こんな若造一人も潰せんなどは…使えん奴らめ。補給員もだ！こんな奴をみすみす侵入させて、見回りの一つもできんのか！やはり移民など使えもせんクズばかりか」

「…おい、今何と言った」

「何？」

「『今、何と言った？』と聞いたんだ」

「チツ…私達の役にも立たんものをクズと言って何が…グブウツ☒」

目の前で喚き散らす豚、ああ、これでは豚に失礼か。であれば、豚

未満のカスの顔面に、怒りのままに右ストレートを叩き込む。尋問のために生かしておくという考えは、既に頭からは抜け落ちていた。

「…お前らは変わらないなア、特権階級であることに驕って、俺達を痛ぶって、奪い取って、罾り殺して…」

「な、な…」

「俺はなア、お前らみたいな生まれや地位の違いで他人を見下す奴が大嫌いなんだよ！」

ああ、見ているだけでイライラする。すぐにでも首を捻じ切ってやりたい位だ…！

「そうか、貴様移民の出かグググツ、裏切り者、それも移民風情が私に傷をつけるなど…許さん、許さんぞオ！必ず貴様を潰してやる！私の総力を持って貴様の一族、仲間も全て葬ってゲボオ」

吠え声がうるさかったからカスの腹を思いつき蹴りつけたら、縛られていた椅子ごと吹っ飛んでいた。いつの間にかカスを縛っていた鎖が消えて脚にメタリカが装着されていたけど、どうでもいいか。

「ゴボツ、オゴツ、オゴエエエ…」

「…汚ねエな」

床に血混じりのゲロを吐き苦悶するカスの頭を蹴り飛ばす。首を蹴り折ることもできたが、もう少し痛めつけたかったので少し加減した。

「ヒツ、ヒ、ヒイイイ…」

3回も思い切りぶちのめされたのが効いたか、カスの顔が恐怖に彩られ股間はじつとりと濡れている。

「無様な姿だなア…死ね」

トドメを刺そうと脚を振り上げようとしたそのとき、

「ま、待ってください！いや、待ってください！もう貴方に手を出すようなことは致しません！発言の全ても撤回します！だからどうか、命だけは、命だけは助けてください！」

カスが無様を通り越して滑稽ささえ感じさせるような命乞いをしてきた。ここまでされてまだ助命して貰えると思うなんて、呆れるほどおめでたい頭をしているな。思わず爆笑してしまったよ。

「フ、フフフハハハハハ、アハハハハハハ！」

「い…？」

「いやー笑った笑った。こんなに笑ったのは久しぶりですねえ。そう
だ、貴方の処遇ですが…一息に殺すのはやめにします」

「！た、助けてくださるのですか☒」

一瞬の希望を見たような顔で僕を見る男に優しく微笑み、その両手
足を杭状に変形させたメタリカで壁に縫い止める。

「代わりに…5回削ってやるよ」

「いぎ…うぎ、ギヤアアアアア☒」

壁に磔にされたカスが絶叫しながら暴れる。耳障りだなア…まあ、
すぐに消えるけど。

「静かに」

右脚の装甲を正八面体が複数組み合わさったような複雑な突起に
覆われた回転円錐に変化させ、それを振り抜いてカスの右腕を削り取
る。そしてもう一度脚を振り今度は左腕を切断する。3回目、左脚を
削り、体重を支えきれずカスの右脚が折れる。4回目、右脚を削って
達磨にする。身体を支えるものがなくなったカスが床に転がった。

「これで最後、何か言い残すことは？」

「わ、私は…」

「まあ、聞かないけど」

高く上げていた脚を振り下ろし、螺旋錐がカスを肉塊に変える。血
の混じったミンチ肉が辺りに飛び散る光景を見ながら、僕は息を吐
く。

「ふーっ。さて、あとは向こうとの通信を切って…」

カスが座っていたところにある操作盤をいじり、時空間通信システ
ム、座標データの送信を停止させる。

「さて、次は…そうだ、鍊にここの制圧が終わったことを伝えないと。
1番手っ取り早いのは…ここで放送しちゃえばいいか」

先程の蹂躪、というか殺戮を見て気絶した人達の横を通り過ぎ、マ
イクのついた操作盤の前に立つ。

「えーっここをこうして…あーあーマイクテストマイクテスト、み

なさん聞こえてますかー?」

操作盤をいじって範囲を基地全体に設定、マイクテストのために一言喋る。

「まあ返事なんて来るわけないか。じゃあ、聞こえているということを手短にいけますよ。この基地の予備戦力は残さず破壊済み、通信棟の中央制御室は完全に僕が掌握しています。信じられないなら武器庫をどうぞ、全部使い物にならないと思いますので」

鍊side

跳が崖から飛び降りて数分、俺はスコップ越しに基地の様子を見ていた。というか、あいつ生身で飛び降りてったけど大丈夫なのか?

「んんんんん」

あ、やつぱりダメだった。まあ、あいつのことだからクツション：は持つてなかったから、確かメタリ力とかいう流体金属なりなんなりで衝撃吸収はしてるだろうな。

(さて、基地側の様子は：アイツ早っ！もう中にいるんだが)

再度スコップを覗き込むと、その中にはすでに基地の施設内で物陰に隠れながら移動している跳の姿があった。さつき悶絶する声が聞こえたばかりだというのである。

(えーっと、屋根伝いにまっすぐ進んで：あ、止まった。で、屋根についてる通気口っぽい穴を蹴り壊して入ってたな)

1分か2分経ったところで屋根の穴から跳が飛び出し、左に大ジャンプ。その勢いのまま建物の屋根を蹴りで貫いて突入、また2分程で屋根から脱出した。

(んで、今度は基地の中央にある建物、多分通信棟とか情報室とかに真っ正面から侵入。さっきの突撃で余剰戦力全部片付けたにしても、これは大胆過ぎないか?)

何か大ポカやらかすんじやないかと心配になりながら待つこと15分。基地の方から聞こえてきた放送を聞いて、俺のこの心配は杞憂となった。放送の内容は余剰戦力の壊滅と中央制御室の制圧完了。放送の声の様子からして、ポカをやらかしての負傷はなさそうだ。

『これから現在この基地にいる人員の確認をしたいので、今この基地

にいる全員通信棟の前に集合してください。繰り返します、今この基地にいる全員は通信棟の前に集合してください』

さて、俺も行くかな。

NO side s

森の一角に展開された仮設基地、その中でも一際大きな建物：錬達通信棟と呼んでいたもの：の前に老若男女様々な人が集まっている。この基地に残っている人員の大半だ。皆不安そうに話し合っている。

「はい、とりあえずそこに並んでください。手荒なことをしてすみません、どうしても抵抗されなくなかったので」

跳が鎖で縛られた男女を連れてくる。彼らは全員が彼のことを怯えた視線で見ていることに跳は気がついた：が、無視して話を進める。

「はい皆さん、集まってくださってありがとうございます。それでは早速一つ質問を、この中に戦闘員及びここに配備されていた兵器を扱える方はいますか？」

自分が連れてきた人が集団に入ったのを確認した跳は、挨拶がわりと言わんばかりに質問を繰り返した。当てはまる人がいるなら挙手をお願いします、と彼が呼びかけるも誰も手を挙げることはなかった。

「あれ、誰も挙げませんね。ほんとに非戦闘員しか残って無いんですか？」

「…ああ、ここにはもう戦える奴はいないよ。嘘なんかじゃないさ。ここで嘘を言ったって意味は無いだろ？」

跳の問に答える形で、年配の男が諦めたように呟く。跳は男に見覚えがあった。自分が最初に基地に侵入したときに気絶させた男だった。

「貴方は、あのときの……」

「…アンタだったのか、あの時ののは」

「すみません。姿を見られなくなかったからといって、いきなり首を絞めたりなんてして」

ろオ！」

怒りの一喝に、鍊の脳に響いていた声が勢いを失う。ようやく終わりが、と安堵する鍊の耳に別の声が響く。

「分かった、今は静かにしててやる。だが、俺はいつでもお前を見ているぞ…?」

その声と共に、鍊から憎しみの合唱が消えていく。声が完全に消えると同時に、彼は膝から崩れ落ちた。

「ッ、大丈夫ですか☒」

「ハアツ、ハアツ、ハアツ…だ、大丈夫だ…」

地面に倒れ伏す前に跳に支えられ、何とか立ち直る鍊。そんな彼に向けられるのは、群衆の怪訝な視線だった。無理もない。目の前で見知らぬ人がいきなり耳を塞いで、大声で叫べば誰だって困惑するだろう。

「…悪かったな、話を切つて。それで、アンタらを向こうに帰す手段だが、ちよつと待ってて…」

おーい紫ー！聞ーこーえーてーまーすーかー！

」

「そんな大声で呼ばなくても聞こえてるわよ」

「あ、いた」

虚空に向かつて誰か呼んだ鍊、その隣の空間が突然裂け、そこから女性、八雲紫が現れた。その光景を何度も見ている鍊は特にリアクションを示さなかったが、跳を含めた全員は啞然としていた。

「…あく、これは説明があるな。彼女は八雲紫、この創造者、というか管理人？そんな感じ。ちなみに人間じゃないらしいぞ、妖怪なんだとさ」

「全部言っちゃったわね…まあいいわ。改めて、私は八雲紫。この幻想郷を管理をしている妖怪よ」

鍊に自己紹介のチャンスを取られ、嘆息しながらも自己紹介を済ませる紫。

「妖…怪…？まあ、人間に近い存在って考えればいいんですかね？それで、彼女には何が？」

「んー、詳しく話すとは難しくなるからなー。端折つて言うと、別世界同士を繋げられるってところかな」

「端折り過ぎよ。正しくは、私の能力の応用でそういうことができる、ってことよ」

「世界を繋げる…？あつちの技術でも大規模な装置を使わなければ不可能なことが、たった1人で…？」

「ま、この世界は向こうの常識が一切通じないらしいからな。てか、あのポータルがそんな馬鹿デカイ装置に繋がってんのか？」

「…ええ、大規模な転送を行うものならね。出口は四足歩行戦車一台がやつとの大きさですが、入り口はプラント丸々一つを占めるほどの装置の中ですよ」

「…それを稼働させるエネルギーとか絶対馬鹿にならない筈なのに、よく何度も動かしたな」

「それだけ、この世界が魅力的なんでしょうね」

2人だけで話を進める鍊と跳に、僅かにイラつきながら紫が声をかける。

「…それで？私を呼び出した要件は？」

「ああそうだった。そこにいる人達を、向こうの世界に送れないか？」

「それは出来るけど、大丈夫なの？その人間達って敵側なんですよ？帰しちゃったら戦力の増強にならないかしら。寧ろ、ここで弱い妖怪の餌に…いや、もっといい方法があったわね」

「ホントか☒」

群衆を敵に送り返すことへの懸念を示す紫、何かを思いついたようだった。

「ここにいる全員を人里に住まわせるのはどうかしら？ざっと見た感じ25人かしら、このくらいならまだ住めるわよ」

「よし、それなら…あ、その前に確認。この中に家族がいる人、手挙げてる」

鍊の問いかけに、全員が手を挙げる。

「全員か…なら、家族が1人の人、手を下げて」

その問いかけに半数が手を下げ、2人、3人の質問には残りの3分

の1、その4分の3が手を下げる。そして、2人が手を挙げていた。

「2人残ったか…人数は？」

「4人。両親と、弟が2人」

「6人です。兄と姉と弟が1人ずつ、妹が2人です。両親は早くに死にました」

「…さっきの3倍くらいになったな。さすがに厳しいか？」

「…50人でギリギリね」

「そうか…ん？そうか…そうだ、そうしよう！」

紫の返答に少し落胆した鍊。周囲を見渡した彼は、何かを思い付いたようだった。

「何か思い浮かんだの？」

「ああ。どうせならここを使ってやろうか、って」

「ここ、ですか？…ひよつとしてこの基地の跡を？」

「その通り。ちょうどいいくらいに居住区があるし、さつき壊しちゃったけど防衛設備も複数ある。防衛設備については少し改造するとして、それらを使えば残りの20数人くらいは軽く住めるはずだ」

「森を切り拓く時間がいらなくなるぶん、かなり効率的ね」

鍊の提案に、跳は驚き、紫は感心する。そうして、群衆の方を向いて彼は一言。

「おっと、一番の当事者達に聞くのを忘れていた。とりあえず、こっちに住まわせるためのプランなら決まったけど、アンタ方はどうしたい？別に無理してここに残る必要はない、向こうに帰りたいならそうしてもらって構わない。全部そっちの自由だ」

群衆は沈黙する。その多くが未だ迷っているようだった。そんな中から、1人の声があがる。年配の男、跳が気絶させた男の声だ。

「…俺は、俺と家内はここで過ごそうと思う。どうせ向こうに戻ったって理不尽に虐げられるだけなんだ、こっちで暮らしてる方が幾分もマシだよ」

彼の言葉に続くように、他の人々も口々に家族と共に幻想郷で暮らすことを宣言した。向こうの世界で意味もなく傷つけられるくらい

ならいつそのこと逃げてやろう、そんな感情が彼らの目にはあった。「分かった。住居はこのものと後で案内する集落のものを使つてくれ。壊れた防衛機構の修理とパトロールの為に、何日かに1回俺がここを見に行くが、何か不都合はあるか？」

「いや、ない。むしろ、我々が平穩に暮らせるよう手助けしてくれることを感謝しているくらいだ。そうだろう？」

男の呼びかけに群衆が肯定の声を上げる。

「分かった。というわけだ、紫、一気にやってくれ」

「分かったわ。まったく、人使いの荒い…」

愚痴を吐きながら、紫は先程自分が出てきたものの10倍ほどのスキマを開く。程なくしてスキマの中から20数人の人間が出てきた。紫が記憶の境界をいじって群衆の家族の情報と住居の場所を読み取り、それぞれの場所に一齐にスキマを開いたのだ。突然見知らぬ場所に飛ばされ不安がる彼らに、各々の家族が状況を説明し、再会。しかししたらそんなに間が空いてはいないかもしれないがーを喜んでいた。

「ハイハイ。喜ぶのはいいけど、これから住む場所に移動するぞ。とりあえず1世帯の人数が多いところは優先的に向こうの集落の方に連れて行く。50人が限界だそうなので、余ったほうはこの居住施設を使つてもらおう」

そう言つて鍊は人数の増えた群衆を世帯の人数ごとに分けていく。

「それじゃ、この50人にこれから住む集落を案内する。跳、残りは頼んだぞ」

「頼まれました。では皆さん、ついてきてください」

そうして跳は基地内の居住区域に群衆を連れて行く。複数並んだ仮設住宅の前に並んだ彼らに、カードキーのような物を渡す跳。

「この建物の鍵です。1世帯に1つ渡しておきますね。もし改築したくなつた時には僕かさっきの彼に連絡してください。後で通信棟の設備を改造して僕らに通じるようにしておきますので固定電話から掛けてください。番号は…」

青年番号配布中…

番号を教え終わり、全員が各々の住宅内に入っていたのを確認した跳はその足で通信棟に向かい、中央制御室へと向かう。中央制御室には機能が生きたままの端末と跳の怒りを買った男の無残な死体以外、何も残っていないかった。

(…どの端末もこの施設に関連するものばかり。向こうと連絡を取るための端末はどこに……)

「この壁、ドアになってますね。この先は…地下ですか」

室内をしらみつぶしに調べていた跳は、大きなモニターの右隣に、地下へと続く階段を見つけた。その向こうからは何かの駆動音が聞こえる。

「この先に、目当てのものがあるか………見つけた」

トラップの危険性を考えることなく、一まあ、あったとしても無理矢理破壊して進むわけだが、階段を降り、その先にある部屋に入る。その中にはコンピュータのサーバーが所狭しと並べられ、いくつかの制御盤が一番奥に鎮座していた。

「サーバールームか」

サーバールームへと侵入した跳は、並び立つコンピュータの間をくぐり抜けながら奥へと進み、制御盤が並ぶ場所まで辿り着く。

「これはコンピュータの統括、これは冷却水や電力供給の制御…あった、向こうとのデータ通信」

目当ての制御盤を見つけた跳は、素早く基地の座標データ送信を止め、偽のデータを送りつけた。そしてデータの送信がされていないかの確認を始める。

「ええっと…映像通信、周辺地域の観測データは無し。まあ、見た感じ今日来たばかりそうなので当たり前ですかね」

他にも不都合なデータが送られていないかの確認を終わらせた跳は、制御盤を何度も蹴り飛ばして破壊する。もし誰かに見つかったも再度通信されないようにする為だ。

「さて、これで仕事は終わり。地上に戻りますか」

「おう跳、やることは全部やった感じか？」

地下室を出て、通信棟の出入り口をくぐった跳びに、ちょうど通信棟を通りかかった鍊が声をかける。

「ええ」

「そうか。それで、だ。お前はこれからどうするんだ？」

「どうする、とは？」

「住むところだよ。お前最近この辺を放浪してたんだって？お前の実力なら獣には負けないだろうけど、飯の調達に困るんだったら人里辺りに住んだほうがいいんじゃないか？」

いつの間に、という表情を浮かべる跳。確かにここ最近木の上や山に出来た洞穴を寝床にしていた上、食べ物に困っていた。しかし、これらは鍊の知る余地もないはずの情報なのだ。

「…どうしてそれを？」

「紫に聞いた。妖怪の山付近で人間がウロウロしているってさ。あいつ幻想郷の全域を見れるから、見慣れないものは分かるってさ。まさかお前とは思わなかったよ」

「そうですか…：生憎ですが、それについては遠慮させていただきます」

「ほくん、そりやなんでだ？」

「今は敵対しているとはいえ、元はここに迷惑をかける輩の仲間。そんな奴が人里に出入りしたら、周りの方も気分が悪いでしょう？」

「いや、顔は知られてないから大丈夫だと思うけど…」

「だとしても、僕自身がやりたくないんです。迷惑をかけたくせに、平気な面して生活するなんてことは。それに、一人暮らしは慣れてますから」

そう語る跳の目は、どこか寂しそうだった。

「…そうか。分かった、好きにしてくれ。無理強いはしない。でも、気が変わったら教えてくれ」

「…：変わりませんよ」

そう呟き、跳は去っていった。

What's the next episode…？